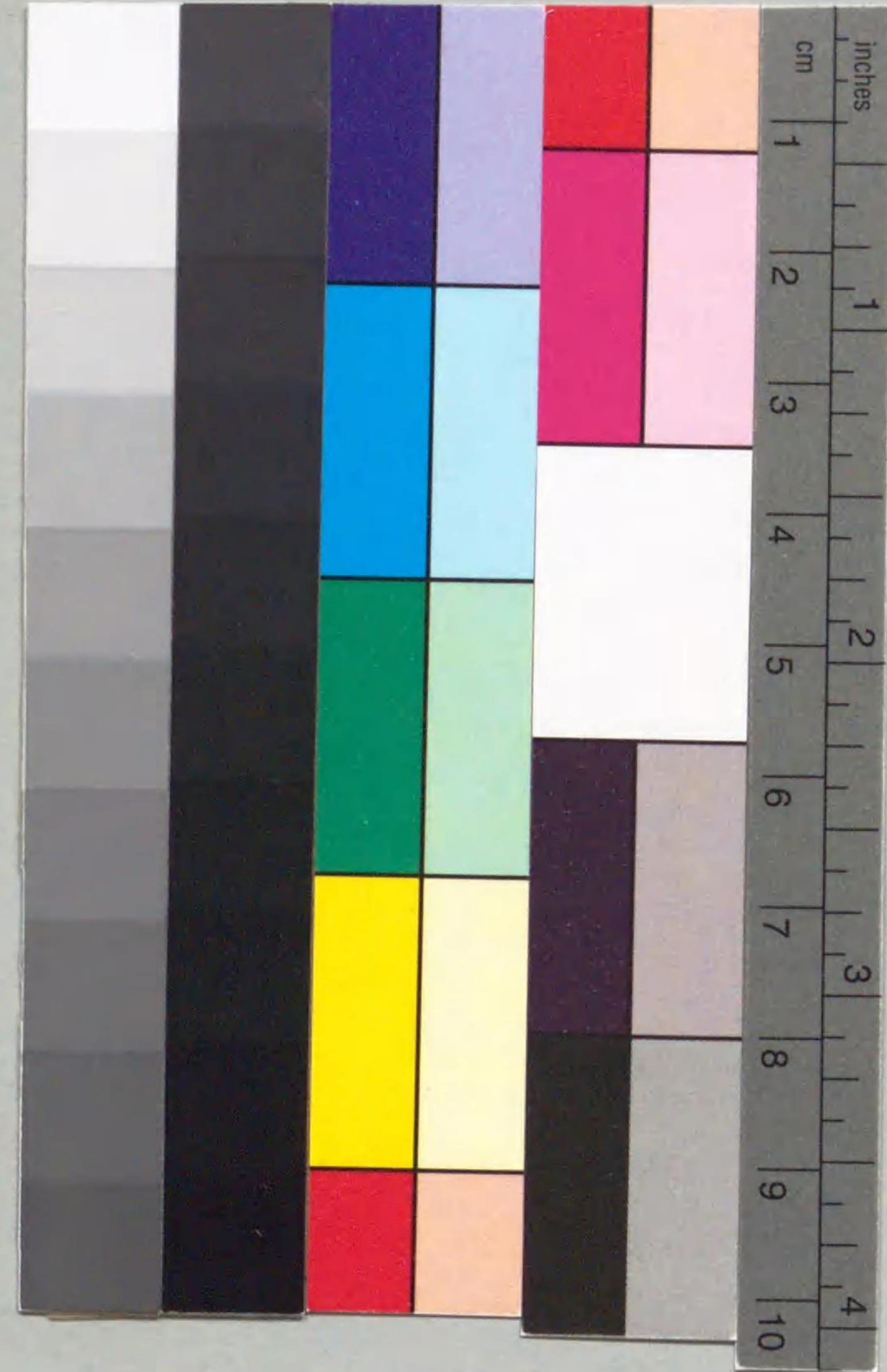


915.6
M949s



00031343

×
複写





1911-47

支那風物記

村松梢風著

河原書店發行

915.6

M949x



31343

序

私の此の隨筆集は、主として平和な支那の姿である。現下の支那は、日支事變といふ悲むべき大きな禍中に在るから、現在の支那を見て來た人にとつては、私のかういふ描寫は、餘りに縁遠いやうで、架空の談か、あるひは遠い過去の夢物語か何んぞのやうに響くかも知れないが、決して架空でも昔しの夢でもなく、私は是が本然の支那の姿で、現在も矢張り變つては居らず、將來も續くものであると確信してゐる。

現代の支那は、其の誤まれる政治思想が禍因となつて、限りなき不幸の中へ民衆を叩き込んでゐる。併し、我國の隣國に對する深い友情と良き理解は、やがて兩國の國交を調整して、大陸の平和を招來するに相違ない。其の時節になつて、人が自由に支那を旅行することができ

る時が来れば、諸君は私の此の隨筆にある通りの、いろんな物を見て、いろんなことを考へさせられるのである。素より私の見聞は狭く、觀察は淺薄を免れないが、尠くとも嘘は書いてない。私自身が支那へ旅行する間に體驗して、面白かつたり、驚いたり、又は美しいと感じたりした、さういふ事を書き集めたものゝ一部が此の隨筆集である。

戦争で荒み疲れてゐる支那だけが支那ではないといふことを知つておくことも、此の際徒爾ではあるまいと考へる。

昭和十六年孟春

著者

目次

端溪の硯	一
南京の思ひ出	六
上海風俗	一〇
我不關焉	
黄包车	一五
大世界	二四
詩謎	三三
南京支那料理	四一
北京・上海・廣東	
北京雜記	四九
打茶園	
北京料理	

紅樓夢の舞臺

二

支那の社會相

六九

乞食と淺飯

乞食の種々相

金持と貧乏人

宿命的支那

江南の風物

九

風景の印象

建築

支那の庭園

市街の風景

茶館

女權運動家鄧蕙芳女史

陳塘

いかもの料理

處女の不婚同盟

孫中山の故郷を訪ふ

洪秀全の故郷を訪ふ

一四

熱河の印象

一五

飛行機の旅

湯砂輔の風呂

美人の多い承德

日本氣分漲る

阿片畑と月と

西、川原兩將軍 上、下

張海鵬軍將

蘇州遊記

一八

西湖遊覽記

二〇

三

支那風物記

村松梢風著

上海の黒車……………三六

四

宋美齡……………三五

地下に棲む人々

蘇洲情話

端溪の硯

—

手許に一面の硯がある。うす赤味を帯びた端溪だ。頭の方に荷花の彫刻がしてある。古い硯ではなくて、勿論大した代物ではない。しかし端溪であることは紛れがない。私が端溪の本場カント廣東省の肇慶から買つて來た硯なんだから。思ひ出の種を書けといはれてふとその硯を見るとカント廣東省の奥地を流れてゐるあの西江の巨流の姿だの、日本では見られない不思議な形をした山の姿だの、沿岸の村落だの、都市だの、いろんなものが記憶の底からぼつかり浮かんで來る。

廣東と廣西の境省の附近は山丘重疊で、西江はその山丘地帯を突破して流れ出してゐる。廣西の梧州へ行き着くまでに峽が二つある。羚羊峽、次が三榕峽だ。揚子江の三峽の峻とは比すべくもないであらうが、雲は左右の嶺に横はり、江水は樋のやうに狭くなつて、速きこと矢の如く、龍でも飛び出しさうな渦を巻き、地軸を搖がす音を立て乍ら押し出して來る光景

—

は正に自然の威力そのものだ。

天下の名硯をもつて鳴る端溪は羚羊峽の入口で江を遡つて行くと東岸に見える一つの溪の名稱だ。私達が乗つてゐた汽船がこゝを通つたのは時刻も日暮近く、溪の附近に何やら小屋のやうな物が見え、一艘の小船が岩間に曳き込まれたまゝ朽ちたやうになつてゐる。外には何物も見えなかつた。これが音に聞く端溪かと思へば物足りなくもあれば淋しくもあつたが聞けば無理もない咄で現在で、名ばかり残つてゐて六十年前から廢坑になつてゐるといふことであつた。

羚羊峽を通り抜けると直ぐに肇慶だ。肇慶は古い都會で現在は高陽縣の首府だ。汽船がこゝへ着いたのは夜の九時頃で、江岸の通には夜店が澤山出て人がぞろ／＼歩いてゐた。汽船は岸に着かないので小船で客を降ろしたり乗せたりして運んでゐる。乗る人、降りる人、見送人、出迎人、幾百の群衆が、聲を限りに叫び合ひ、吾れ先と争つて可笑しい程雜鬧喧騒を極める。其の群衆の中に佛蘭人のカトリックの尼僧が二人立つてゐたが一人は齡も若くすうりとした恰好で貌立ちも美しかつた。やがて下船した中國人の女學生風の女と互に擁き合つて喜んでゐた。

その晩は、十五夜位の月で、一天澄み渡り、えもいはれぬ好い晩であつた。

この旅は、廣東の總領事をしてゐた須磨彌吉郎氏が、書記生松本益雄氏を滯同して、廣西で李宗仁、白崇禧と戦つてゐた陳濟棠に會ふために梧州へ行くといふので、私も懇望して連れて行つて頂くことになつたのであつた。そんな事でもなければなか／＼廣西などへ入られるものではなかつた。

梧州で目的通り陳濟棠と陳策に會つて、再び西江を降り、歸途は肇慶で下船した。

二

肇慶の近くに七星巖といふ名所がある、浅い湖の中に七つの岩山が屹立してゐて、慥かに天下の奇景であつた。私達は張綸氏といふ日本留學生出の縣長の案内で最初に七星巖を見物し、それから肇慶の町を見物した。こゝは明末の桂王が一時據つた處として歴史上に知られてゐる。町には端溪専門の硯屋が三、四軒あつた。昔はもつと澤山あつたさうである。

何故端溪が廢坑になつたのかといふと、それは硯の石が出なくなつたからでなく、元來その硯坑は水中にあるので冬の最減水期でなくては採掘が出来ない。採掘期間は一年中に僅か

二ヶ月位しか續かない。西江の夏と冬の水標の差はこゝより上流の梧州では七十呎である。端溪の邊はどれ位か知らないがとにかく増水期には數十尺の水底に沈没して仕舞ふのだ。而も坑内に働く者百五十人を要し、その多くは水を汲んで搬び出すためである。かういふ事業だから採算がとれなくなつて、六十年この方完全に採掘を中止してゐるといふ話であつた。

しかし硯屋へ行くと昔採つた硯石が澤山藏つてあつた。一番新しいといつても六十年の石だ。石にはそれ／＼年代が記してある。端溪の硯はいつの時代から採りはじめたものであるかそれは聞き洩した。こゝの硯屋にあるのは多くは海も縁もない平らに磨いたゞけの石だ。

須磨氏はその時分から美術骨董にかけては玄人裸足で、肇慶でも骨董屋の前を通りすぎりに漢の銅器をちよいと拾ひ出すくらゐの腕前で、硯などもよくわかるから二三面相當な物を買ひ込んだ。私は格別趣味も無いがやはり記念のために同じ型の硯を二面買つた。廣東銀の十二、三圓、當時日本金では一面六、七圓の安物だ。何しろ硯の土産は重いので閉口する。それを靴へ入れて日本まで持ち歸つた次第であつた。

私達は肇慶で一泊、翌日民船で羚羊峽を下り、北岸の羅忍といふ村で上陸して鼎湖山慶雲寺

へ登つた。其の時「挽」と云ふ不思議な乗物へ乗せられて山道を搬ばれたことを思ひ出す。此の地方の石質は一體に硯に適してゐる。鼎湖山の山道に敷いてある無数の滑らかな石の中には折柄の細雨に濡れて見事な色澤を出して居る石が澤山あつた。

鼎湖山慶雲寺は住僧五百人、參籠者時に一千人に達すると云はれる南支第一の大寺で且つ靈場であつた。私達は雨に閉ぢこめられて四日間この寺に滞在した。

西江の旅の思ひ出は盡きない。私は間もなく歸國し、須磨氏は其の後北京へ行き、南京へ赴任し、更に米國へ渡り、今は本省へ歸つて情報部長として霞ヶ關で光つて居る。併し支那ではともかく日本へ歸ればお目に掛る機會は無いのである。松本氏は消息を知らない。一面の硯はよく會遊の山川を映じて呉れるが、人は一度び離れて復た相見ることとは容易でない。

南京の思ひ出

六

私が南京へ行つたのは民國十二年と同十七年の二回で、その後は行かないからごく近年の状態は知らない。しかし民國十二年は蒋介石の北伐前であるが、十七年の時は南京政府が出来てすでに二、三年経過してゐたから、その短期間における歴史的な大變化をマザ／＼と對照することが出来た。ある國家が大革命を行つた時のその國都に充滿する活氣、亂雜、破壊と建設、新しく興つたものの得意と亡び行くものの悲哀——さういつた光景を二度目の旅行の時はイヤといふほど見せつけられた。

當時南京の婦女子は老若を問はず鼠色木綿の上衣を着て、切り立ての斷髪であつた。鼠色は軍服と同じ色だ。婦女子の斷髪令が出たのは確かその年邊りのことだと思ふ。理髪店では看板を「男女理髪」と書き替へてあつた。そして女髮結は一齊に失業した。女學生も賣笑婦も一律に鼠色の服を着て市中を濶歩してゐた。子夫廟フイメミヨウの盛り場の茶館へ出て唄をうたふ女藝人までが矢張り鼠色の服を着てゐた。有名な秦淮の妓女は南京政府成立の直後に禁止追放の運命に遇つた

から、公然と南京の夜を彩る女群といつてはこの外にはなかつたが市政府の彼女たちに臨む取締はかなり厳しかつた。その取締規則の中には「女學員は脂粉を塗り或は耳飾、胸飾等をなすことを得ず」とか「女學員は家族を除くの外男性と偕に飲食をなすことを得ず」などといふ箇條があつた。

私が行つた頃は女軍人といふ者はなかつた。

一時評判であつた劉紀文といふ市長が盛んに辣腕を揮つて道路を造つてゐた。ところがこの劉君は許淑珍女士といふ素晴らしいモダン美人の細君を貰ひ新婚旅行に出掛けたまゝ一月以上も南京ナキンへ歸つて來なかつたことから大攻撃を受け、遂に失脚の憂目に遇つたのは氣の毒であつた。私は屢々街路上で馮玉祥がトラック自動車に乗り衛兵を一杯立たせて埃をあげて疾驅する姿を見掛けた。一度彼を訪問したがその住宅は床も壁もアンペラで馬小舎のやうであつた。民國十七年の暮には、中山陵は工事の八分通り竣工してゐた。紫金山の麓のあの原野に無数の蒲鉾小屋が散在するのがこの工事に従事してゐる人夫の住居だつた。

その年の秋は雨が多かつたが何處へ行つても菊の鉢植が置いてあり、城内到る處に見られる池のやうな水溜りの側にある楊柳の葉が日毎に散り行くのも趣きがあつた。十二月へ入ると

七

急に寒くなつたが當時南京は石炭すら缺乏で、旅館に泊つてゐる者は薪を買はせてストーブへくべた。

徐州へ行つてゐた蒋介石が暗殺されたといふ風説が忽ち城内に廣まつたり、城内まで大部隊の匪賊が襲撃して來たり、壁といふ壁には、三民主義禮讚、共產黨排撃、打倒日本帝國主義等の標語がペンキで大書してある——さういつた南京であつた。

南京の名所として私は莫愁湖と燕子磯が好きだ。莫愁湖は西部城外にある周圍一里くらゐの水の浅い湖だ。湖畔に諸葛孔明が呉に使用してこゝで棋を闘はせたといふ勝棋樓その他の古建築があるが、過半は荒廢朽腐してゐた。然し勝棋樓には有名な莫愁の姿繪と歌とを彫つた大理石の碑が壁に嵌め込んであつてその石刷を賣つてゐる。莫愁湖へ行く途中、水西門を出た處の河に架けた覓渡橋といふ石橋がある。幅六、七間長さ四十間ばかりの橋を全部石で造つてある。それが明代の築橋で非常な古風珍しい橋であつたが今はコンクリート橋にでも替へられたかも知れない。以前はこの橋の上にギツチリと飲食店が建ち並んでゐて僅に中央を一間ばかり通り路があいてゐるといふ始末、橋上市街を現出して、いかにも支那の城門外らしい古代そのままなる市井の縮圖を見せてゐて面白かつたが、二度目に行つた時は橋の上の街はすっかり取り拂は

れてゐたので私は失望した。けれども石橋は以前よりよく見られた。

燕子磯は乾隆帝も遊んだ江南の名所だが、現代の人は殆ど行かない。神策門を出て紫金山を右に眺めつゝ田舎道を二里足らず行つたところに揚子江の支流が横たはつてゐるが、その江岸の一漁村が燕子磯だ。何も無い河岸に突兀たる岩石の小山が飛び出してゐるのが多少の奇觀を呈してゐるが、他はごく穩かな景色で、滿村楊柳につゝまれ、江を隔てゝ一望千里蘆荻の原。家鴨が群れ、豚が走り、路上に魚を賣る男、農婦が手に野菜を掲げて來る。宛然たる好南畫だ。私は誰か日本の畫家で燕子磯を畫く人はないかと思つてゐる。

南朝四百八十寺、多少樓台煙雨中——現代の南京にはとてもそんな趣はないが、然し、建物は壞されても、歴史は消滅しない。あの腕蜒百卅支里あるといふ偉大な城壁を見るだけでもわれ／＼はロマンチストになれる。北京城に比べても南京の城壁はより以上雄大だから胸を躍らせずにはゐられない。千七百年の昔、呉の孫權が此處に都を建てたのだといふ。明の太祖の建業は五百有餘年の昔だ。太平天國の洪秀全は十年の間皇帝と稱したが、今より七十六年前日本の元治元年に滅びた。最後が今度の蒋介石だ。大民族の治亂興亡、榮枯盛衰、英雄の末路、さういつたことが數限りなく繰返されて來た。人は到る所に神祕の夢を見出すであらう。

上海風俗

一〇

我不關焉

『我不關焉』といふ言葉は我々が日常使つてゐる。

私は上海ではよく一品香といふ支那旅館へ泊る。其の前の通りは西藏路といふ街だが、片側街で、一方は競馬場に接してゐて、道路は廣いが電車が通つてゐないので、落ち付いて感じが良い。或朝私が帽子を冠らず表の街路を散歩して引き返して來ると、宿の少し手前の處で一人のクリーが押して來た一輪車を道でひつくり返して、それを起さうとするが一人では起きないので非常に困つてゐる。何かの荷を附けてゐて相當に重たいせいもあるが、全體あの一輪車といふやつは調子一つで押して行くもので舵を取り損なつて横倒した日には始末が悪い。誰か手傳はなければ元の位置に直せない。が支那の荷車は皆一輪車だ其の代り田舎のどんな狭い畔道でも押して行けるといふ取柄がある。其の一輪車が倒れてゐる。誰か手傳つて起して遣れば

いゝのにと思ふが、通行人は誰も彼も平氣で見流して通つてしまふ。往來の向う側には、人力車夫が十臺餘り車を並べて客待ちをしながら此の様子を眺めて面白さうに笑つてゐるが誰も手傳はうとする様子はない。旅館の三階の表の部屋からも私の馴染のボーイが二人ほど顔を出して見物してゐる。そこで私は自分が手傳つて遣る氣になつた。人前で別に道德家振らうの何のといふ程の事ではない。其の場へ行き合せて見れば傍觀しても居られない。大して力の要る仕事でもないから手を貸して遣つたまでだ。車は難なく起きた。處がクリーは別段「有難う」とも云はない。眞黒な佛頂面の汗を拭きもせず不愛相な表情をしてチラと私の顔を見ればかりで黙つて車を押して向ふへ行つてしまつた。私も別にクリーから感謝されることを期待してゐたわけではないから、そんな事は氣にも留めなかつた。全體支那人は滅多に「有難う」を云はない。物を贈つても、誠に迷惑さうな顔をしてゐて受けて呉れたのだから呉れないのだから分らない。それで内心は非常に喜んでゐるのだ。物を貰つて有難さうな顔を見せたり喜んだりするのは不見識だといふ習慣だ。素直に「有難う」を云ふのは旅館や料理店のボーイが祝儀を貰つた時位のものだ。さて私が掌の埃を拂ひ乍ら旅館の方を見ると、例のボーイ達は非常に可笑しさうに笑つてゐた。其の朝私は新しいモーニングコートを着こんで可成りめかしてゐた。だから

今の所作が特に滑稽に見えたのだらうと思つた。自分の部屋へ戻ると直ぐボーイが来て「先生貴方は何故あんな事をしたのです」と云ふ、が其の表情ではたしかに私を嘲笑してゐる。私は軽い不愉快を感じた。私は決してほめられたくはない、ほめられたら却つて赤面する、が、嘲笑されるいはれはない——さう思ふのだが、それ程の言葉は通譯する人が居なくては云ふことが出来ない、黙つて苦笑ひして済んでしまつた。

さういふ場合の支那人は實に冷淡である、全く文字通り『我不關焉』である。自分の身に關係ない事なら何が起きようと平氣である。知らぬ顔をして見てゐる。目の前で首を吊つて見せても眺めてゐるかも知れない、場合に依ると冷淡とも無情とも云ひやうが無い。それ位だから況んや法律上の掛り合ひ等に至つてはこれを恐れること悪魔よりも甚だしい。勿論何處の國民だつて裁判所や警察へ引つぱり出されて喜ぶ者はない。恐れるのは當然だが然し程度がある。自分に後暗い事さへなければ我々は平氣である。處が支那人は、若し隣家の者が冤罪を被つて獄に投ぜられた時、自分が行つて一言證言すれば其の人の罪が免されるといふ場合でも、自ら進んで證人になつて行くやうなことは先づないと云つていゝ。實際支那のやうな國情ではさういふ程度の掛り合ひから或は自分の身にどんな災難の飛ばつ汁が來ないとも保證し難い。

だから障らぬ神に祟り無しで己むを得ぬ場合迄は見捨て、置く。彼等に取つて大切なものは自家の生活だ。他人の事は他人自らがする。泣かうが笑はふが、死なうが生きようが、物を盗まうが奪られようが、それが他人のことならすべて『我不關焉』だ。是れ位固く自家の立場を守つてゐないと事實危険なのである。此の極端な個人主義思想が、前のやうな些細な場合にまで現れて、他人の事には手を出さないのである。

一輪車の事件は私は間もなく忘れてしまつたが、其の當時私自身の氣持では決して餘計な事をしたとは思はなかつた。ボーイに嘲笑されても、それは嘲笑する奴が無教育で没常識漢なんだから仕方がないと思つてゐた。處が其の後に又かういふ事があつた。或る學問のある支那の老人と一緒に歩いてゐる時、街なかの橋の袂に一寸した坂があつて、其處で一臺の荷車が行き惱んでゐた。是れは普通の二輪車だつた。人は織るが如く通つてゐるが此處でも一人として振り向いて見るものはない。私は例の一寸した同情心を起して、其の荷車を後から押しやつた。車は難なく橋の上に達した。處が老人は私が近づくと恐ろしく不機嫌な顔をして通譯をする日本人を通じて、私を叱り付けた。

「貴方は何故に今のやうなつまらぬ眞似をするのだ」

と先づ老人はかう云ふのだ。で私は、車が動かないので氣の毒だつたから押して遣つたのだと答へた。すると老人は重ねて云つた。

「車が動かなくてもそれは貴方に關係した事ではない。車を引くのはあのクレーリの爲すべき仕事です。若し今の坂で車が動かなければ、彼處にあの通り立ん坊がある。立ん坊に錢を遣れば押して呉れる。それをあの車力は錢を惜んで勝手に難儀をしてゐるのだ。人には各々自分の務があり立場がある。縁もゆかりもない貴方が横から飛び出して行つて車の後押しをするなぞといふことは支那には無い事です」

私はさう云はれて今更赤面してしまつた。道德といふものは習慣から生れてゐる。私の淺はかな同情心、それは大して咎むべき程の意味はないにしても、其の結果は自己と他人との立場を忘れた輕卒な舉動となつてゐる。

『我不關焉』

矢張りそれがいゝのだと私は悟つた。

黄 包 車

支那の都會へ行つて、一番最初に眼に付く物とは聞かれたら、それはあのワンポツヲだと答へるほかはない。ワンポツヲとは日本で云ふ人力車のことである。漢字では黄包車と書いてゐる。日本で發明された人力車が、支那へ輸入されて黄包車となつたのである。一名東洋車とも云ひ又單に洋車とも云ふ。人力車は人力車だが、日本の物とは大分趣きが異つてゐる。車の形も異ふが、第一曳く人間がまるで異つてゐる。支那の人力車夫は苦力と呼ばれる階級の人間である。苦力とは、何んといふ慘ましい名稱であらう。勿論苦力はすべて人力車夫といふわけではない。苦力の一部分が人力車を曳くのである。土方でも、人足でも、凡そ一番下級の勞働に追ひ使はれてゐる人間が苦力である。と云つても、苦力とは、勞働者といふ意味とも異ふ、勞働に従事してゐる者でも、苦力でない者もある。苦力は單なる職業的名稱ではなく、人種階級的名稱で、そしてそれは先天的勞働者と云つたやうな範圍に屬してゐる、先づ奴隸といふのが一番近い感じをもつてゐる。支那には苦力の下には乞丐がある。乞丐は最下等の人間である。

是れは何處の國でも大概さうである。が、其乞食と苦力とはほど似たやうなものである。若し其の間に差があるとすれば僅か一線の相違である。どちらも、普通の人間との間には天と地ほどの懸隔がある。餘り其の懸隔が甚だしいので、苦力以下は人間として認められてゐない。さうかと云つて苦力だつて無論蟲けらやけだものではない。五體満足に整つた人間である。がそれにも係はらず彼等は、まあ人間と動物との中間のものに待遇されてゐる。さうして苦力自身も其の待遇に甘んじて、それに相當した生活を營み、その位の知能をしか僅かに有つてゐないのである。苦力ほど虐げられた、あはれな人間はないのである。

其の苦力が黄包車を曳くのである。だから同じ人力車夫でも、日本の俵夫とは全然趣きが異つてゐる、先づ彼等の服裝を見るがよい。と私は云つて見たけれど、實際を云ふと、苦力には服裝といふ程の物はないのであつた。苦力の連中は、夏でも冬でも着物らしい着物は着てゐない、では裸體かと云ふと、まさかさうでもない、何か申し譯に體に引つ掛けてゐる。大がい、脊骨の處迄しか届かない位の短かい袴纏のやうな物を引つかけて、胸から腹は剥き出しでゐるそれに猿又をはいてゐる。併しその袴纏でも猿又でも、大抵原形をとゞめなくらゐにポロポロに破れてしまつて、そして垢と埃とで煮しめたやうになつてゐる。顔も手足も同じことで

ある。但し肉體は着物のやうに破れないから重寶だ。要するに乞食位の身なりである。さうして、彼等は一人残らずが先天的醜惡な容貌を有つてゐる。野蠻と無智を象徴してゐる。決して日本の俵夫のやうな威勢のいゝ若い衆さんは苦力の人力曳きの中にはゐないのである。冬なれば襦子の袴天股引の所謂黒鴨仕立、夏は白麻の袴袴を着て、ゴム足袋で恰好を作つて、スツ／＼と驅けて行く日本の都會の車やさんは、幾分粹な職業になつてゐる。道樂氣が混つてゐる。が、支那の車やば粹どころではない。何處迄も不景氣な、一向美化されない、下等千萬な職業になつてゐる。曳き手がそれであるから、車もそれに相應して非常にお粗末な物である。朦朧の黄包車は、木ヘニスが塗つてあるだけだ、それが必ず剥げちよろになつてゐる、車の輪が小さくて、従つて車臺も低く出來てゐる、そして柄が思ひ切つて長い、六尺位ある、蹴込みは下から風の通る板張りで、紅い毛皮だの膝掛けなどは持つてゐない、腰掛けの下には往々南京蟲が這つてゐる。

其の汚ない黄包車を、汚ない苦力が曳つぱつて走るのである。が、走るのは客を乗せてゐる時だけで、空車の時は、蟲の這ふやうにノロ／＼と、賑やかな街や、寂しい裏通りを歩いてゐる。上海全市を、何萬とも數知れぬ此の黄包車が、朝でも晩でも夜なかでも、四六時中何處へ

行かうがウロ／＼歩いてゐる。かうして彼等は客を漁つて歩くのである。彼等は絶えず動いてゐる。一つ所に留まつてゐると、道路警察の取締に觸れる、巡査が来て棍棒でどやし付ける、だから一分間も留まつてゐることは出来ずに、年が年中棍棒を握つて歩き續けてゐる。日本のやうに宿車といふ物もなければ辻待ちといふ事もない、上海のワンポツは全部が朦朧である。車は親方があつて、苦力達は其處から車を借りて来て、一日の稼ぎ高の中から車の損料を拂ふのである。彼等は、朝車を曳いて親方の處を出ると、其の日の氣分次第で足の向いた方へブラ／＼と出掛けて行く。繩張りも何も無いから何處へ行かうと勝手だ。客をつかまへると、客の命する場所迄驅けて行つて、其處で客を降ろすと、又當てどもなくブラ／＼とやり始める。淺草から牛込へ行つたかと思ふと、今度は芝へ行つて、其處から又青山へ行くと云つたやうなわけに眞に行き當りばつたりである。一所不定、風の吹くまゝに吹かれて歩いてゐるのである。苦力には勿論哲學も人生觀も無いのである。が、さうして彼等が廣い上海の街から街へとさまつてゐる有様は、彼の雲水の境涯にも譬ふべく、或ひは人生といふものをすべて偶然の出遇ひに依つて解決しやうとする運命論者の哲學を想起せずにはゐられないものがある。

往來を歩き乍ら「ワンポツ」と大きな聲で呼ぶ、とあたりにゐた黄包車が先きを争つて走

つて来て、吾れ勝ちにと客の足許へ棍棒を据える、一番先きに來た奴の車へヒヨイと乗る、車臺が低いから、丁度敷居を跨ぐやうに樂に乗れる。腰をかけて、ステツキで方向を教へると、苦力は一目散に驅け出して行く、理屈はなく驅けるのである。曲り角へ來ると驅け乍らヒヨイと後を振り向く。「右」とか「左」とか云へば云はれた方へ曲つて疾風の如く驅けて行く。其の速いことは眼の廻る程である、日本の人力車夫は、兩手を前へ突つ張つて、反り身になつて氣取つて曳いて行くが、支那のワンポツは、棍棒の根を握つて、拳を兩方の腋の下へ押し當て、長い棍棒の先を遠くへ突き出して、前屈みに猫脊をして、猪のやうに恰好もなく、滅多矢鱈に驅けるのである。上海は道路がいゝ處へもつて来て、苦力は骨身を惜しまず、馬鹿力の限りで曳き出すから、全く以て速い。是れで車が日本のやうに高ければ忽ち顛覆してしまふが、車臺が低いので無事である。車に乗つてゐて、往來を歩いてゐる人の肩迄しか届かない、車へ乗つたからと云つて通行人を睥睨することは出来ない代りに、速くて安全といふ得がある。目的の地へ着いて賃錢を拂ふ時、値段を聞くお客はない、黙つていゝ丈遣るまづ十丁か廿丁乗つて十錢、一里以上乗つた時二十錢位遣れば澤山だ。併し、車夫は、屹度それでは不服を言ふ。眼をいからせ、大口あいて齒を剥き出し、嚙み付きさうな恐ろしい形相をして喰つて掛る。そ

こで二錢か三錢増しを遣る、すると不承無承に歸つて行く。増しを遣らずに、アベコベに恐い顔をして嘔鳴り付けて、サツサと家の中へ這入つてしまへばそれでも濟む、幾ら遣つても苦力は不服を云ふのである。が、それとても程度問題で、普通相場の二倍三倍位呉れてやつたら、最初から夷顔をして「有難う〜」と禮を言ふ。大體餘り安過ぎるのだ。私は上海へ行つた當座、淺はかに感激してしまふ性なのであらゆる人々が苦力を虐待してゐるやうに思つて妙に義憤を發してしまつた。義憤を發して見た處で、苦力解放運動を起すこともならないので、せめてもの心遣りに、黄包車へ乗る度びに、五錢の處は十錢十錢でいゝと人が云ふのに態と二十錢遣つた。併し永く居るとさうばかりも行かなくなつた。支那は物價の安い國である。それは主に勞働賃銀が安いからである。物價が安いからすべての人間が暮しよくなつてゐる。そして其の勞働賃銀の最下等の標準を作るのが苦力である。だから、苦力の賃銀を増し、彼等の生活をして向上させたなら、忽ち物價が騰貴する。物價が騰貴すれば各人の生活が苦しくなつてくる。其處で、支那では苦力といふ階級を何時迄も現状の儘で押さへ付けて置く、教育も何も施さない、一向啓發しやうとしない、それは清朝時代でも、共和政體の今日でも、一定不變の國是である、外國人は勿論それに大賛成だ。苦力の生活や思想が向上することは、他の全部の階

級に對する脅威であるから、何處迄も彼等を蟲けら同様の地位に甘んじさせて置かうとしてゐる。どんな人道主義者でも、社會主義者でも、進歩的政治家でも、苦力解放運動には耳を藉さない、すべての社會運動は、苦力と乞丐を除いた他の階級——つまり人間並みの世界の咄だ。「苦力はあの儘で置くが、無智は時に依つて幸ひである。彼等を向上させることは、徒らに萬人の生活を脅やかすのみであつて、彼等自身に取つても反つて生活難の不幸をおぼえさせることになり易い」と其の人達は言ふのである。或ひはそれに違ひないかも知れない。すでに私のやうな人道主義者でさへ一と月經たぬうちに態度を一變してしまつた。毎日何遍も乗る車で、其の都度人道主義を發揮してゐたのでは、財布のはふで續かなくなる。私もしまひには、苦力に往來で胸倉を取られて漸う十錢奮發したり、女伴れで四馬路で俵を降りて、賃錢が足らぬといふので喚き立てられおまけに彌次馬に包圍されて眞つ紅になつたこともあつた。

私は、苦力の生活状態について何等研究して見なかつた。が、苦力で家を持つてゐる者は極く少ない、あつた處で、蒲鉾小屋で、其の中へ豚のやうに大勢ゴロ〜してゐるのに過ぎない、町外れへ行くときよくそんな小屋が眼に付いた。大概の苦力は一所不定で、浮浪生活をしてゐる、そして往來でも、擔下でも何處へでも轉がつて寝るのだ。彼等の生活費は、一日六錢で

足りるといふことだ。無論食ふ事だけの勘定である。ワンポツヲの賃錢も安い筈である。車を曳いて錢を儲けると彼等は直ぐ博奕を打つ、博奕を打つて勝つた奴は淫賣を買ひに行く、負ました奴は又車を曳きに出る。淫賣を買ひに行つた奴も、持つてゐるだけの錢は其處で取られてしまふから、出てくる時は元の木阿彌である。それを生涯繰り返してゐる、苦力の階級には錢が素通りするばかりで、一向停滞しない、だから苦力は何時の世が來ても苦力である。

上海は魔の都であると云ふ。其の上海の市中を、數限りない苦力の群れが、黄包車を曳き乍らウロ／＼歩いてゐるのである。彼等は罪惡を媒介したり行つたりするのである。竊盜、揣摩、誘拐、殺人——さういふ犯罪は常に苦力の巢窟から醸されてゐる。併し、苦力と雖もそんな惡質の者ばかりではない、家庭に雇はれて働いてゐる者もある。自家用の黄包車を所有してゐる人は苦力を家に抱へてゐる。自家用は何れも上等の黒塗りでなか／＼立派である。其の上等の人力車が一臺六十圓位で出来る。車夫の給料は七八圓が相場である。だから少し氣の利いた人はお手車で走つて歩く。日本の會社員など、本國に居たら慘めで、朝晩満員の電車で臟腑がはみ出さんばかり、命カラ／＼通勤するのに引きかへて、上海では平の事務員でも、外交員でも自用车へ乗つて風を切つて行く。更に其の上贅澤をして、自動車を持つた處で税金は殆ん

ど只同然で、支那人の一等運轉手の給料が三十圓位だから、課長さん位の人みんな自動車を持つてゐる。給料は無論向う飯でそれ丈である。

速い支那の人力の中でも、杭州の黄包車程速いものはなかつた。それは全く風を切つて走つた後ろへ吹き飛ばされさうな氣持がした。其の車には蹴込みの下に大きなベルが附いてゐて、上に出てるボタンを靴で踏むと「カン、カン、カン」と素敵にいゝ音を發した。往來の人を追ひ拂ふのである。威勢のいゝこと夥しい。南京の黄包車には小さな鈴が何處かに附いてゐて、車が走ると「リン、リン、リン」と微妙な音が聞こえてきた。それが古風な南京の街にふさはしい感じを與へた。

大 世 界

二四

上海に「大世界」と云ふ娯樂場がある。大世界は共同租界とフランス租界との境界を走つてゐる愛多亞路と云ふ大通に面してフランス租界の部にある。

此處は純粹に支那人のみを對照にして造られ經營されてゐる娯樂場だ。單に上海全市内の娯樂機關と云ふ意味から云へば此の外にも、劇場だとか活動寫眞館だとか。或ひはダンスホール、競馬場と云つた具合にいろ／＼あることになるが、さういふ場所は夫れ／＼専門的であり、且つダンスホールや競馬場に至つては寧ろ外人本位に經營されてゐる場所だから殆ど支那臭味は無い。何も彼も一しよくたに包含され、極く通俗に、極く民衆的に、そして大規模に、其處には全支那の傳統があり、現代支那の世相があり、美があり醜があり、矛盾がある、さういふ式の娯樂場と云ふのが大世界である。可成り正鵠な意味で其處は上海人（支那人）の生活表

現であり支那と云ふ國の縮圖である。

大世界で日本人は稀れに見受けるが、西洋人は殆ど見ることがない。遊覽の外人でも此處へ足を入れる人は滅多に無い。西洋人は頭から支那人を輕蔑してゐるが、輕蔑するばかりではなく彼等にとつては全然支那は不可解である。多年支那に住んでゐて支那の國情に精通してゐると云ふ西洋人でも、試みに支那の演藝とか音楽といふやうな物に就いて質問して見るならば彼等は一様に沒理解を曝露する。そしてそれを恥としない。それをアフリカの野蕃人の藝術よりも無價値なものであるかのやうに斷定して其處に何等の疑問も矛盾も感じてゐないのがイギリス人でありアメリカ人である。英米人程自惚れが強く反省の乏しい國民はないといふことを彼等の支那に對する態度の裡に私は屢々認める。右は餘事である。處が日本人には直ぐに支那は理解が出来る。支那人が日本を理解する程度よりも以上に日本人は支那を完全に速かに理解することが出来る。其の理由は、日本の古代より近世に至る文化の全部が要するに支那を研究するといふ一點に歸着するもので而して其の結果咲いた花にほかならない。吾々の精神の奥底には傳統的に支那に對する禮讚憧憬の名残が沈澱して居り、同時に先天的修養とも云ふべき理解力を支那に對して有つてゐることである。それと反對に支那人は日本に對する理解力を有つて

居ない。彼等は一様に老大國民らしい鈍感と無智と尊大とに禍されて、東海の島國に實を結んだ自國精神の更に優秀な稟實を味はふとしない。

大世界には有らゆる支那の民衆藝術がある。有らゆる國民性があり傳統があり、流行がある。古往近來のさまざま支那の姿を一目に看取することが出来るといふ點で是れ程便利な場所は何處を探しても無い。

二

大世界の中には十一ヶ所の演藝場がある。樓下と樓上とに分れてあるが、試みにそれを列舉して見ると、樓下には「乾坤大戲場」「髦兒戲及影戲場」「甬戲及魔術場」「文明戲場」「共和廳」等があり樓上には「南場」「北場」「東場」の三場がある。それらの場所で行はれてゐる演技の類は、新舊演劇、活動寫眞、子供芝居、講談落語、輕業曲藝、掛合噺、滑稽茶番、手品、武技、地方歌劇等の種類から、女藝人の各種の遊藝音曲、京曲崑腔椰子時調など云ふ歌妓の唱歌等、其の他數へ切れぬ程種類があつてそれが規定の時間通りに出場する。晝と夜とは演藝の種類が變つて居て、同じ物を晝夜二回演ずるといふことはしない。場所が場所だから芝居や活

動寫眞等は極く低級俗悪なもので觀る價値がないが、他の演藝類は皆夫れ々特色を有つてゐて、此處でなければ觀ることの出來ぬ物が大部分を占めてゐる。寧波とか蘇州とかいふやうな各地方の郷土藏術がありそれ々のローカルカラーを出してゐる。

樓上の東場と樓下の共和廳へ出場する女藝人は皆夫れ々女藝人として一流の稱ある者を選んでゐる。藝で賣る者もあれば齡が若くて顔で人氣を取る者もある。

東場の女藝人は殆ど全部が「太鼓」(北京音ではタイク、上海音ではダアクと發音する)と云ふ藝をやる。是れは日本の物に譬へると先づ淨瑠璃である。太夫と三絃弾きが一人宛出る。三絃は蛇味線で男が弾く。太夫は大概若い女で、臺へ載せた直徑八寸許の太鼓を一本のバチで軽く打ち乍ら淨瑠璃を語る。別に左手に小さい柝を持つてゐてそれをカチカチ鳴らして間拍子を取る。或は月形の金屬を二枚合せてチリチリ鳴らして拍子を取る流義もある。梨花太鼓、天津太鼓、京音太鼓等云ふ流義がある。此の太鼓の起りは盲人が鼓を叩いて人中で唱つた大道藝だと云ふが餘程古い起原を有つて居るさうだ。或人は現在支那に残つてゐる中で一番古い藝だと云つた鼓書と云ふ物があつて物語はみな一定してゐる。是れは山東省で起つたもので純然たる北方の藝術である。

詞は分らなくても單に節廻しを聽いてゐれば十分面白味を會得することが出来る。外國人が日本の義太夫に興味を持つやうに困難ではない。太鼓は歌を休んでゐる間だけ打つので、歌は三弦に合せて歌ふのである。

私が聽いた太鼓藝人の中では、晚香玉、小黑姑娘、于秀屏一、聲紅などといふのが上手であつた。私は非常に太鼓の藝が好きになつて態々旅館へ女藝人を呼んで演らせたりしたこともあつた。晚香玉は一時非常な人氣があつたが後に廢業した。小黑姑娘は天津太鼓だ天津が態度や身振りに特徴があつて面白く、于秀屏は玉の如き美少女で聲は細く美しく、其の細い聲を絞つて歌ふ時滿面に紅を潮し楚々たる風姿と相俟つて多くの青年老姐を惱殺した。

共和廳は場内第一の大きな場だ。其處へは大勢の歌妓が出る。歌ひ手は常に一人であつて背後に大勢の樂師がある。京曲とか崑曲とか云ふのは芝居の歌詞であつて歌劇の一節を歌ふのである。或ひは歌詞が先にあつて後に劇が生れたものだか、その處は自分は確かに知らない。音樂は殆んど狂噪を極める。耳を聳するばかりの喧ましさだ。其の狂噪の渦卷の中から張り切れるやうな高調の唄がほとばしるやうに出て來る時、其處に北方の大陸民族の感情が強く流露してゐる。

共和廳へ出てゐた高弟カネイと云ふ妓は、可成りの年増で顔は美しくないが、音聲に特徴があり節廻しも上手だつた。彼女は私の懇意な王と云ふ人と結婚してゐた。彼女の妹は高彩雲と云つてこれも矢張り共和廳へ出てゐた。高彩雲は齡が若く、顔が美しいので歌はさまざま上手ではなかつたが相當に人氣があつた。彼女は私の友人の朱と云ふ男の妾になつてゐて、そして姉の家に同居してゐた。さういふ縁故から私は高姉妹と親しい交際をして、毎日其の家で食事をしたり、夜は明け方近く迄喋つて居たり、出勤時間が來ると一緒に大世界へ行つたりした。彼女達の放恣な贅澤な生活は、日本の女藝人のそれと少しも變りはなかつた。

同じ場へ出る方と云ふ母娘三人の妓が居た。母親を方寶寶と云ひ、姉が方三寶、妹を方四寶と云つた。方四寶は琵琶を弾く女であつたが、齡は十七位で、美貌と愛嬌とに依つて絶大の人氣を背負つてゐた。彼女が場に上ると滿堂割れ返るばかりの騒ぎが起つた。其の琵琶はごく古風な琵琶で撥を使はず爪で靜かに掻き鳴らすのだつた。歌も低い調子であつた。彼女の有つてゐる人氣の殆ど全部は、彼女の愛嬌の賜物だつた。看客は歌のとぎれ目へ來ると盛んに彌次を送つた。すると彼女は其の彌次に堪へられぬやうな嬌羞を露はし横を向いて嫣然と笑ふのだつた。其の愛嬌笑ひは少しも厭味を帯びない全くの美しい笑ひだつた。看客は只其の一笑を見て

満足してゐるのだつた。私は、日本の女の笑ひに方四寶程の美しい笑ひを嘗て見たことはない。支那の女は平素は餘り笑はないが、それが偶々或機會に逢ふと忽然として魅力のある笑ひ方をする。一笑値千金美人の一顰一笑が城を傾け國を亡ぼした例しはあながち支那に限らないが、古來美人の嬌笑が支那程高く評價された國は少いやうに、事實支那の女の笑顔は濃艶である。方四寶の嬌笑はそれであつた。私は彼女の笑の裡に、五千年來興亡限りなき支那の歴史の表面を美しい綾織のやうに彩つてゐる多くの女性に聯想を馳せるのであつた。

三

大世界の内部の構造は非常にこみ入つて出来てゐる。わざとこみ入らせて造つてある。他の國では複雑な内容を成る可く判り易いやうに工夫するものだが、支那はすべて夫れの反對で事實の三倍も十倍も複雑のやうに見せ成る可く不可解にして迷はせるやうしやうと企むである。支那人のあくどい幻怪的趣味性が最も露骨に此處の構造にも現はれてゐる。廊下を曲り曲つたり、梯子段を昇つたり降りたり、地下道を潜つたり、屋上へ現はれたり、場内の通路は網の目に迂餘曲折して八幡の藪式の迷宮を現出してゐるから一度や二度入つたのでは中の地理は呑み

込めない。茶館、料理店、カフェー、玉突き、スケート、詩迷（煙草を買つて賭ける遊戯的の賭博）各種の賣店それらの店、が夫れ々々客を吸収してゐる。

大世界はいかなる時でも一萬人の客が入つてゐると云ふが、其の中の幾割かは（少くも一割位は）賣春婦だ。彼女等は此處を屈竟の稼ぎ場にしてゐるので皆割引回数券を持つて入場して来る。入場料は普通小洋二十錢のところは回数券を買ふと半額になる。

賣春婦の事を上海語で鶏チと云ふ。支那は何處へ行つても鶏チの居ない處はない。旅館でも、往來でも鶏チを見受けけない場所はない。上海シヤンハイの租界では、フランス租界は一番取締りが緩やかと云ふよりも寧ろ取締りは何んにも無いところから、彼女等は多く此の區域に住んでゐる。或區域へ行くと卅間幅位街路へ一杯になる程に鶏チが雲集してゐる。戶外へ出て客を漁る鶏チのことを野鶏チと云ふ。大世界や新世界へ集つて来る鶏チも矢張り野鶏チには相違ないが、晴れがましい場所だけに極端に下等な者はやつて來ない。中には目を驚かすやうな華やかな身なりを装つた可成り上等の鶏チも來る。けれども彼女達の間には何の懸隔もなく一樣に客を漁つてゐる。演藝場にも廊下にも、運動場にも、カフェーにも、隙き間なく彼女達は網を張つてゐる。鶏チは此處の景物の一つに數へられてゐる。男の客はそれを目的にして、此處へ來る者が多い。さういふ事を

打鷄ダチと云ふ術語で云つてゐる。鷄チの服装は無論一定しないが女學生風が一番多い。髪に鍔をあて、鼈甲縁の眼鏡を掛け、冬ならば派手なマントを着てゐる、それが支那のモダンガールである。其の他に藝妓風、細君風、素人娘の風、いろ／＼ある。

詩 謎

支那には古來いろ／＼の博奕が行はれてゐるが、近年上海附近で流行を極めた博奕に詩謎といふのがあつた。一概に賭博とは云つても、さすがは文字の國だと思はせるやうな文雅な賭博であつた。それはどんな形式の物かと云ふと、それはほんとうに爰で説明することは不可能だが、簡単に説明すると、堂の方で五言なり七言なり詩の一句を提出する。其の中の一字なり二字なりが〇〇で空けてある。其の横に、此の空所へ箴め込むべき字が五つ書いてある。處でどれを箴めるべきかといふことを中て合ふのだ。詩を書いてある短冊型の紙が何十枚も重ねて下部だけを鞘の中に隠してテーブルの眞中に置いてある。隠してある處に上の五つの字の中の一つが認めてあつて、其の出所も明記してある。テーブルには一から五までの張り場所が出来てゐる。客が思ひ／＼に賭けてもうよいと云ふ處で、堂が其の紙片を抜くのだ、例へば

一 葉 身 輕 戴 〇 過

魚、客、菊、月、酒

かういふ具合に書いてある。右の空所へ、魚、客、菊、月、酒、の中のどれを籤めるかといふのだ。魚だと思つた一へ張る。客は二、菊は三と字を上から數へて置かれてある位置に依つて、一韻から五韻までの張り場所がある。張り方にも幾通りかある。一なら一へ的中を狙つて張つてもよし、一と二と半々に兩方へ引つ掛けてもよい。或ひは一に三分の二の重きを置き二の方を三分の一だけ見るといふ行き方もある。的中すれば張つた金の三倍だけ堂が拂ふ。詰まり一圓が四圓になつて戻つて来る。半々に引つ掛けた時はどつちが出ても倍になつて戻る。七三に掛けた場合各は、重きを置いた方が出れば一圓が三圓になるし軽く見た方が出れば勝負無し引つ込みになる。外れれば只親に取られることは云ふまでもない。是れにまだ他人の張つた駒を我が思ふ目へ持つて來ることも許される。それが中れば動かした分とそれに對する親の支拂ひとを併せて全部まる儲けになる。其の代り若し以前の目へ出た日には親に代つて支拂つて遣らなければならぬ。

大體こう云つた仕組みのもので、客は先づ五圓なり十圓なり駒を買つて、現金を張らずに駒で張るのだ。支那は人も知る如く古來賭博の盛なる國だ。だから現行はれてゐる物ばかりでも勝負事の種類は非常に多い。其處へ年々新しい異つた勝負事の方法が編み出されて行く。

が其の中でも此の詩謎と稱する遊戯は餘程うまく考案されたもので、金錢を賭けずに單に遊戯として楽しむことにすれば是れ位高尚な遊びはあるまいと思ふ。詩謎の製作者は相當學問が無いとやれないが、客の方は左まで教養は要らない。どうせどれでも籤る字が並べてあるのだから、長くやれば運賦天賦である。と云つて全然運ばかりの當てすつぽでも面白くない。時には教養が役に立つて大勝を博することもある。

大世界や新世界のやうな娯樂場へ行くと、何十軒となく此の詩謎の店が出てゐる。一間位のテーブルを据え、正面に堂の先生が控へてテーブルの周圍を客が取り圍んで腰を掛けてゐる。此處では金を賭けることは許されてゐないので駒の代りに煙草を買つて張るのだ。幾ら澤山勝つても金に替へて貰ふことは出來ず煙草を抱えて歸つて來なければならぬ。日本の射的のやうなものでこれは罪の無い遊び場だ。私の云ふ詩謎俱樂部といふのはその大掛りのもので、其の頃上海の市中に詩謎俱樂部が三十有餘あつたさうだ。何れも足場のいゝ目貫きの場所へ大きな家を借り込んで、其の二階の一番奥の部屋にテーブルが据えてある。表の入口には何々總會とか何々俱樂部とか云つたやうな軒燈が出てゐるばかりで、知らぬ者には此處が何をやる家だか分りようがない。會員名簿が出來てゐて、表面は會員だけで遊ぶ規則になつてゐるが、無論

誰が行つたつて歓迎する。支那人がかういふ場合に客を迎へる時こそ眞に歓迎といふ字が當て
 嵌る。

「請座、々々」
チンズ

と異口同音に席をすゝめ、直ぐにボーイが茶を持つて来る、煙草をすゝめてマツチを擦つて呉
 れる。タオルを持つて来る。歡待下へも置かぬといふ風である。大概夕景の四時五時から場が
 開かれて、六時か七時になると別室で全部の客へ晩飯を振る舞ふ。料理は皆有名な料理屋から
 運ぶので山海の珍味が出る。酒も呑み度いだけ飲ませる。何處にもボーイが五六人位ゐて、間
 にも、茶、煙草、タオル、菓子、果物——と間斷なく客を饗應して而も足らざるを憂ふると云
 つた體だ。一夜に數百金を抛つ客もあれば、十錢の駒を一つ宛張つて楽しんでゐる人もある。
 主人側の方ではどんな客でも甲乙の差別は付けない。一樣に歡待し饗應する同じ賭博館と云つ
 ても、詩謎俱樂部へ出入する顔觸れは有識階級に限られてゐる。眼に一丁字なき匹夫野人の勿
 論來る筈もないが、相當教養を有する者でないといふ遊びの趣味は解し難い。頭惱を絞つて判
 斷して、此の場合此の字でなければならんといふ字を考へてそれを張るのだが、製作者は一層
 くせものだから往々穴がある。然し其の詩は古へから現代に至るあらゆる既成詩の中から抜い

た句で、決して製作者が濫造したものではない。伏字の傍らに出所が明記してあつて、稀れに
 不審を唱へる者があれば事務所の方から直ぐ様原本を持つて來て客に見せて納得させる。いか
 にも公明正大だ。處で集る客種に家に依つて多少の高下はあるが、概して上流階級が多い。政
 治家も來れば實業家も來るし、大學教授もやつて來る。官吏、銀行員、商人、軍人、僧侶、大
 家の若旦那、金持の御隠居——有らゆる階級を網羅してゐる。勿論支那人ばかりである。さう
 いふ客種だから場の空氣が非常に上品で穩かだ。只の一度も醜い争ひや口論などを見たことは
 なかつた。私は元來勝負事人が人並み外れて好きだといふわけではないが、勝負事といふものを
 さう悪い事だとは思はない無論國法の禁ずる處のものを敢て犯すといふ意味ではなく、例へば
 米相場を張るのでも馬券を買ふのでも立派な勝負事で一種の賭博とも云へる。只其の事柄に完
 全な組織があり、別の方面に國家として利用されてゐるから許されてゐるばかりだ。賭博に負
 けて首を吊つたり身を投げたりする者は、人格の未完成を曝露するもので、決してそれを勝負
 に徹底したと見なすべきものではない。そこへ行くと支那人の勝負事に關する訓練は實によく
 出來てゐる。負けてもさう口惜しがらないが、勝つたと云つてさう逆上せもしない。尤も支那
 へ行くと、大小こそあれ賭博は殆んど空氣や食物と同じ程度に人間の生活要素の中へ入つてゐ

る。小兒の時から其の習慣に染んでゐる。賭博に負けたと云つて刃物三昧をしたり首を吊つたりした日には支那の人口は忽ち何分の一かに減つてしまふだらう。銀行會社や旅館や家庭等へ住み込んで働いてゐる支那人のボーイ達は、大概一年稼ぎ溜めた金を持つてつて春か秋の大競馬のチャンピオンレースの馬券を買つてしまふ。是れは一枚十ドルだが、一等に中れば二十五萬ドル取れる。二等でも十二三萬ドル取れる。が十萬枚の中だから容易に中らない。彼等は全部揃つてしまふけれども決して後悔しない。今年は何處のどういふ人間に中つたといふことを聞いてそれで満足してゐる。此の廣い世の中に誰か一人か二人がそういふ大きな運に中つたといふことが確められれば、やがては其の運が自分の處へ廻つて來る可能性のあることが證據立てられてゐる。彼等はそれだけで満足してゐる。さうして又一年クツクと云つて働いて來年もそれで馬券を買ふ。五年でも十年でも此の方針を變へない。「何時か一度は來る」と彼等は皆云ひもしさう信じてゐる。絶えずさういふ大きな運を空間に描いてそれを樂みにしながら、年を取つて行くのだ。其の毅然たる覺悟と恬淡たる態度には眞理を望んで生きて行く聖者の心持にも似たものがある。さうかと思ふと、私の知つてゐる或る西洋人のホテルのボーイをしてゐる支那人の若者は、昨年の春の大競場で十五萬ドル中つた。さあホテル中が大騒ぎで、

「さあ、お前は今日から十五萬ドルの金持だ、まさかそれだけの金があつてボーイをしても居られまい、一體どうする了簡だ」

とワイ／＼はたの者が騒ぎ立てた。處がボーイは存外落ち付いたもので

「私はボーイより外に何も商賣を知りませんから別にやめる氣はありません」

と其の時云つたさうだ。そして十五萬ドルを大銀行へ預金にして依然として神妙にボーイを勤めてゐた。其の後私が行つた時も矢張りボーイをしてゐた。私が、

「金を無くしやしないか？」と訊くと、

「否、無くしやしません」と彼は笑つて云つた。

これは廣東カントの話だが、或る賭博館に評判の美人の娘があつた。其の娘には父があつて親子二人暮しだつたが——賭博館の名は「瓢箪口」と云ひ、主人の名は林某、娘は青兒といふ名だと、其の頃の新聞に載つてゐた——其の父の林が病氣で死んで青兒が一人残つた。林は賭博の名人だつたが青兒も親譲りで斯道の天才だつた。何しろ賭博館といふ可成りの財産と美人の娘とが残つたのだから云ひ寄る者が多かつたが、伶俐な青兒は決して許さなかつた。すると或日のこと此處へ見知らぬ一人の若者がはひつて來て青兒に向つて「僕は親譲りの自分の全財産を

賭けて貴女と勝負をしたい、若し貴女が負けたら僕と結婚するといふ條件で」と云つた。そして銀行の株券や地券等を取りませ時價五萬ドル以上の證券をテーブルの上に置いた。初めは狂人かと思つたがさうではなかつた。勿論青兒は拒絶したが飽く迄先方が望むので到頭其の場へ公證人を伴れて來て立ち會はせた上で勝負を闘はせた。若人も上手だつたが矢張り青兒の敵ではなかつた。見事に打ち負かされて悄然として去つた儘消息はなかつた。處が、それから餘程經つて後、其の時場に居合はせた一人の人が廣東カントンからは餘り離れてゐない佛山といふ處へ行つた時、其處で乞食になつてゐる以前の若者を見たといふのである。少し小説過ぎてるけれども、かういふ話も支那へ來るとさう不自然ではなくなるのである。

南北支那料理

一ト口に支那料理といつても、北京ペキンと廣東カントンでは大變な相違がある。北京人が廣東カントンへ行つても一語も通じない。それと同じやうに、一般の食物、料理も趣が違つてゐる——といふのが從來からよくある定説だ。事實その通りで、さればこそ料理屋の看板にも、或は北京ペキン、或は廣東カントン、或は四川といつた風にその店の特色が明記してあるのだ。

けれども、實際としては、異ふといつても、それは支那料理の範圍内で土地々々の趣があるだけであつて、南北何地へ行つても、支那料理であることに變りはない。ヨーロッパの食物が、イタリーとイギリスでは大變異つても、われ／＼の眼からいへばみな洋食であるやうに、漢人種の住む支那大陸の食物は何處へ行つても支那料理だ。

殊に現代のやうに、交通、文化の交錯が甚だしくなると、其の趣の相違まで段々失はれて來て、廣東カントンも上海シャンハイも北京ペキンもさう變りはなくなる。日本で關西料理と東京料理と段々接近して遂に今日では同じやうになつて了つたのと同じの現象だ。

然し、料理、食物はすべて氣候風土に適應して發達するものだから、北京と廣東では今でも相違がないではない。以下、北京、上海、廣東を中心にして支那料理に關する私の乏しい經驗を書いて見よう。

北 京

北京は御承知の通り近世七八百年の間支那の首都となつて來た關係から、宮廷又は政府の大官等は争つて優秀な料理人を抱へて置いたので、自然に料理が發達しそれが民間にも及ぼしたのだ。

大體支那の南方は物資が豊富で北方へ行くほど天恵が乏しい。だから料理の材料としては到底南方におよばないが、それがためにかへつて技術が發達し、また材料も金に飽かして遠方から取り寄せる。

たとへば酒にしても、老酒または黄酒といふ酒は浙江の紹興が、本場だが北京の料理店などでは一度に多量に仕入れる關係から、非常な良酒を出す家がある。五、六十年の老酒を賣つてゐる店がある。だから北方は酒が悪いとは一概にはいへない。

現在北京で一流の料理店といはれるものゝ中では、内城の東興樓、琉璃廠の春華樓、前門の厚德福等が有名だ。

東興樓は山東料理で、こゝの名物としては芙蓉鶏片といふ卵と鶏肉の料理など有名だ。點心だが杏仁豆腐もこゝの一番旨い。

厚德福は河南料理で、川魚を特色とする。大層古い汚ない家だが通人の行く店で、清朝時代には皇帝が微行されたといふ話さへある。

春華は家も相當綺麗で、こゝは北京料理。やはり川魚が自慢で、鱸魚絲（うなぎ）、松鼠魚（川魚）等の名物料理がある。

此のほか北京の有名な料理にはゆる成吉斯汗といふのがある。生の羊の肉を焼きながら食ふので、冬季に限つたもの。前門の肉市といふところの正陽樓が本家となつてゐる。日本でも日本橋濱町の濱のやが、正陽樓の道具を懇望して譲り受け、薪まで北京から取り寄せるといふ凝り方で、毎年十一月頃からやつてゐる。此の薪は北支那獨特の柏樹といふ木の根だとかいふ。豪快味タツプリの料理だ。

内城西單大街に沙鍋居といふ豚専門の料理屋がある。二百年も繼續してゐる家で、その家

では毎朝一頭の豚を屠つて、それを賣り切つてしまふと店を閉める。大概正午までに來たお客でお仕舞になる。古い建物で入つた正面の處に「天下只此一家」と書いた木額がかゝつてゐる。

上海

上海へは、四百餘州の物が皆集まつて來る。支那に有つて、上海にない物はないといふ。料理もその通りだ。

大體物資が豊富な上に四方との交通の便があり、現代支那の文化の中心だからあらゆる優秀な物が上海へ集まつて來る。美人でも上海で認められて初めて有名になれる。

上海へ行くと、廣東料理も北京料理もあるが、それ以上に四川料理が流行してゐる。四川料理が入つて來たのはつい近年で、最初は四馬路邊の美麗川といふ店が一軒だつたが、今では何軒もある。四川料理は野菜を多く上手に使つて味も淡泊だ。古い家では味福、小有天、杏花樓等が有名だ。

江南地方の名産に、松江の鱸、揚子江の厥魚、青魚、羊觴湖の蟹等、いづれも天下の美味と

されてゐる。禪魚といふ八つ目鰻の料理や、揚子江で捕れる六、七尺の鯉の料理などもある。

南京路に冠生園といふ現代的茶館があつて流行してゐる。ランチ支那料理で味もよい。

南京は新開地式でさつぱり駄目だが、それでも有名な秦淮の畔には古い料理店も多少は残つてゐる。

浙江省杭州は料理がうまい。西湖畔の茶館や茶館は雅致がある。酒は紹興を控へ、茶は龍井といふ本場に近い。西湖名産の蓴菜や筍の料理は茲の名物。

ついでに思ひ出したが、支那人はあれほど何んでも食べるのに、蕨だけは食べないのは不思議だ。蕨を齒朶と同じに思つてゐる。

寧波の料理は海魚を盛んに使ふ。それから家庭料理などでは餅を必ず使ふ。日本人の食物と甚だ一致する。支那文化が日本へ輸入された時代は殆ど寧波が通商の中心だつた。古くは遣唐使も大概寧波を経由した。さういふ譯から寧波の食物が最も多く日本へ影響したと見るべきだ。

寧波は、上海が開けるにおよんで海港として衰へてしまつたが、その代り寧波の商人が上海へ進出して、今日のいはゆる浙江財閥をつくつたのだ。

支那に、『食在廣州、着在杭州、死在柳州』といふ諺がある。食物は廣州即ち廣東、着物は杭州、こゝは絹の産地だ。お終ひの死在柳州といふのは、江西省の柳州は樟樹の名産地だ。だから柳州で死ねば樟木の上等の棺へ入れて貰へるといふ譯だ。

廣東は料理、食ひものでは支那第一等の土地だ。實際本場の廣東料理は驚くに足りる。

人間がこんなに贅澤なものを食つてもいゝかしらんと時々疑問を起したくなるくらゐ。廣東料理は豊富でかつ美味だ。

私の知人の外交官が、北京へ赴任して、北京料理は世界一だと思つたさうだが、次に廣東の總領事を三年勤めて、またもや北京へ行くと、まるで田舎料理の感があつたといつたが、けだし掛値のない咄しだらうと思ふ。

廣東人と來ると全く食ふために生きてゐる人間としか思はれない。全部が美食家だ。北京や上海では、労働者などを相手にする飯屋には、飯屋獨特の旨い物はあるにしても要するに下等であるが、廣東の街にはよくある労働者相手の飯屋へ行つて船頭や苦力などが食事をするのを

見ると、大皿に盛り上げた素晴らしい御馳走を食つてゐる。味も勿論上等だ。その美食にも誰でも驚かずにゐられない。

廣東独自の食物も澤山あるが一番有名なのは粥だ。この粥に幾種類もあり、生の魚を入れたのを魚生粥といふ風にそれ／＼名稱がある。魚や、鶏や、いろんな味附があり、複雑なヤク味が副ふ。粥は大きな深い瓶のやうな土製の釜で根氣よく煮る。料理屋では勿論作るが、粥船といふのがあつて船で賣りに來る。

日本では日比谷の山水樓が本式の廣東粥を作る。しかし前もつて頼んで置かないと急場では間に合はないこともある。

廣東のイカモノ料理も有名だ。蛇料理、猫料理、犬料理、鼠料理、ゴカイ料理——と名を聞いただけでウンザリする。

蛇料理では蛇王滿といふ家が有名だ。こゝへ行くと檻の中に數百匹の蛇が入れてある。お客がコレを指すと、ボーイが手を入れて無雑作に頭を持つて提げて行き、物の十分も経つと皿の上に盛り上つてくる。けだし肉ばかりで勿論原形は止めてゐないが、青玉のやうな脂が浮び、多少青臭くて氣持が悪い。

廣東には犬猫料理専門の家があるから驚く。

鼠料理は、鼠の子の毛の生えてゐないのをよく洗つて生きてゐるまゝのやつを食ふのだが、これは廣東省の潮州が一番盛んだ。潮州は韓退之が流された處だ。韓退之も鼠を食はされてへコタレたに違ひない。

大鼠は、皮を剥ぎ、肉を開いて骨を去りよく洗ひ、戸板へ張り付けて天日で干物にする。それをちよつと焙つて醬油をつけて食ふのだが、河豚の干物などより遙かに旨い。

北京雜記

打茶圍

當時M君は、三十歳位の獨身者で、公寓（支那の下宿のやうなもの）に住み、支那人とのみ交際し支那人の飯屋へ行つて食事をし、純粹の支那生活に浸り切つて暮してゐたのだ。

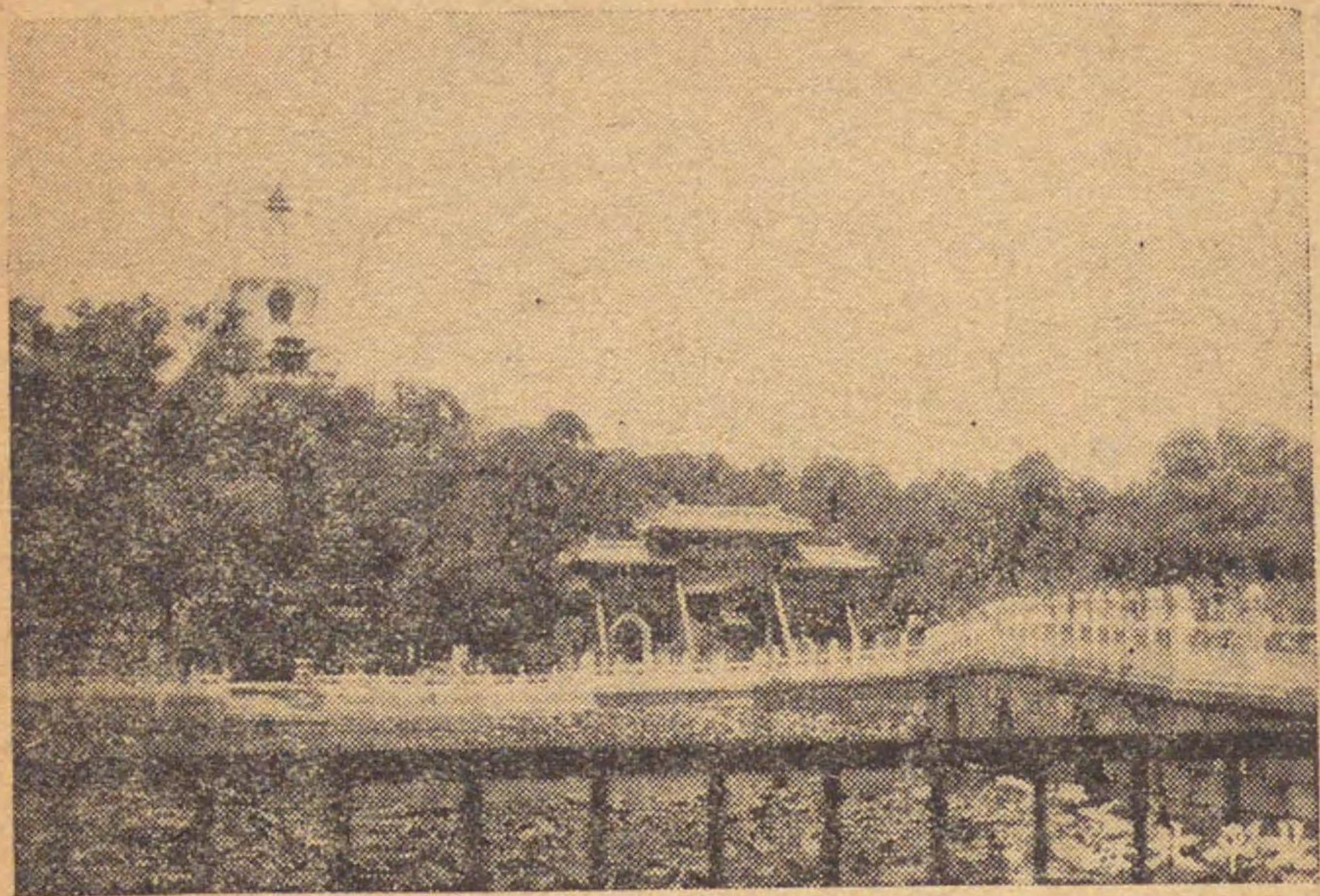
「私はもう日本へ歸る氣はありません、一生北京で暮したいと思ふ」

と云つてゐた。支那の好き、北京の好きが、この好學の青年を魅了し切つてゐるやうに見える。同君は當時A新聞通信部の記者をしてゐたが、それを辭めても中國人に日本語を教へる仕事だけでも生活は出來ると云つてゐた。

或晩M君の案内で寄席へ出掛けた。東單牌樓から前門外迄二十錢できめて洋車へ乗つた。すなはちおん乗りである。合歡木の花咲く並木の街を通つて正陽門へ出る。この門を普通前門と云つてゐる。北京の繁昌はすべて前門外にある。大商店、料理屋、劇場、寄席、藝妓屋——すべ

て代表的な物は此處にある。

青雲閣といふマーケットの三階が寄席になつてゐた。それは南方の茶館とほゞ似たやうな構造で、椅子などは相當掛け心地の好い物が備へてあり、直ぐに茶と西瓜子を持つて来る。時間が早いのでまだ客はいくらも入つてゐない。こゝへ出る藝人は大部分女で、それは太鼓といふ藝だ。直径五、六寸の小さな太鼓を前におき、細い一本の棒でそれを打ち乍ら、一段の物語を語る。三味線と胡弓がそれに加はる。太鼓は元來山東に發祥した藝だが、南方へも普及してゐる。これには鼓書といふものがあつて、語り物は文章が一定してゐる。一種の淨瑠璃である。其の起源はほゞ七八百年の古に溯るもので、現在支那に残つてゐる民衆藝術の一番古い物だと云はれてゐる。私はこの太鼓が好きで上海でよく聞いたものだ。すると大概の人が、太鼓は北方の物だから北京へ行かなければいゝ藝人がゐないと云ふので、今度北京へ来てこれを聴くことは一つの楽しみに數へてゐた。併し、青雲閣で聴いた太鼓には私を感じさせたものは一人もなかつた。幸ひM青年は民衆生活の研究家で且つ太鼓にもよく通じてゐたから、私は其の後M君と共に方々で太鼓の藝人を見て歩いたが、つひに北京では一人も氣に入つた者を發見しなかつた。これは思ふに、あらゆる藝人がさうであるやうに太鼓のいゝ藝人は、北京よりも遙かに收入



大石理の塔 (北 京)

の多い上海へ走つて終ふのだらう。さうして本場には屑だけ残つてゐるといふ感があつた。

「来たついでだから、打茶園を少しやりませうか」とM君が云つた。それも宜からうと私は答へた。

青雲閣を出てブラ／＼歩いて行くと、其の邊は一帶の花柳界だつた。妓館が軒を並べてゐる。妓館の入口には妓の名前を書いた圓い軒燈が花のやうに出てゐる。翠蘭、玉珍、艶芳、翠卿といったやうな名前だ。そして二、三人の男衆が必ず門口へ出てゐる。それに構はず入つて行くと、男衆が一室へ案内する。客は椅子に腰掛けてゐると、室の外に立つてゐる男衆が

「看客——」

と大きな聲で呼ぶ。すると部屋々々にゐる女達が、ゾロ／＼庭へ出て来て、一人づつ順々に客のゐる室の入口に立つて顔を見せて行く。男衆が其の間入口の垂幕を手でかゝげてゐる短い時間である。客は見た女の中に氣に入つた者が無ければ黙つて立つて出れば宜らしい。何等の責任なく見るだけ見て出ることが出来る。

客が何人目と云ふと、男衆が其の女の名を呼ぶ。直ぐにやり手が来て女の部屋へ客を案内して茶と西瓜子を出す。茶を飲み、西瓜の種をかじり乍ら、他愛のない談をして遊んで歸るのだ。それに對する花代は以前は一圓だったが、近年は大概二圓がきまりだといふ。

この遊びを打茶圍ダチャウヱと云つて、北京獨特のもので、一つの名物のやうになつてゐる。日本から行つた者は誰でも先づこれを見せられる。

一、二軒廻つたあとで、M君は馴染の妓のある家へ私を案内した。それは陝西巷の雲香斑といふ家で、屋内は手広いけれども、恐ろしく古い家だつた。少なくとも百年以上の歴史が其の色や匂ひの中にあつた。

M君は隻脚で片足は義足だ。それで細いステッキ一本あれば少しも不自由はない。義足で八達嶺の峻嶮を攀ぢて萬里の長城を踏破したといふくらゐだから達者なもんだが、打ち見たると

ころ華奢な身體をした上品な青年である。私は同君が高い階段を昇る時心配でならないから、わざと其の後から護衛のやうに附いて行くと、M君は途中で振り返つて

「大丈夫ですよ」と云つて笑つた。

私達は、最初千金小姐といふ妓の部屋へ入つた。それはM君の馴染だつた。馴染と云つても、M君は君子だから、單に打茶圍ダチャウヱだけの馴染に過ぎない。そこで私のために「看客クワンコウ」をやつて貰つた。

そして私の相方がきまると、于雪芳といふ其の女は、私達を自分の部屋へ伴れて行つた。千金小姐も于雪芳もどちらも十七位の年頃だつた。前者は南方生れ、蘇州だと云ふし、後者は純粹の北京生れだと云つた。

其の部屋は大變廣くて、そして眞つ黒く煤びてゐた。箆笥ヘシだの化粧戸棚だのが置いてあつて、小さい造花が瓶に挿して飾つたりしてある。

千金小姐はM君に向つて

「貴方は近頃ちつともお見えにならんぢやありませんか」と云つた。
するとM君は卽座に

「螺鍋子上山、前短」と答へた。ところが小姐には其の意味が解せない。すると北京兒の手雪芳が代つて

「小鷄子不撒尿、各有一變」と云つた。

いつたい何の問答かと私が訊いてみると、M青年は笑ひ乍ら説明した。

「螺鍋子はせむしです、せむしが山に上るのを下から見ると、前短は前が無いといふ意味ですが爰では錢短、即ち錢が無いに通じるのです。お金がないから來られないと申したのです」

「其の後は」

「小鷄子不撒尿、各有一變は鷄は、小便をしないが、それ〴〵方法があるのだらう。といふ言葉で、つまり、お金はなくても何んとか方法があらうぢやありませんかといふ意味です。北京の一種の通語なんですよ」

私達がそんな話をしてゐる時、一匹の大きな鼠が床の上へチヨロ〴〵這ひ出して出た。床に散亂してゐる西瓜の種の破片を拾つて食べるのだつた。やゝ暫らく経つと、二匹、三匹、四匹——鼠の數は殖えて來た。仔猫ほどもありさうなよく肥えた鼠共は床の上を右往左往してゐる。

「鼠を飼つてるのか」と私が于雪芳に訊くと

「えゝ、妾が御飯を遣つて飼つてるのよ」

と、于雪芳は傲然とした身振りをして答へた。

北京料理

私は熱河からトラック旅行をして來て、北京へ着いた日の夕方、M君に伴れられて行つて東興樓の山東料理を食べた時、世の中にこんな美味があるかしらと思つた。其の時食べた料理を全部は覚えてゐないが、特に美味だつた物だけ手帳に控へておいた。

鶏絲粉片排黃瓜

紺溜魚片

杏仁豆腐

『杏仁豆腐』は點心であるが、夏向きにはもつて來いの食物で、此家のは何度食べてもうまかつた。北京に滞在してゐる間に支那料理もちよ〴〵食べに行つたが、何しろ眞夏のこと

料理を味はふといふ季節ではなかつた。東興樓のほかに、やはり城内の廣東料理、東華樓、前門外の春華樓（北京料理）などへ人に伴れられて行つた。春華樓には三つの名物——代表的料理があつてそれも全部味はつた。其の三つの料理は次のやうな物である。

鱒魚絲（うなぎ）

鍋貼鶏（ゆば）

松鼠魚（河魚）

それらは何れも特色のある料理だつた。そしてこれらの代表的菜館の料理は不味からう筈はないのである。併し最初東興樓で食べた時のやうな味覺は其後は何處へ行つても味はふことが出来なかつた。正直に云ふと、熱河で麥飯と菜ツ葉ばかり食べてゐた人間が北京へ来て第一流の料理を食べた時の驚きと満足は、料理を品評する標準にはならぬのだ。

北京料理だの、四川料理だのと云ふけれども、料理はやはり廣東だ。本場の廣東料理と比較したら全く問題にならない。第一贅澤さにおいて桁違ひである。湯（スープ）を一ト口吸つてみれば大概料理の標準が分る。但し揚げ物だけは何處で食べてもうまかつた。油が甚だしく上質だ。けだし北京料理の一特色だらう。とにかく廣東の料理は、其の味において規模に於て、

贅澤さに於て到底他の土地の追従を許さないものだ。

北京に有名な豚専門の料理屋が一軒ある。沙鍋居といふ家で、すでに二百年も繼續してゐる店だといふ。其の家では毎朝一頭の豚を屠つて、それを賣り切つてしまふと店を閉める。だからせいぜい正午までしかないさうだ。私は沙鍋居へ、大毎の松本氏、滿鐵の大塚氏、甲斐氏の四人づれで午前十一時頃朝飯ぬきで出掛けた。

其處は西單大街といふ城内の大通りで、街の片側に二丈あまりの長い土塀が続いてゐるところがあつて、其の土塀からさし掛けのやうに造られた店がある。平屋の小さい家だ。入ると正面に『天下只此一家』と書いた木の額がかゝつてゐる。小室が幾つかある。私達が通された奥の室は直ぐに煉瓦の塀が室の壁になつてゐる。この土塀の中は、清朝の定王府といふ親王家の第宅だつた。元來この沙鍋居の起原は、定王府へ勤める舍人達が、毎朝勤務を了へて歸宅する途中に一寸一杯飲んだり飯を食つたりするためにやらせた店だつた。それが次第に評判になつて一般の客が澤山来るやうになつたのだといふ。

料理は頗る安價だ。上等白肉全燻といふのが、二十八件（品）で定價三元八角（三圓八十錢）だ。私達はそれを注文した。

豚の全體を、一物も餘さず料理して食はせるのが此の家の自慢である。勿論豚以外には何も作らない。二十八件悉く控へてはないが主なる物を列擧すると

- | | |
|----------------|-------------------|
| 拌 雙 皮 (豚ノ耳) | 炸 下 額 (豚ノ顎) |
| 鹽 水 心 (豚ノ心臟) | 炸 胡 臉 (豚ノ額ノ肉) |
| 鹽 水 抓 (豚ノ蹄) | 尖 炸 口 条 (豚ノ舌) |
| 鹽 水 肝 (豚ノ肝臟) | 白 肉 (ロース) |
| 拌 肚 塊 (豚ノ胃袋) | 紅 血 腸 大 椀 (赤血) |
| 鹽 水 肘 花 (豚ノ脛肉) | 白 血 腸 大 椀 (白血) |
| 炸 鹿 尾 (豚ノ尾) | 全 下 水 大 椀 (豚ノ生殖器) |
| 炸 肥 腸 (豚ノ腸) | |

ざつとしたところが、かういつたものだ。耳や蹄や胃袋あたりまでは我慢するが、尻尾だの顎の肉となると氣の故か少々無氣味になる。『全下水大椀』といふ生殖器の件に立ち至ると、相手が豚であらうがなからうが、どうにも食ふ氣がしない。それよりも無氣味なのは、生血を固形させて豆腐のやうにしたものだつた。四人とも始めのうちには勢よく食べてゐたが、段々變



(京北) 寺 雪 碧

な物が出るので箸の動かし方が緩漫になり、終ひにはウーンと唸つて眺めてばかりゐるやうになつた。

紅樓夢の舞臺

M君に案内されて、城内の隆福寺の縁日を見物に行つた。この縁日は毎月九、十、十一、十二と四日づつ開かれるのだ。境内一杯にあらゆる店が出、いろんな見世物が掛る。日本の縁日と殆ど變りがない。其處へ集る人達は、中流以下といふよりも下層の人々が多い。其の階級人の慾望や需要に投じさうな品物や、食べ物や、低級な乞食芝居のやうな物ばかりだ。

けれどもかういふ種類の芝居には獨特の味がある。木戸錢は大概銅幣三個位だ。九尺四面位の舞臺を設け、其の半を囃方が占め、残りの半分の面積で俳優が芝居をする。歌を唄つたり立ち廻りをしたりするが、後へ退つた時には俳優自身も囃方になつて太鼓を叩いたり笛を吹いたりする。非常に呑氣なものだ。

かういふ草芝居のことを『小班子』と云ふ。小さい一組の意味だ。又名『野臺戲』とも云ふ。南方では『草臺班』と云ふ。何れも野芝居といふ意味だ。處が北京人はこれを『二簧』と

呼んでゐるが、二簧は曲の一派の名だから、小班子を一系列に二簧と呼ぶのは無論間違ひである。

そんなことはともかくとして、貧しい家庭の娘達や、相當年取つた女達までが、神妙に木の巖山イハヤマで、この放浪の藝術家達の技藝に魅せられてゐる光景にも興味がある。女客を吸収する一座は、男優ばかりで、其の中には實際魅力のある美少年が交つてゐる。女形の美少年が箎を持つて見物席を一巡すると、女達は喜んで巾着の紐を弛めて銅貨を箎の中へ投げ込むのだ。

隆福寺を出て洋車で十利海へ行つた。其處は北海と直ぐ隣り合つた湖で、其の湖畔が夏季の盛り場になつてゐる。湖の周圍には数奇な別荘風の邸宅が並んでゐる。

此の地は、明時代に宮殿のあつた處で、有名な小説紅樓夢の舞臺面がこの十利海であると云はれてゐる。十利海はさういふ意味で非常に回顧的である。この水は、萬壽山の昆明湖と同じく玉泉山の天下第一泉を源としてゐるさうだ。清朝時代には内務府の奉宸苑の管理に屬してゐたが現在は市政府に移つてゐる。

民國以來此處は荒廢する一方だつたが、最近其の振興策として、池中の一筋の道路を利用して夏季の娛樂場を開くことになつたのだ。

池中の道路には柳の老木が茂つてゐる。其の下に、飲食店、茶館、大道藝人、芝居見世物などが隙間なく出てゐる、何れも大繁昌だ。アンペラの小屋掛の太鼓の寄席まで出来てゐた。太鼓好きの私と君はそれへ入つて茶を飲み乍ら太鼓を聴いた。藝人には中々美しいのがゐる。一人が紅樓夢の『黛玉悲秋』を語つた。黛玉が寶玉に別れを告げて死ぬる場面である。場所が十利海だけに面白く感じられる。側面の方に公安局の布告が貼つてある。『男女分座』『不許叫好』などは當然だが『莫談國事』とあるには驚いた。其處を出て少し行くと、道端でしんこ細工をやつてゐる中老人があつた。立ち留つて見ると其のしんこ細工たるや精妙驚くに堪へたるもので僅か一寸未滿の形で完全な似顔を作り、髪飾、衣裳、其の他實物にあるだけの物を附けてゆく。細工に使ふ道具は篋一本である。

M君の話を、しんこ細工のことを北京語で『醬米人兒』と云ふ。北京に醬米人兒の名人があつた。其の人は曾て傭はれてフランスの博覽會へ行つて外國人を驚かしたといふ。

「この人はその弟子かも知れません」とM君は云つた。

私が、梅蘭芳の天女散花を作つてくれと注文すると、十五分位掛ると云ふから其の間に他を見に行つた。湖畔に一軒の料理屋があつた。其の家は明時代から續いてゐる料理店だといふ。

建物は古くはなかつたが、その二階から欄干に凭れて若い女が二人湖の方を眺めてゐたのは古い小説の挿繪のやうだつた。

湖には荷が浮いて岸には柳が立つてゐる。白い壁、古風な門、反りのある屋根。

戻つて來ると、梅蘭芳その儘の天女散花が出来上つてゐた。

私達は十利海を出て、其の眞向ひの北海公園の入口から入場料を拂つて入つた。公園の中に仿膳飯莊といふ料理屋があつた。風雅な落ちついた家だつた。それは元皇室の大膳寮に勤めた料理人が創めた家で、こゝの焼餅は北京一だとM君が云ふので、立ち寄つて簡単な食事をし、名物の焼餅を食べた。

湖水の對岸には白塔が立つてゐる。其の下に遠帆樓だの碧照樓などの古い建築がある。此の邊の風景は北京第一である。

私達は畫舫に乗つて對岸へ渡つた。

天 橋

北京に天橋といふ民衆的一大娛樂場がある。そこには支那の相が濃厚に露はれてゐた。上海

の大世界が、近代支那の一面を表現するものであれば、天橋は傳統的支那の昔ながらの姿を代表するものだと思つた。それは衰へつゝあり、臆て亡びて了ふ運命を持つてゐるものゝ敗殘的な姿だ。私は例のM君に伴れられて其處へ行つた。

其の數日間は、北京は釜の中で煮られるやうな暑さだつた。室内百五、六度、戶外は百三、四十度に昇つた。かういふ暑さになると夜も晝も窓は密閉しておかなければならなかつた。わづかに明け方の比較的空氣の冷却してゐる時間を利用して、三十分位換氣を行ひ太陽の出る前に再び閉め切つてしまふのだ。

私もM君も上衣なしで、スポーツシャツを引つ掛けて洋車へ乗つて出掛けた。正陽門から城外へ出て大通りを真直ぐに走つた。此の街は電車も通つてゐる。一哩以上も行くと、街は場末らしくゴミ／＼して來た。骨董屋だの、芝居の衣裳を貸せる損料屋だのが何軒もある。大道に古物のガラクタを積み上げたり並べたりしてある附近には、二三の芝居小屋などもあるが、屋根も戸羽目もボロ／＼に朽ちて、立ち腐れになりかけてゐる。勿論芝居は掛つてゐない。此處が天橋である。電車もそれから先へは行かない。町並が盡きて彼方に外城の城門と城壁が見えてゐる。

道路の西側一帯方數町の面積に、無数の小屋掛け見世物が出てゐる。常設の建物でやつてるものもある。其處には、あらゆる下等な食ひ物店も出てゐる。私達はまづ、その一番端の通りからソロソロ歩き始めた。

小屋掛けの場合は無論だが、常設館でも入つて覗いて見る分は無料である。座席へ着くと始めて見料を取りに來る。見料なしの茶錢ばかりのものもある。



(秋艶新) 優女の那支

小さな小屋掛けの娘芝居をやつてゐる。僅か疊二枚位の處で、ぐる／＼廻り乍ら歌を唄つてゐる女芝居の客はよくしたもので男ばかりだ。女芝居のことを北京語で俗に落子と云ふ。さうした女優を坤角と呼んでゐる。坤角の中から稀にいゝ

女優が出て本芝居へ出て、人氣を馳せることがある。民國七年に復辟を企て、一敗地にまみれたが、無雙の猛將として驍名を天下に轟かせた張勳の圍ひ者となつた劉筌喜といふ女は、天橋テンチアオの坤角コンチアオ出身だつた。近年では新艶秋といふ女優が天橋の坤角の中から出て名聲をとつてゐる。それは舞臺顔が名優程艶秋に似てゐるところから新艶秋と名乗つたのだ。

其の側に太鼓タイクの定席がある。足休めに入つて太鼓をきいた。舞臺には、番に當つた藝人が唄つてゐる外に、此處へ出勤する全部の太夫達が舞臺の左右に腰を掛けて自分の出番を待つてゐる。お客から名ざしで注文することが出来る。此の事を點曲と云ふ。それには花代が此處では四角(四十錢)となつてゐる。

番を待ち乍ら、飯を食つてゐる女もあつた。それを少しも憚る風はなく、お客の方を見乍ら、當然のことのやうな顔をして箸を動かしてゐた。私達も一二度點曲をしてやつた。何しろ暑いせいもあらうが客が入つてゐない。坐つてゐる總身から瀧の如く汗が流れる。

「列國諸侯紛々として亂る——」

俞白我が馬鞍山に琴を弾する物語を後にして其處を出た。

天幕の下に人が二列に向き合つて腰を掛けてゐる。それは將棋の會所だつた。五、六十名の

客が對局してゐる。日本の將棋とは違つてゐて駒の形は圓形だ。全部賭け將棋だ。暑さも忘れて勝負に夢中になつてゐる圖はいかにも天下太平で、この道は何れの國でも變りはない。角力があつた。こゝは大變な人氣で、黒山の人群りでワイ／＼騒いでゐた。力士が場の上つて組み合つてゐた。見物のゐる處と同じ平な地面で土俵といふ物はない。力士は綿の入つた柔道の稽古衣のやうな物を羽織つて、帯を締めず、足には布製のブク／＼した深い靴をはいてゐる。一人は四十前後の太鼓腹を突き出した屈強の力士だが、相手方の方は五十餘の頭の禿げた男で、一見して彼の敵ではなささうだと思つたが、果然、老人の方が地響きを打つて投げ出された。角力シヨウチカラのことを蹠シヨウチカラと云ふさうだ。

軍書讀みがある。講談のことを評書と云ふ。こゝも澤山客を集めてゐる。髻を生やした先生が前に机を置いて、襦袢一枚になり、便々たる腹を見せて三國誌を談じてゐる。

私の最も奇異に感じたのは、跑小人パオシヤオレル兒と呼ぶ、馬に乗る眞似をする藝だつた。先づ口上云ひが出て、姉妹の娘が、一人は馬に、一人は驢馬に乗つて廟へお詣りに行きます、といふやうなことを云ふ。すると、張り子の馬を體へ縛り付けた二人の娘が、手綱をかいくり馬を御する體で場をグル／＼廻り始める。最初はゆるやかに走つてゐるが、やがて馬に速力が加はり、前脚

を舉げて飛んだり、後脚で蹴つたりする。盛んに走り廻つてお仕舞ひになる。只それっきりの藝當だが、眞に迫つてゐる。一遍藝をやると小娘の方が汗に濡れた苦しげな顔をして箆を持つて錢を集めて歩く。

嘯々戲ゴッゴッといふのは奉天が本場だと云ふ。小班子シヤオバンズの一種だ。それへ入つて腰を掛けてゐると、茶を持つて来る。茶代は一人分銅幣三個だ。銅幣三個は一錢五厘位にしか當らない。その他に入場料は取らない。其の代り、開幕毎に小孩が箆を持つて錢を集めて歩く。一定額に達すると芝居を始める。客は大概二、三錢宛箆の中へ入れる。今しも次の芝居の錢を集めて廻つたが、まだ少し不足だと見えて

「どなたか御奮發下さいませんか」と一人の男が扮装の儘舞臺へ立つて云つてゐる。そこでM君が小孩を呼んで、銅貨を五六枚投げ込んでやると、小孩は躍り上つて、高聲にそれを舞臺へ報告した直ぐ様囃方が胡弓をひき出した。

見世物小屋の間には食ひ物屋が一杯店を出し、西瓜を食ふ者、甜瓜を食ふ者、心太、しる粉、焼餅シヤオセン、其の他あらゆる食ひ物がある。羊肚ヤントといつて羊の胃袋を賣つてる店もある。天橋テンチヤオはなか／＼一日や二日では見切れない。

支那の社會相

——主として乞食を通して見たる——

乞食と殘飯

とある往來の片側に人が黒山のやうに立つてゐる。其の澤山の人の頭越しに、何やら争ひわめき合ふ聲が聞えてゐる。見物人の顔はみんな笑つてゐる。黄包车ワゴン(人力車)が通る、自動車を通る、時々電車も通る——其處は上海シヤンハイの北四川路といふ街の一部だ。此の邊の横丁や露地の中には日本人がいつぱい住んでゐるが、表通りは大概支那店だ。餘り上等の商店は無い。

私は友人のK君を振り回つて

「何でせう？」と尋ねて見た。

「さあ何ですかね」

二人とも幸ひ丈が高いので見物人の背後から伸び上つて見ると、どうも中の様子が喧嘩らしい。丁度私達は何も用が無いのでブラ／＼歩いて來たところだつた。喧嘩なら私も見物して行

かうと思つた。君子危うきに近寄らずと云ふが、支那人の喧嘩は決して危うくないことを私は知つてゐる鼻と鼻との間を五分位の距離に近寄せ、双方熊鷹のやうに眼を怒らせ齒をむき合ひ、両手の拳を背後へ伸ばして、まさに相搏撃せんす勢ひまでは示すが、さて支那人は決して飛び掛らない。そのうちに鼻の距離が一寸、二寸、三寸と遠のいて、それと同時に握りしめた拳がだん／＼緩んでくる。けれども反對に口喧嘩は益々猛烈になる。罵り、毒づき、喚き合ひ、其の結果、やがて又もや鼻と鼻とを擦り合はせる。五分、十分、一時間、二時間。仲裁が入らない限り、結極、途中で用事を思ひ出した方が喧嘩は負けになる……か、どうか知らないが、兎に角支那の喧嘩は、支那の戦争と同様に氣がながい。其の代り怪我過ちは滅多にない。それでも何んとなく勝負はつくから不思議である。本人同志が怪我をしない位だから見物人が側杖を食ふやうな馬鹿な事は勿論ない。支那人はそれ程平和主義者なのである。

グ／＼人を押し分けて前へ出ると漸う喧嘩の正體が見えた。喧嘩の片相手は何處かの下僕らしい釘付きの淺葱木綿の短い服を着た廿位の若者で、其の足元には二つ割りの竹の天びん棒の兩端に桶のやうな容器を附けたのが置いてある。處が、片方の相手は乞食だつた。而も此の方は人数が二人だ。其處は背後が古い煉瓦塀で、直ぐ其の側に同じく煉瓦の門がある。門の上

の鐵のアーチに掛つてゐる看板を見ると「上海^{シヤンハイ}××公司總辦事處」と書いてある。さて其の若者と二名の乞食だがしきりに何事か論じ合つてゐるが。私の耳には何を云つてゐるのか全く陳分漢分で譯が分らない。然し、とにかく若者も乞食も猛り立つて嗚鳴つてゐる。あるひは、自分の方の理屈らしい事を縷々として辯じ立てゝゐる。どちらも見物人を意識に置いてやつてゐるらしく、さういふ自家の理屈を述べる時などは交互に周圍を見廻して同意を求めるやうな顔付きをする。が、見物人は只笑つてゐるばかりで全く我不關焉の態度を示してゐる。とやがて若者は喧嘩を打ち切りにして天びん棒を肩に當てて立ち去りさうになつた。すると乞食は「此奴をやつてなるものか」といつた風に、いきなり一人が天びん棒の前の方に下つてゐる綱を兩手で捕まへた。そこで若者も同じく其の綱を片手で引き寄せ乍ら、片手の拳を固めて振り上げた。すると乞食は意久地もなく綱を放して一步後ろへ遁げでしまつた。そこで若者が再び出掛けようとする、今度はもう一人の乞食が後ろの方の綱を捕まへた。で、若者が憤然として後ろを向いて其奴を擲らうと身構へると、相手はパツと後へ飛び退つたが、同時に前の乞食が又もや綱を捉まへる。前の奴を追つ拂ふと後の奴が捉まへる。後の奴を拂へば前の奴が綱をまへる。二人に一人で、若者は如何とも手が下せない。到頭諦めて又もや天びん棒を地面に卸し

て議論に移つた。

何が何だか私には譯が分らない。

「一體何の喧嘩です？」とK君に尋ねると、K君はフ、ンと笑つて

「いや、喧嘩といふ程でもありませんがね。乞食の奴がネ、此の飯屋のボーイに向つて、お前の持つてゐる残飯を呉れと強請つてゐるんだが、ボーイが應じないもんだから、それで今悶着をやつてゐるんです」と云つた。

何だ残飯の喧嘩かと私は張り合ひ抜けのやうな氣がしたが、然しなか／＼面白いので根氣よく見物してゐた。悶着の原因は分つたが、それにしても圖々しい乞食があつたものだ、見物人は何故黙つて見てゐるのだらうと私は思つた。すると果せるかな其處へ一人出て來た。此の人も矢張り通り掛りらしいが、暫時見てゐた後で前へ進んで口を利き始めた。五十位の年配で、舊式な帽子を冠り、古びた羅紗の上着を着てゐる。眼鏡を掛け、髻は生やしてゐないが、一見商人らしくはない。小官吏の古手とでもいつたやうな、何處か尊大な態度である。此の中年の老人は中へ割つて這入ると、若者と乞食とを等分に見遣り乍ら、悠揚とした早口で何か尋ねた。すると初めに若者がそれに答へた。續いて乞食も答へた。どちらも此の仲裁者に向つて自

身の云ひ分を理解して貰はふといふ風で一生懸命答へた。殊に乞食の方は自身の主張する理屈らしい事を、身振り手振りに時には哀訴するやうな表情や口調を用ゐて喋々縷々として辯じ立て、止まないのだつた。議論の要旨らしい處へいくと、乞食は一句一句力を入れて云つた後で「先生、左うでせう？」と仲裁者の顔を見乍ら念を押した。けれども仲裁者の老人はどちらの肩も持たぬやうな顔つきで只「フ、／＼」とうなづき乍ら双方の云ひ分を聞いてゐる。

「面白い！」と私と並んで見てゐるK君は其の時感心したやうに獨り言を云つた。

「何が面白いんだい、君、説明して呉れ玉へな」

と私は催促した。K君は眞面目な顔をして、若者と乞食と双方の言論を直譯して私に聞かせて呉れた。K君は同文書院の出身で十數年支那で暮してゐるので、支那人同様に上海語を話すことが出来る男だ。然し私は今K君の譯した言葉を其の通り記憶してはゐないから、私は私の得た印象によつて、其の事柄を敍して行くのほかはない。

先づ若者の云ふところはかうである。彼は此處から二三町先きの或る飯屋の下働きである。而も昨日其家へ住み込んだばかりのボーイである、彼は今日親方の命令に依つて、其家から毎日入れることになつてゐる十何人分かの辨當飯と菜とを持つて、此の上海^{シャンハイ}××公司の事務所へ

運んで来た。そして人々が食べ了るのを待つて今しも其の器類と残物とを運んで親方の店へ歸らうとしてゐるところだ。處が、彼が門を出て來ると其處に此の乞食が二人居て、彼が持つてゐる残飯を分けて呉れと云ふのであつた。彼は勿論これを拒絶した。云ふ迄もなく残飯は彼自身物でないからだ。彼が如何に慈善心に富んでゐるにした處で、他人の物を施すわけにはいかない。彼はこれを其のまゝ手付かず、親方の家まで持ち歸る責任がある。それを若し途中で勝手に處分したならば、それが親方に知れたなら、彼はきつと其の家から暇を出されるに違ひない。だから彼は乞食に向つて、遣ふことはならないと云つたまでだ。處が此の乞食共は太ましい奴等で何でも呉れると云ひ張つて、最後には御覽の通り腕づくで私の荷を押えるので御座います、全體乞食は人から物を強請る資格はあるかも知れないが、遣らぬと云ふものを無理に取る権利は無い筈です。此奴等のする事は晝強盜にも等しい行爲です、どうか先生此の乞食共を叱つて頂き度う存じます——と云ふのである。

次に、乞食の云ひ分はどうあるのかといふと——先生、此の若造は實に譯の分らぬそして無慈悲で強慾な男で御座います。私共は今朝から何も食べないので腹がへつて腹がへつて堪りません。でいつもさういふ日には此處の門前に待つてゐて、辨當屋の下男が出て來るのを待つて

残飯を貰ふのが例になつてゐるのです。これは手前共のみでなくどんな乞食でも皆やることで御座います。人様がたらふく召し上つたお残りを頂戴するのは昔から我々共の特權とされて居ります。それは食べ物が無駄にならないで國家の爲めにも一番良い方法だと思ひます。然るに此の男はそれを承知しないので御座います、彼は先刻からも只今も残飯は自分の物でないから遣れないと申しますが、自分の物でもないのに猶更拒絶する権利は彼にありません。いつたい此の飯桶の中の残飯は誰の物でありませう？此の男は親方の物だと云ひますがそれはさうではありません。何故かと云へば此の男の親方は、十人前なら十人前、幾々らと極めた錢を取つて此の公司へ辨當を入れるのですから、持つて來たゞけの飯はお客様が全部食べてしまつたところで苦情はない筈です、つまり、桶に附いた一粒の飯にまでお客様が錢を拂つてあるのだから、これはもう決して辨當屋に所有權はありません、では、此の残飯はお客様の物かと云ふと左うでもない。あの人達は、腹一杯召し上るだけの分にお金を拂つてゐらつしやる。だから腹へはいるだけ食べてしまへばもうそれで十分の筈です。それ以上の物に對しては權利を有つて居りません。残飯は勿論あの人達の物ではありません。それでは誰の物か？此の男は只飯や器を擔いで持ち運ぶだけの役目で、彼自身も云つてゐる通り残飯は全く彼の物でもありません。

親方の者でもなくお客様の物でもなく、此の男の物でもない。つまり此の残飯は誰の物でもない。宙にブラ付いてゐる天の物です。天は人間を殊に我々のやうな憐れな乞食を育て下さるものです。だから我々は何人に遠慮も無く此の天のお授け物を頂戴する権利があるので御座います。然るに、此の男は誠に譯の分らぬ男でおまけに勝手な理屈を付けて、天の物を私しようと致します、怪しからんのは此の男で御座います。先生何卒十分に此の男を説諭して遣つて下さいまし、といふのである。

「成る程」と私は感心してしまつた。支那は昔から言論の國と云ふだけあつて乞食までがうまい理屈を考へる。残飯の所有権——是れはどうもむづかしい問題だ。成る程辨當屋の親方は飯桶一杯だけの代金を取つてゐるのだから残飯についての所有権は無い筈だ。若し有ると云へば不當利得だ。お客達の方だつて、腹一杯食つて下げてしまつた以上は無論是れに對する権利はない。して見ると誰の物だ？矢張り乞食が云つたやうに天の物なんだかも知れない？——日本へ歸つたら一つ法律家をとらへて此の問題を問ひ糺して見ようと私は其の時思つたが、未だにまだ法律家に尋ねて見ないから、法律上の解釋では是れがどういふ結論に達するものか私には見當が付かないが、支那に滞在中人から聞いた處に依ると、支那では此の残飯の所有権問

題について彼等の間に往々紛争が起こるのは珍らしくないことださうである。乞食と残飯——是れは一見して頗る密接な關係を有つてゐさうな問題だから、彼等の間では常に是れに對する有利な解釋を用意してゐるのかも知れない。従つて私をして大いに感服させ偉大なる理論家だと思はしめたところの此の北四川路に於ける乞食の言論も、或ひは彼等の仲間に於ては既に常套にして陳腐なる眞理なのかも知れなかつた。

私は非常なる興味を以て此の難かしい悶着を老人は果してどう裁くだらうかと見てゐた。然し老人は極めて無造作に、双方の云ひ分を聽き了るが否や直ぐ様命令的にかう云つた。

「貴様、飯茶碗へ二杯宛此の乞食に分けて遣れ」

若者は今迄の強硬な態度にも似ず老人からかう云はれると易々諾々として承知して、自分から飯桶の蓋まで取つて遣つた。乞食は大喜びでめい／＼自分の頭から汗と埃にまみれてポロ／＼の帽子を取つて其の中へ正直に飯茶碗へ二杯宛の飯を掬ひ出した。さうして直ぐ様手掴みでムシャ／＼やり出した。老人は直ぐに向うへ歩き出した。見物人も元の無感興な顔をして思ひ／＼に立ち去つた。若者も天びん棒を肩に當てサツサと其の場を去つた。跡には二人の乞食が煉瓦塀に脊をもたせかけ乍ら帽子の中の飯を甘さうに頬張つてゐるばかりで、其處には最早

饑えたる者が恵まれたところの幸福以外に何物も無く、通行人は一人として振り向いて見む者もない。黄包車を通り、自動車を通り電車が通り午後の支那街は只賑やかで平和だつた。

支那の喧嘩は大概群衆裁判に依つて最後の判決が下される。群衆は一種の陪審官だ。若し今の場合でも彼の老人が下した裁判に對して横から異議を挟む者が現れれば、今度は論争は陪審官同士の方へ移るのだが誰も苦情を云はなかつたところを見ると、老人の裁判は此の場合群衆一同の意志をも代表してゐると見られるのだ。喧嘩の相手同士は、各々自分勝手の理屈を主張して、天地が崩るゝとも一步も譲らないやうな態度を示してゐるが、實は内心何時でも仲裁者の出現を待ち設けてゐるのである。さうして仲裁者、殊に群衆の判決に對しては素直に服従する。これは支那人の輿論を尊重する國民性の一面である。支那人ほど輿論を尊重し、輿論を畏れる國民はない。國內の政争でも外交問題でも、常に輿論を對照に置いて駈け引きをやつてゐる。國際會議で列國の仲裁々判を求めるなどは右の乞食の喧嘩と同じ筆法で彼等の最も得意とする驅引である。自己の力に憑むことを知らず、また自ら憑む可き力を有せぬからであることも勿論である。

乞食の種々相

序でもう少し乞食の事を書く。支那へ行つて驚く事は澤山あるが、乞食の多い事も其の一つである。支那は國中到る處乞食を以て充滿してゐる、と云ふのもチと大袈裟だが、とにかく乞食の多いことは事實だ。

何故支那は斯様に乞食が多いのだらう？云ふまでもなくそれは食へない人間が多いからだ。生活力を有さない憐れな人間が澤山居るからだ。又それと同時に、支那人は性懶惰にして働くことを好まないからそれで乞食が多くなるのだ。とも云へる。或ひは又支那に乞食の多いのは、文化の程度が低いのと、社會制度の不完全なことが原因だとも云へる。文化が發達し社會制度の完備してゐる國では、個人が自覺すると同時に一方さういふ憐れな人間に對する救濟事業が進んでゐるから、乞食の如き不體裁な者は段々尠くなるのだ。以上の理屈は各々眞理をもつてゐる。私も初めはさうばかり考へてゐた。が、數回支那へ行つて明け暮れ乞食を見てゐるうちに或時忽然として私の腦裏に閃いたものがあつた。それは、支那に乞食の多い理由は、支那では乞食をすれば食へるからだ。といふ見方であつた。食へないから乞食になつたのでは

なく、食へるから乞食をしてゐるのであつた。其時私は俄然として眼が開いたやうな氣持になつた。此の見方の顛倒は、乞食問題のみでなく、支那の下層社會を研究する上に重大な意味をもつて來る。

此の逆論理は日本や其の他の所謂文明國の状態をも同時に説明することが出来る。日本では近年著しく乞食の數が減退した。統計の事は知らぬが、自分等が子供の頃に比べて明かに十分の一には減つてゐる。非人制度を施行してゐた徳川時代に比較したら恐らく百分の一の率にも達しないだらう。然し此の事實を見て、我が國土の内には乞食をするやうな悲惨な人間が無くなつたのだと考へたり、或ひは教育が普及し人々の廉恥心が發達した結果だと考へたり、或ひは貧民救濟事業が完備して來た結果だと考へたりすると大きな間違ひである。無論それも幾分宛の理由はもつてゐるが、一番根本は日本では乞食をしたのでは飯を食へなくなつて來たからである。人口が増大し、それと同時に文化が普及して、社會組織が整然と微細に完備して來ると、人類の生活が精神的にも物質的にも餘裕が無くなり、無駄といふものが少しも無くなつてしまふ。乞食といふ物は、社會の餘裕と無駄とに依つて育まれて來た物である。それが現今の如く慌ただしくせ、こましい世の中になつて來ては乞食に生存の餘地がない。昔は乞食が門

に立てばとにかく一厘遣つたものだ。が近來の人は減多に遣らない。路傍の乞食に對しても同様である。乞食に遣らないことについて理屈を云ふ人があるけれど、昔だつて乞食に理屈はないのである。遣る方も理屈無しに遣つた。つまりそこが無駄である。いかほど教育が普及しても、救濟事業が完備しても、悲惨な人間や、廉恥心を有たない人間が根絶しになるといふことはない。少くとも、現在日本國內にゐる乞食の數の百倍位はさういふ不幸な人間が日本國中に存在してゐると私は觀察する。彼等は等しく食ふや食はずに悲惨であり、空腹の前には廉恥心も何も無いのだが、乞食をしても食へないので、寧ろ乞食以上の屈辱や苦痛を堪へ忍んで僅かな食物にあり付いてゐるのだ。社會から淘汰される物は、社會が存在を許さないからだ。東京市中に人力車が減つたのは、人力車夫が自尊心を自覺して來た結果ではなく、電車や自動車に客を奪られて乗手がなくなつたからだ。需用さへあればどんな下等な職業でも供給は無限にある。人の門に立つて鼻聲を出すだけで若しも樂々と飯が食へるなら、現代だつて乞食の志願者は無數に現はれるに相違ない。

さて、話は元へ戻るが、支那ではこの乞食が食へるのである。乞食渡世が現代でも渡世になつて行く。そこで乞食が多いのだ。

支那の乞食は全く食ひ易い状態に置かれてゐる。第一に、支那は天産物殊に食糧物産の豊富な國だ。國土が廣くて其の割に人口が稀薄だから物産は有り餘る状態だ。かういふ風で社會の物質生活の内容が豊富を通り越して過剰を示してゐるから、自然其處に乞食の分け前が生れて來るわけだ。誰でも知つてゐる通り支那の食物は非常に大量だ。あれは料理屋ばかりでなく、普通の家庭の食物も同じ比例に豊富である。日本の家庭の食膳に比べたなら先づ分量に於ていきなり三倍以上はある。然し支那の人だつて實際はさう澤山食べるものではない。餘りが出るからそれは下婢や下男の方へ廻る。それでも餘るから、それは乞食の方へ廻るのだ。料理屋の残物は大概貧民窟の連中が特約して引き受けてゐる。とにかく料理屋だの中流以上の家庭の臺所から出る残物だけでも、可成り多數の乞食が生活して行けるだけのものはある。

それから、支那人は思ひの外施し好きの國民である。神佛詣での善男善女は群がり集る乞食のために家を出る時から用意して行つた銅貨や青錢を惜氣もなくバラ撒いて遣る。がこれは必ずしも性來の慈善心からばかりではなく、乞食に施しをすると罪障が消え、其の上神様や佛様が、施した物の何百何千倍かの福を自分に授けて下さるといふ迷信があるからだ。つまりは自分の慾心からだ。祖先の靈を祀る時でさへ、成る可く立派な供物をすれば、先祖様がそれ相應

の福を授けて下さると支那人は云つてゐる。かういふ宗教の説き方は最もよく支那の國民性を洞察して弱點を擱んで掛つた説き方で、一面から見ると、慾で釣らなければ支那人は施しもしなければ先祖も祀らない國民だといふことにもなる。然し、そんな事はどうだつて構はない、乞食にとつては有難い次第だ。且つ物に名目が立つ。乞食に云はせれば、「俺達は只無意味に他人様の錢を貰ふのではない、俺達はたつた一錢貰つて、其の代りにあの人達は何百何千倍の福を授けて遣る大變親切なそして必要な人間なのだ」といふことになる。まことに重寶な理屈だ。これは冗談ではなく乞食自身の方で全くさう思つてゐるのだからたまらない。支那では乞食までが多少の體面を云ふから可笑しい。曾て私が或地方へ旅行した時、二三人の乞食が蒼蠅く付き纏ひ乍ら何かブツクサ云つてるから、其の乞食の文句を知り度いと思つて同行の某君に通譯して貰つた處が、其の時私は婦人同伴で乞食の眼からは多少景氣の好い成金とも見えたのだらう。「旦那様大層あなたはお儲けなすつたやうですな、どうです一錢施して罪滅ぼしをなすつては」と云ふのだ。又ある廟に詣でた時門前で多數の乞食に包圍されて大に閉口した揚句漸う切り抜けて廟の内部へ這入つた處が、何處から潜り込んだのか此處にも一人の乞食がゐて蒼蠅くねだる。其の乞食の云ひ草は「あなたは此處で慈善をなさるのが一番利益です、何故か

と云へば此處には私一人しか居ないから大勢に強請られる心配はありません」すべてが此の調子だ。物を強請るにも人に恩を着せようとする。何處迄も自己の存在を主張する意地があると云へばあるやうなものだが、殊勝らしさは微塵もない。其の他乞食の手段にはいろ／＼あつて、非常な不愉快から遁れ去るために一錢投げさせるといふ方法や、狭い往來を横に轉がつてアリ／＼通行の邪魔をして錢を取るといつたやうなやり方が先づ普通の處で、尋常一様に門に立つて憐れみを乞ふ者などは先づ無いと云つてよい。事實そんな生ぬるいやり方では乞食の多い支那では人に刺戟を與へないから効果が無いに違ひない。で、どうでもかうでも錢を出さずには居られないやうに乞食の方から力強く仕向けて行くのだ。其の中でも私が見て一番猛烈だと思つたのは去年の秋寧波^{ニンポウ}へ旅行して城内の東門街といふ一番殷盛な街を見物して歩いてゐる際に出會つた乞食である。是れは乞食と云つても普通の乞食ではなく道教の坊さん所謂道士の托鉢だつた。が、矢張り乞食には相違ない。鼠色の汚なくよれた道服を着て素足に木靴を履き、四角の頭巾を冠つてゐる者もあれば冠つてゐない者もある。素頭は長く伸ばした髪をてつぺんで茶釜に結つてゐる。さういふ恰好をした男が五六人打ち連れて、笛と太鼓と鐘とで非常に賑やかに囃し立て、行く、其の鳴物を聞いたゞけでは廣目屋と間違ふ位。其の中に、十九か

廿位の若い道士が交つてゐる。此の道士は素頭で、腰から上は裸體になつてゐる。一寸女のやうな感じのするよい肉付きである。其の男を見ると、何といふ酷たらしさだらう。可成り大きくふくれてゐる乳首の付け根の處を疊針よりも太い針で横に刺し貫いてあつて、其の針からは更に長さ三間位の鐵の鎖が繋がれてゐる。さうして乳房と針とで鎖を引き摺つて歩いてゐる。鎖は鏽々として敷石の上に鳴る。乳房は鎖の重味に引かれて千切れんばかりに伸びてゐる。此の鎖を引き摺つてゐる若者を先に立て、囃しをしながら門々を廻つてゐた。同じ日に同じ街でもう一ぱい酸鼻な矢張り道士の乞食を見た。今度のは一人きりだつた。其の男は、矢張り疊針位の針を、右の頬から左の頬迄突き通して而も口中の舌まで其の針で縫ひ付けてゐた。人の店口に躊躇んで右の手で錢を受ける筈を差し出してゐる。左の手は袖を肩までまくり上げてゐる。其の腕にも例の疊針が皮膚の下を縫うて縦に突き刺してあつて、針の上方に結び付けてある一束の線香からはボヤ／＼と煙が上つてゐる。其の顫へる手で鈴を鳴らしてゐる。

それは何びとでも正視するに堪へない酸鼻な光景だつた。私は急に自身の肉體がうづくやうな痛みを感じて來て眼まひがしさうになつた。

こゝの東門街といふ街は見るから古代的の感じがあつた。三四丁の間は、兩側の店舗は門並

み金總箱の彫刻造りで、街路が狭いだけに薄暗い中に燦爛として光り耀く光景は、華麗といふよりは、寧ろ死後の極樂世界を明像するやうな、一種の不氣味さと恐ろしさを感じて来るやうな街だ。周囲の光景がそれだけに此の道士の乞食は一層私の心を強く打つた。たとひそれが技巧であらうと何であらうと、技巧もこゝまで行けば眞と一致する。乳房に針を突き通して重い鎖を引き摺つてゐる男や、針で口中を縫ひ付けてしまつてゐる男の姿ほど痛切に、人間生活の限りなき苦艱を現はしてゐるものがあらうか。

それにしても、どういふ謂れがあつてあんな無残な技巧をするのかと思つて人に尋ねて見ると、それは詰り諸人に代つて罪障の責苦を一身に引き受けてゐるといふ意味なんださうである。して見ると是れも矢張り例の交換條件だ。是れでは誰でも錢を出さずにゐられない。

概して支那の乞食はかう云つた遣り方で、乞食は乞食らしく女々しく、哀れつぽく持ちかけて人の同情に訴へるといふやうな意久地のない遣り方はしない、壁がヒッ割れさうな聲で號泣するとか、胸がムカついて飯が食へなくなるやうな業病や不具を態と鼻の先きへ押し付けるとか、同じ泣き聲を出すにも素ばらしい變つた聲を出して見せて人を面白がらせるとか、或ひは何かの脅迫觀念を起させるとか、とにかく何等かの武器をもつて相手に肉迫するといふ行き方

で、男性的で勇氣がある。場合によると寧ろ悲壯な氣持がする。彼等自身の觀念も前に述べた通りで、一種の職業的自覺が伴つてゐるのだから卑屈にならない。だから私は支那の乞食は好きである。

見様に依つては支那では、乞食程樂に生活が出来てそして大威張りで暮せるものはない。だから決して初めての旅行者が眼をそむけて同情する程彼等は實は悲慘でも可哀さうでもない。尤も日本でも昔は三日乞食をすれば忘れられぬと云つた位だから、乞食其の物は何處か本質的に好い處があるにも相違ないが、支那に行つて其の格言はます／＼生きて来る。

支那の地方へ行つて何が怖いかと云へば土匪と軍隊より怖いものはないと云ふ。が乞食になればそれも恐しいことはない。土匪だつて軍隊だつて眞逆乞食までは掠奪しない。其のくせ乞食も親方になると數萬元の財産を有つてゐるのが珍らしくない。南京城の城壁に穴を掘つて巢食うてゐる乞食の親方などは有名な金持ださうだが、今でも毎日人力車へ乗つて其處から二里近くある城外の停車場附近の繩張り迄稼ぎに行く、歸途も無論人力車だ。上海の市中にも親方が五六名あるさうだ。彼等乞食の親方の一番主なる収入は何かと云ふと、葬式人夫の請負である。支那の葬式は人も知る如く實に大袈裟で、普通の葬式でも二三百人位の行列が並んで行

く、其の大部分が傭ひ人夫だ。會葬者は全體の一割も居ない。其の傭はれ人夫は様々の衣装をつけて様々の役目を勤めてゐる。花を持って行くのや、旗持ちや、或ひは車を押して行くやうな氣の利かぬ役もあるが、烏兜を冠り刺繍の戎服を着け白馬に跨つて悠々と練つて行く役者やうなものもある。が是れらは實は全部乞食である。葬式を請負つた葬儀屋から人夫の供給を乞食の親方に仰ぐ段取りになつてゐる。其の際乞食の日當も役々に依つて高下がつくが、最低卅錢から始まつて四五圓取る役もあるさうだ。勿論それは衣装ぐるみの値段で、葬儀屋が施主に向つて請求する標準である。數百人の人夫を何時でも寄せて間に合はせるといふことは事實乞食の親方でなければ出来ない藝當だ。かういふうまい副業があるから都會の乞食の親方は皆金持ちになる。

そこで乞食の取締問題だが、上海^{シャanghai}の租界は幾らかやかましいが、其の他の土地へ行けば殆んど放任主義である。支那の官憲だから乞食までは手が届きませんと云ふかも知れないが實際は殊更放任してあるかのやうに見える。よく支那は無警察だと云ふが、それでも道路の取締だけは何處へ行つても相當に嚴重だ。支那の街は街路が極端に狭い處へもつてきて人間の通行が恐ろしく多いから、道路の警察だけは相應に注意を拂つて、規則を設け、事故を防いでゐる。民

衆の方にも道路道徳が自然に發達してゐる。だから雜鬧してゐる割合に事故が無い。それ位だから、道路を唯一の稼ぎ場所として尠なからず往來の邪魔をしてゐる乞食に對して、警察が少しは取締るかと思ふと、殆んど放任して顧みない體だ。肩摩轂擊の街路の中央で地上を横になつて轉がり乍ら通行人から錢を強請つてゐる乞食を到る處で見受ける。其の一人の乞食の爲めに一時往來が堰め留められ、轎や黄包車が幾臺となく前後につかへてしまふことがある。すると誰か篤志の人があつて錢を遣つて乞食をどかせるのだ。さういふ時五六間先には棒を持つた巡捕が立つてゐるけれども、これは顎を撫で乍ら空を眺めてゐて一向知らぬ振りをしてゐる。民衆も斯かる現象を見て更に意に介しない。法律や道徳は人間の爲めに設けられてゐる。乞食は人間ではない——さう云つた小事に拘泥しない支那人特有の寛大な氣持からかも知れないが、外觀上から見ると、いかにも乞食の生存權と職業行爲とを普通の人間のそれ以上に優待し尊重してゐるかのやうにさへ見えて奇異の感がする。

偕て、思はず長々と乞食談をやつてしまつたが、私の此の文章の目的は、支那の乞食を描寫することにあるわけではない。乞食を一つの研究資料に取つて、支那の國民性や社會組織の一面を觀察する手掛りとしたまでである。

以上で、支那の乞食が大凡どんなものであるかといふことだけは述べたつもりだ。これを要するに支那は國を擧げて乞食を養つてゐると云つてもいい状態である。だが、此の驚くべき現象をば、單に國民の生活の餘裕から生じるとばかり見るわけにはいかない。其處にはもつと重大な根本的問題が残つてゐるのである。私はそれを次ぎに述べようと思ふ。

金持と貧乏人

支那と日本とは其の間僅かに海一重を距つるばかりだが、それでも兩者の人情風俗習慣の中には非常に相違してゐる事が澤山ある。其の一つにかういふ事がある。支那では、小買物をする場合に、少く買ふ程割が安い。例へば砂糖を買ふのに、五錢買へば茶碗へ一杯あると假定する。然らば、若し十錢買へば茶碗へ二杯來るのが當然でありさうなものだが、支那ではさうでない。十錢買ふと、茶碗へ一杯と、二杯目は七八分目位しか來ない。つまり五錢の方は十錢の二分の一以上ある。若し五十錢買へば、十錢の五倍量だけ寄越してよさうなものだが、量つて見ると、精々四倍半位しか入つてゐない。では多量に買ふ程商人が量目をごまかすのかと云ふに決してさうではなく、五十錢は五十錢だけ賣つて寄越してゐるのである。つまり多量に買

ふ程割りが高くなり、少量に買ふ程割りが安くなつてゐるのだ。鹽でも、薪炭でも、穀類でも、醬油でも、酒でも、何品に依らずすべてがさうである。是れは我々の考へ方に依ると甚だ不合理な話だ。澤山一度に買つて遣れば商人も手数が省け利益が多いのだから當然安くすべきものだと思つてゐる。處がそれが逆に高くなるのだから益々變である。

私は不思議に思つて或る支那人に向つて、實に不合理ではないかと云つて問ひ糺して見た。すると彼は決して不合理ではないと云つた。

「少し買ふ人は貧乏人だから安く賣つて遣らないと困るでせう、澤山買ふ人程金持のわけだから段々高く賣るのが當然です」と云ふのだつた。

「成る程」と云つたきり私は更にそれに對して抗辯することは出来なかつた。

つまり是れは、支那の社會の一種の下層民保護政策なのだが、それが古來の習慣になつてゐるので、人々はそれについて別段政策的や道德的の意識は持たずに、たゞ、少し買へば安いもの、澤山買へば高いものといふのが、物品賣買上の原則であり常識になつてゐるのだから、貧乏人は何時でも割安の物を買ふことになつて暮しよといふことになる。然し、若し金持にも小買ひをやられたら結局同じ事で、折角の名案も無効になるではないかといふ疑問があるが、

處が金持は決して小買ひをしない。何故かと云ふと體面を重んじる國だからだ。と云つてみすみす損は分つてゐるから、日本のやうに米や炭を俵で買溜めをするなどといふことはないが、大概家族の人数に應じ其の目必要なだけの品物は朝のうちに買ひ纏める。物に依つては多少の買ひ溜めもする。決して砂糖三錢買つたり鹽を一錢宛買はせたりといふことはない。支那程體面を云ふ國はない。支那人が體面（面子）を重んずる氣持は他國民の想像以外のものである。彼等は或場合殆ど體面に依つて生きてゐると云つていゝ位だ。だからどんな吝嗇家でも身分相應の大買ひをしてゐる。かうして一方貧乏人に都合のよい法則が出来てゐて、他方では金持に貧乏人の眞似をさせないやうな道德が出来てゐる。實に合理的の組織である。

全く支那では貧乏人が暮しよい。其の結論としては、體面さへ捨てる氣なら食ふには困らないといふことになる。日本でも昔はやゝそれに似た氣分のあつた時代もあるが、現代では體面を捨てた日には猶更食へなくなるばかりだ。貧乏人が貧乏なるが故に利益を得るといふ點は少しもない。貧乏すればする程割りが悪く、損ばかりするから、益々貧乏になつて最後は首でもくくらずには仕方がない。支那では、或程度の貧乏になれば、そして生活程度を其處迄引き下げれば、暮しは非常に樂になる。つまり貧乏人になればなり甲斐がある。かういふ制度習慣が

支那では何時頃から創つたものであるかそれは學者に尋ねて見ても知らないと答へる。「貧乏人に物を安く賣るのは當り前の事だから、それは恐らく此の世に貧乏人と金持とが出来始めた時からさうなんでせう」と其の人は附け足して私を馬鹿にするやうな顔をして云つた。

もう一つ商品賣買の上の特徴は、單位の低い事だ。米は一合を標準にしてゐる。鹽や砂糖は一錢でも二錢でも賣る、一錢二錢の場合は目方を量らず目分量で紙にのせて呉れる。呉服類は一尺が單位だ。どんな上等な呉服でも一尺（大幅）切つて賣る。これは細民に限らず非常に便利を得ることがある。要するに支那の社會制度でも道德でもがすべて細民の存在を常に意識に置いて古來の經世家や賢人達に依つて編み出されたものなのであらう。今ではそれが悉く習慣化して完全に國民性となつてゐる。支那が亡びない根本は茲にあると私は考へる。支那は國土が廣過ぎる結果どんな治世でも政治が微細に個人にまで行き届くといふことは得られない。而も國內動亂が絶えず多く無秩序の状態にある。地方は土匪に荒され、飢饉に襲はれ兵燹のため焼き拂はれるやうなことも珍らしくない。而も歴代外寇に惱んでゐる。さういふ慘憺たる状態をくり返してゐながら民族生活が意外に健全で根強さを示してゐるのは、他の理由もあるが、右の下層民保護の社會組織がよく出来上つてゐる結果だとも云へよう。

是に依つて、前段の乞食に對する一般人の氣持も自然想像されて來る。何と云つても迷信や慾心ばかりで乞食に施しが出来るものではない。矢張り支那の民族全體の心の奥には意識的無意識的に、さういふ下層階級に對する傳統的同情心といふやうなものが潜んで居るのに違ひな

し。
然し、此の下層民の生活を平易に維持して置くといふ事は、結局廻り廻つて中流以上の國民の生活をも安易にするといふことになつて來る。それは労働者の生活費が少くて濟むから自然労働賃銀が低きに留まつてゐる。其の結果は生産品の價格が安いといふことになる。私は經濟學者でないから、支那の此の社會組織の状態を經濟學的に觀察するとどう云つてよいのかそれは知らない。が、支那を研究する是れは根本であらうと思ふ。然るに我國の學者で支那の此の點に着眼して研究を發表した人のあることを聞かない。政治家や、實業家や、經濟學者や、社會主義者や、さういふ人達が在來支那を視察して來て新聞や雜誌に意見を發表する場合に、偶々支那の労働問題や社會制度の問題に觸れることはあつても、多くは表面的現象に對する見解や批評に止まつて、此の支那の國民性や社會の俗習を探究してそれに基いて云つてゐる言論に接しないのは遺憾である。支那を研究するには、日本人我々自身の氣持を標準にしたり、西洋

の哲學や政治經濟學を以て尺度として掛つたのでは駄目である。支那には支那自身の哲學があり、政治經濟がある。それは多く國民性や社會の習俗の中に現はれてゐる。

労働問題を研究するとしても支那の場合は甚だ特殊であらねばならぬ。労働問題とか社會思想とか云つた處で、少くとも以上のやうな社會組織の上に於て發生してゐる處の労働問題であり社會思想である。日本やロシアやイギリスやフランスのそれとは餘程相違がなくてはならぬ。單純に労働者の肩を持たうとしてもさういふ結果は或ひは最負の引き倒しにならぬと限らぬ。私は支那で新しいと云はれてゐる政治家にも多少知人があり、新時代の教育を受けた青年以上の人々とは澤山交際してゐる。が、それらの人々から、早い咄がクリーの待遇を向上させることに心底賛成する聲を聞いたことはない。可成り急進思想を吐く人でも其の問題になると「實を云ふとそれは少し考へものだ」と來る。表面の理由は、クリーの待遇を物質と精神と兩面に於て向上させるとする、其の結果は物價が高くなる、社會制度も改めなければならぬ、クリー自身も體面を維持する義務が生じて來る。そして國民全體の生活の負擔が重くなつて行く、而も世の中には、智識も禮儀も體面も必要としない蛆のやうな人間つまり現在のクリーのやうなのが澤山ある。さういふ人間の始末をどうするか——といふのである。日本や

西洋ならば、國民全體に教育を普及させるといふやうな又別な手段もある。が支那へ行つて、あの茫漠とした。そして混沌とした、そして擱まへ處もないやうな、處に依れば原生林の中のやうに天地靜寂の感があり、或ひは滿目荒涼たり、處に依れば火事場のやうにゴツタ返してゐる。あの支那の國柄や生活状態を一見すると、さういふ理想の夢は一溜りもなくぶちこわされてしまふ。

宿命的支那

何が宿命的だからつて、支那の國民生活ほど強い宿命的色彩に包まれてゐるものはない。古代も今も同じやうな宿命の流れを引いてゐる。それが旅行者の胸に、時に云ひ難い哀切な情を起させ、時には詩的な空想を其の上に描かせる。支那は、千年前も二千年前もそれから現在も餘り變化はない。地方へ行けば田舎でも都會でも昔時其のままの光景である。個人の生活様式でも氣分でも昔と殆んど變らない。昔あつた物は今でもある。昔に無かつた物は現在も無い、さういつた趣きである。それほど支那は獨特の色彩に富んでゐる。上海（上海）のやうな現代化した都會でも、その支那街を一度び通つて、あの街全體を包んでゐる不思議なほひを鼻から

吸ひ込んだばかりでも、それで最早全く支那であることを感じさせられる。それは實に不思議な匂ひである。食物のほひ、油を揚げるにほひ、線香のほひ、煙草のほひ、汗のほひ、小便のほひ、其のほかありとあらゆる物のほひが空中に流れて溶け込んで、それが統一された一つの匂ひとなつて、一種云ふべからざる不思議な神祕的な刺戟を人に與へるのである。勿論是れは旅行者に限られた特權であり、永く彼地に暮してゐると遂にはそれを感じなくなり、支那人に至つては全く此の匂ひを知らないと云ふから恐ろしいものである。私のやうな何時も短期の旅行者は常に其の匂ひを飽く迄味はゞされるのである。これは間違ひもなく支那の國の匂ひである。世界の何處でも味はふことの出来ない支那本來の匂ひである。そして支那は二千年も三千年も前から此のほひに包まれてゐるのである。其の支那街になま温かい夕暮が降りて來た時、左右の店舗の無数の金看板が薄闇の中にきらめき合つてゐる眞ん中を、さうしてあの雜鬧の中を、喧噪の中を、ワンポツを馳らせて通り過ぎると、我々の腦裡には忽ち太古の支那が出現して來る。其の不思議な匂ひはいやが上にも腦髓に滲み込んで、それからそれと不思議な幻想の糸を手繰り出させるのである。

富める者は限りなく奢り、貧しき者は地を這つて生きて行き、若き男女は歡樂に陶醉して夜

の明くるも知らず、賢人は静座冥想し、妖僧は香煙咳せ返る薄暗き殿堂の裡に衆人を誑かす、男は射利を事とし、女は貪食と淫事に耽り、阿片の煙人々の精神を麻痺せしめ、弦歌は樓に満ち、病人は路傍に呻吟する、其の中で賭博の争ひは晝夜絶えない——これ支那の世相の一部面だが、其のどれも是れも自然であり、自由であり、無反省である。幸福な者はいやが上にも幸福であり、悲惨な者は限りなく悲惨であるのを見ても誰も怪しむ者はない。すべての人が宿命の糸に操られるまゝに生きてゐるやうに見える。

これ程傳統的な、爛醉した國民生活の中からも、人類の魂を刃で刺すやうな鋭い、新らしい思想が生れ得べきものだかどうかは神でないから豫言は出来ぬ。が、生れ得べき可能性も必然性も私は其處に見出だせぬのである。私は矢張り支那は現状の儘に、昔の儘に滅びもせず、今後も永く同じ状態を持ち續けて行くことだらうと考へてゐる。支那へ行くといやでもさういふ氣もちになる。

江南の風物

風景の印象

湖南省出身の或友人が私にかう云つて話したことがあつた。

「洞庭湖の大きさはどれ位あるかと言つてよく日本にゐた時分に訊かれたが其の答へには困りました。何故かと云ふと洞庭湖の大きさは決して一定してゐない。大きくもなれば小さくもなる湖なのです。それは一寸聞くとおかしいやうだが、詰まり洞庭湖附近の土地は一帶に低地であつて、雨が降ると其處へ水が溜る。それが何百里となく廣々とつながつて其處に大きな湖が出現するのです。が、大氣が乾燥して雨が降らなくなると、其の水は何時となく消えてしまつて其の地方は只一面の荒蕪地となる。渺々たりし湖は掻き消す如く失くなつてしまふのです。無論中心湖はあるけれども、さういふ風だから湖の大きさだの形状などを説明することは容易でない。だから洞庭湖の景色を悠んな風だと云つて簡単に描寫して見せるといふことも猶更困

難な話です。瀟湘八景も其の通りです。人を伴れてつて、此所が八景だと云つてハッキリ見せるわけにはいかない。大體の場所は極まつてゐるが、それは或大きな地方をさして云ふことで、近江八景のやうに、三井寺の鐘でなければいけなかつたり、粟津の青嵐に限つたりするやうな局部的のものではありません。だから、時期や場所に依つて瀟湘八景と云つても全く變つた氣分の物になります。詩人が詩を作るにしても、畫家が繪を畫くにしても、題材から異つたものが出來ます。早く云ふと藝術家は、各々自分の瀟湘八景を其處へ創造することになるのです。

私は、これまで支那へ行つても、多くは上海附近^{シャンハイ}でばかり暮してゐて、支那の支那たる奥深い内地の景色は一向知らない。が、南京^{ナンキン}へ行く途中や、西湖へ行く途々、汽車の窓から見た田舎の景色には未だ眼に残つてゐるものが澤山ある。上海^{シャンハイ}を夜行列車で立つて、南京^{ナンキン}の少し手前で夜が明けた時、寝苦しい夢から醒めて窓の外を見遣ると、日本を發つて以來一ヶ月餘り見たことのなかつた山が、鐵道線路から半丁或ひは一丁位距て、餘り高くなかうねうねと連つてゐた。雜木山や草山が多かつた。山の麓に一筋の街道が延びてゐる。道の際に時々石の彫刻をした立派な鳥居のやうな物が建つてゐる。それは墓道の門であつた。ゆうべ夜半頃から降り出した雨が今朝はあがつてゐたが、空はまだ晴れ切らずに、重たい朝霧がそこはかとなく流れてゐる。

其の霧の中に百戸位の村落が靜かに横たはつてゐたりする。村には川があり、橋があり、楊柳の茂みがある。いづれの國でも田舎の人は早起きと見え、帽子をかぶつて長い着物を着てゐる農夫が畑の耕作をしてゐたり、淺葱のだぶだぶの服を着た年取つた女が川べりへ出て野菜を洗つてゐたりする。それらの總ての物を、まだ睡さうな朝の光線の中に私は見るのであつた。それは至極平凡な景色であつた。だが其の平凡な景色は、何かしら深い意味を有つてゐるやうに見る人の胸には感じられてくるのである。滬杭鐵道の沿道の風景も私は好きだつた。其處はたゞ何處迄も際涯なく續く平野だつた。麥は悉く刈り取られ、其の跡には一面蓮華草が咲いてゐた。水邊には楊柳が垂れ、黒い牛が臥してゐる。舊家らしい門構への農家がある。森がある。初夏の眞晝の太陽があらゆる物の上で燃えてゐる。地勢が段々下降すると見えて、行くに従つて水郷が多くなる。一直線に、地平線の彼方まで貫いてゐる運河、城壁の外を流れてゐる河。遠く白帆が點々として浮び、眼のあたりには帆柱がごちや／＼と立つてゐる。河岸に立ち並ぶ町。町の背後に蜿蜒と走つてゐる城壁、眼に見る物は悉く詩であり、繪になつてゐる。

建 築

大陸的の支那國內では、西湖は唯一の人工的風景の典型であつた。五里餘りの其の小さな湖の周圍や、湖中の幾つもの島や、其處は數千年來の歴史、文明、趣味の結晶であつた。それは人工的努力といふものがどの程度迄自然を凌駕し、さうして自然の爲し能はぬ藝術的感激を人に與へることが出来るものかといふことを十分に現はしてゐた。西湖の美觀は八分通り建築の美觀であつた。湖と、周圍の山とは、いつさいの建築物を一層美しく見せる爲の背景であるに過ぎなかつた。西湖に遊んで私は初めて支那といふ國が建築の國であることを知つた。

支那の建築は、西湖以外の土地で見た他の美術的建築の場合に於ても常にさうであつたが、用材が極めて粗悪で、裝飾もまことに大まかである。だから家の内部へ立入つて細かに眺めると殆んど價値を失つてしまふ場合が多い。支那の建築は、外部から眺めるべき建築である。それも相當の距離を置いて觀賞すべき建築である。外から離れて眺める爲の建築としては支那程優れた建築は世界に無い。我が國の建築物は、用材が非常に上等で、そして部分的の意匠と裝飾とが精巧を極めてゐる點に於て世界に冠たるものがある。が、外觀上の美觀では到底支那とは競へない。日本の建築が内容を重んじるのに對して、支那の建築は形式に全力を注いでゐる。日光の陽明門、芝山内の靈廟、或ひは安藝の宮島と云つて見た處で、其の外觀上の美と藝

術的感興の豊富なることに於ては遂に西湖畔の一茶館にだも如かないのである。

西湖に遊ぶ人は、湖を距て、南北の山の上に相對峙してゐるところの二つの古塔を見るであらう。南の塔は雷峰塔であり、北の塔は保叔塔である。どちらも古代の煉瓦で築かれた塔だが、近寄つて見ると處々破損して、外部や頂上には雜草だの名も知れぬ灌木だのが生へてゐる。雷峰塔は太く短くて鐘を伏せたやうで、保叔塔は細く高く槍を立てたやうに鋭い。兩々相對して對照の妙を極めてゐる。此の二つの塔があるが爲に、西湖の景色は俄かに夢幻的空想力を増して來るのである。千年二千年の古き歴史と傳統を思はせ敬虔な神祕的印象を旅人の胸に植え付けてゐる。

湖畔を離れて、山路へ分け入ると、山にはうすく雜木が立つて其の下草に蕨が三尺位に伸びて一面に生ひ茂つてゐた。餘り高くない此の山を向う側へだら／＼と下り切つた處に、清澗禪寺といふ寺があつた。「玉泉古迹五色巨魚」と書いた石の碑が門前の涼しい流れの側に建つてゐる。其の寺には、長方形の大きな泉水があつて、玻璃のやうな透明な水の中に三四尺位もある鯉が無數に泳いでゐた。泉水の三方を圍んで屋根の續いた平屋の建築が取り巻いてゐる。正面の欄間に「魚樂園」と書いた木彫の大額があがつてゐる。其の丈の低い建築は三方から各自の

古雅な姿を碧い水の底にうつし合つてゐる。何たる調和何たる寂びであらう。其處に佇んでゐると、此の身は全く塵外に脱したやうな氣持になる。

靈隱寺といふ寺は巨刹だつた。廣い境内に幾棟かの樓閣や塔が臺を傾け結構壯麗の觀を競つてゐたが、其の裏山の韜光といふ寺の庭から脚下を見下した景色に勝るものはない。其處は幾つもの山が、峯を連ね、谷を合せて、僅かに南面だけが開けてゐる。韜光へ登る路の兩側には竹林が打ち續いてゐる。見渡す限りの山々は鬱蒼たる老樹をもつて被はれてゐる。畫舫の舳よりも更に反りを打つてゐる樓閣や堂の屋根が、山の間や樹間から現はれてゐる。邊りを微かな雲烟が飛んでゐる。南畫の所謂山景樓閣圖は茲から創まつたものかと思はれる。

併し、西湖の建築の粹は何んと云つても湖畔の建物の中に一番多く現はれられてゐた。水と建物との調和、建物と庭園との調和。湖畔に立ち並ぶ多くの茶館。酒樓、別莊。それはあらゆる技巧を盡して輪奐の美を競つてゐる。就中其の代表的建築を私は西畔にある劉莊といふ古い邸宅に見た。其處には湖に對つて一つの樓門が建てられてゐた。其の樓門の様式は複雑で珍らしい程精巧であつた。それが靜かに水に映じてゐる光景は實に何んとも云へなかつた。私は船頭に命じて舟をつけさせて邸内を見物した。門の處に番人がゐて、馱菓子だの砂糖黍だの黒慈

姑などを賣つてゐた。それは空き家であつたから誰でも自由に見物することが出来るのだつた。大きな部屋と廊下が迂餘曲折して限りもなく續いてゐた。庭は荒れ果てゝゐるけれども水石の妙を極めてゐた。途中に小門があつて其處から先へは行かれぬやうになつてゐたが、一緒に隨いて來た船頭の伴の小僧に番人を呼んで來させて廿錢遣ると番人は門の戸を鍵で明けて其の奥へ私を案内して呉れた。其處には立派な殿堂があつて神を祀つてあつた。湖上から最初に見られる樓門は其の殿堂の前に建てられてゐるのだつた。門は風雨に曝されて可成り劇しく破損してゐたが、修繕も加へずに捨てゝある。此の奥にも家が幾棟もあつて、數限りない部屋が廊下でつながれてゐた。近頃まで人が住んでゐたらしく、小さい部屋には帷の掛つた寢臺が据えてあつたり、女の部屋らしい飾り付けがまだ其の儘に残つてゐたりする。私は調べて見ないから、此の邸宅か何人の住んだ跡だかといふことを知るよしもない。が、其の豪華に至つてはまさしく一代を壓するものだつたに違ひない。慙うした思ひ切つた事をした昔の支那人の生活を私は想像して見た。

支那の庭園

其の附近には素園だの高莊だのといふ有名な別莊風の邸宅があつた。建築以外に、私は此處へ来て初めて支那の庭園の妙を知ることが出来た。どの家の庭園も水と楊柳と竹と石とをもつて造られてゐた。建物と建物との間を水が流れてゐる。流れの奥には竹林がある。廊下が橋になつて架つてゐる。石の上を流れて来る水際には柳が枝を垂れてゐる。さうして其の水は湖に灑いでゐる。それは劉莊の庭の一部の光景であつた。

竹林の妙は高莊に於て極まつてゐた。全體江南一帯は竹の産地である。到る處に竹林がある。竹の美しいことは無類である。南畫に竹を多く畫くことは當然であつた。併し、同じ竹と云つても日本の竹とは感じが違ふ。日本で竹の産地は京都附近である。宇治、山科、嵯峨京都の近郊には美事な竹林がある。けれども其の京都の竹と雖も到底美しさに於ては支那の竹とは比較にならない。支那の竹は、繪に畫く爲の竹であるが、京都の竹は、樋にし、籠を作り、或ひは筍を採る爲の竹林である。竹に心は無くも、兩者の間に格段と品位の高低がある。崩れ掛けた土塀がある。塀の前にも後にも竹林がある。其の竹の茂みの向うに六角の亭が見える。亭の上では竹林の七賢みたいな人物が茶を飲み乍ら語つてゐる。それは高莊の庭の一隅の光景である。

支那の庭園を見物して私が些か發見をした點を云へば、それは建築物の美觀を助ける爲の庭園であるといふ事であつた。だから、支那の庭園は外部から見るべき庭園であつた。こゝが日本の庭園とは趣きの違ふ處である。日本の庭園は、家の内部から、座敷に坐つてゐて見るべき庭で、どんな名園でもさういふ風に設計されてゐる私は京都へ行つて銀閣寺を見物した。東山時代の代表的庭園の美觀が今も猶眼前に彷彿してゐる。其の時私は庭下駄を借りてあの泉水の邊りをそゞろ歩きして見た。さうして庭の内を眺めて見た時には、其の前に東求閣の座敷から眺めた時の何分の一の感興しか起らなかつたことを覚えてゐる。山谷の八百善の庭は餘りに規模が狭小で名園とはいへないだらうが、文化文政の市井の趣味を代表してゐるものとして濫い庭だと私は思つてゐる。是れも一度物好きに庭へ下りて歩いて見たところが、木の枝が袖に觸つたりして、飛石の上も歩きづらく、何んとなき窮屈で鬱陶しいやうな感じがして格別な興味も引かれなかつた。日本の庭園は、何處迄も座敷に座つてゐて見るべき庭園である。だから其の多くが大きな自然の形象を模してある。泉水は池に擬へ、池ならば湖水に擬へてある。築山は嵯峨たる峻嶺であらねばならぬ。芝生は野原であり、寄せ植えは林であり森である。樋の水の流れは激流奔瀆する谷川を偲ばせてゐるのである。さうしてそれらの總ての景物を一定の視

野の下に統一して眺める處に、初めて日本の庭園の目的があり意味があるのである。かやうに庭園其の物を見る事が目的の庭園としては、日本庭園の進歩してゐる國は無い。が、一長一短は免かれ難い。反對の側から見ても、建物と庭との調和樹木の陰影、それ等の點に至ると日本の庭は落第である。大概建築物がむき出しになつてゐる。銀閣寺の如きでも、さすがに銀閣は庭園の點景建築として建てられてあるだけに樹木や泉水との調和が巧みに取つてあるが、銀閣の方から母家であるところの東求閣を眺めて見ると、家と庭とが別物になつてゐる。白山御殿の庭園でも、大隈侯の庭園でも庭園其の物としては立派であるが、肝心の建物は野天に裸で立つてゐる。其處へ行くと、支那の庭園は何處迄も建築の附屬物としての役目を忠實に果してゐる。樹木で家を隠し、泉水に建物の影を寫し、外部外部から眺めて一幅の繪にならしめるの用意が甚だ周到である。それでゐて屋内から見ても決して雅趣を失つてゐない。日本の庭園の如く廣大なる形象を取り入れないといふだけで、閑寂の趣は却つて此の方に多分にある。日本の庭と支那の庭とを折衷した處に、兩者の目的に適ふやうな理想的の庭園が生れはしないか、我が國の庭造専門家に向つて一考を望み度いものである。

市街の風景

上海シヤンハイの市中にも變つた面白い景色が澤山あつた。蘇州河がやがて黄浦江に合しようとしてゐる、其の河口間近に公園ガーデンブリッジ橋といふ橋がある。其の橋に立つて見廻した四邊の景色でも、或ひは河口の三角州の小さな公園から橋の方を眺めた景色でも、それは確かに上海シヤンハイ獨特の景色であつた。蘇州河の河口を挟んで、片側は公園になつてゐて、片側には煉瓦造りの各國の領事館が立ち並んでゐる。岸へ寄つて無数のジャンク船が舫つてゐる。本流には軍艦だの汽船だのが碇泊してゐる。公園は樹木よりも芝生と花壇とが大部分を占めてゐて、ベンチが澤山置いてある。いつ行つても其のベンチは夫婦連れや子供連れでふさがつてゐる。鳥打帽をぞんざいに冠つたり、荒い辨慶縞の服を着て赤つぽいネクタイなどをした浮浪人らしい組が芝生の上で腹這ひになつて、何か話し合つてゐる。樹木の間から市街の複雑な建物が重なり合つて見える。老靶子路の交叉點から北四川路を更に北へ二丁位行つたあたりの、町幅が狭くなつて道がうね／＼と曲つてゐる處の街の光景、妙な形をした屋根の線、壁の色。それは油繪に畫いて見た

ら面白いだらうと思つた。

靜安寺路の端れにある靜安寺といふ寺は古い土塀で圍はれてゐて、其の塀外の往來には榎の大木が二三本立つてゐた。それを、少し離れて、榎と、塀と、寺の建物とを一緒に取り入れて眺めると、非常に纏つた繪になつてゐた。

私が住んでた老靶子路から餘り離れてゐない昆山路といふ處の町なかに極く小さな公園があつた。昆山花園といふのだが、花壇も何もなく、少しばかりの樹木が植はつてゐるだけで、此處は全然小供の遊び場になつてゐる。で、普通ビバーガーデンで通つてゐる。午後から夕方なぞに通ると、澤山の子供が其處で鞠投げなどをして遊んでゐる。が、子供の遊び場だから、夜になると全く人がゐなくなる。瓦斯燈が青い光を地上に投げてゐる。

それは宵だつたが、雨あがりで霧のかゝつてゐる晩、其の公園の横を通つて北四川路の方へ歩いたことがある。其處には残らず煉瓦造りの建物で、三階から五階位の大きな住宅ばかり並んでゐる。と其處に、斜めに入り込んでゐる奥深い露地があつた。露地の口に立つて見ると奥は眞つ暗だつた。兩側の建物と、一番奥の突き當りの建物との屋根が、どんよりとした白つぽい空の中間に複雑な高低をもつた輪廓を付けてゐる。たつた一つ奥の家の高い窓に明りがつい

てゐる。それは其處の暗がり全體の一つの眼であるやうに見える。軽いヴェールのやうな霧は、露地の中にまで流れてゐた。

それは非常にロマンティックな景色だつたが、其の後はいつ通つて見ても平凡だつた。

茶 館

支那の人が二三人集まつて茶を飲んでゐる處を見ると、テーブルの上には必ず例の西瓜の種が置いてある。それを一粒宛抓んで、前齒でパチリ、パチリとやり乍ら、うすい實だけ食べて皮は床の上へばら／＼と散らしてゐる。茶を飲むには普通は湯呑を使つてゐるが、料理屋だの茶館へ行くと日本の飯茶碗で多く飲ませる。それは綠茶をひと抓み茶碗へ入れ、それに熱湯を一杯注いで、蓋をきせて持つて來るのである。飲む時には蓋を少しそらせて、茶碗の向ふ側へ手を當て、手前へ傾けながら、葉が流れ出ぬやうにして飲むのである。さうして、時々一口づゝ啜つては、其の他はのべつ幕無しに西瓜の種を噛み碎き乍ら悠々閑々として談話に耽つてゐる。支那の悠長な一面を言ふならば、支那人が集まつて茶を飲んでゐる時くらゐ悠長な感じを現はしてゐるものはないのである。支那人は非常に茶好きな國民である。恐らく世界中何處へ

行つたつて支那人のやうにのべつに茶を飲んでゐる國民は無いであらう。汽車に乗ると、茶の係のボーイがゐて直ぐ様大きな急須と茶碗を持つて来て、大藥罐から湯を注いで置いて行く。日本のやうに汽車の窓から首を出して呶鳴る必要はない。處で、茶碗と急須をテーブルの上に置いて緩りと茶を飲むのだ。支那の汽車のいゝ事は各等ともにテーブルのある事だ。テーブルは細長い形で、乗客はそれを隔て、對き合つて腰を掛けるやうになつてゐる。大變便利だ。茶を飲むにも、物を食べるにも、讀書をするにも、伴れがあればランプでもして遊ばふといふのでもテーブルがある。お蔭でどれ程便利だか分らない。日本の汽車みたいに後ろへ懸り掛るばかりでは第一體が疲れて遣り切れない。テーブルの上へ腕を投げ出したり、頬杖を突いたり、突つ伏して睡つたり、實に體が樂だ。日本でも何故早くあの式に改良しないのだらう。日本の汽車の二等や一等へ乗つたが混んで横になれないと來た日には、初めて行つた家の應接間へ通されたやうな恰好で朝から晩迄畏まつてゐなければならぬ。幾ら我慢のいゝ人間でもあれでは堪らない。行儀見習のために汽車へ乗るわけぢやあるまいし、早く何とかして貰ひ度いものだ。偕て茶の話だつたが、一時隔き位にボーイが湯をさし替へに來る。それで終日乗つても下車する時茶代は十錢か廿錢拂へばいい。

都會でも田舎でも何處へ行つても茶館がある。茶館は大規模なもので、いづれも大きな家で、階下でも階上でも、テーブルが何十何百と置いてある。朝から其處へ客がはいつてゐる。茶代は何處でも一人前十錢である。上海あたりの大きな茶館になると數千の人を容れる程の廣さがあるが、さういふ處は大概夜間は賣春婦の出稼ぎ場と化してしまふ。落付いて茶など飲んでゐられない。

上海で最も上品な茶館として有名な家に、廣東路の角店で同芳居といふ茶館がある。此の家は、階下では食料品、主に果物の砂糖漬などを賣つてゐるが、突き當りの幅の廣い階段を昇つて行くと二階にはテーブルが澤山あつて客が茶を飲んでゐる。日本で云ふと昔の本郷の青木堂と云つた格だ。但し青木堂よりも家も道具も遙かに立派で茶も上等のを飲ませる。こゝの砂糖漬は上海でも他に及ぶ家が無い。殊に蓮の實と棗の砂糖漬は非常に上等なので私は折り々々其處迄買ひに行つた。

二階の部屋の仕切りの壁がまん圓く大きく切り取つてあつて、其處が出入り口になつてゐる。こちらの部屋で茶を飲み乍ら見てゐると、向ふの部屋で一つのテーブルを圍んで頻りに閑談をやつてゐる四五人の組が、てうど圓窓のやうな出入口の框の中へうまくおさまつてゐる。

其の向うに桃の花を挿した花瓶が見えてゐる。いかにも支那趣味だ。

其處にゐると畫家が詩を書いた半折を十枚許り持つて来て買はないかと云ふ。試しに「幾許？」と言つて見ると、五枚で一弗だと答へた。其の畫家は五十恰好のうす髯を生やしてゐる瘡せた男で、小粹な眼で愛嬌よくにこ／＼笑つてゐた。

田舎の名所へ行くと氣持のいゝ茶館がある。私の見た中では、南京城外雨花臺の麓にある茶館——其の家には『露花臺第二泉』といふ額が掲げてあつたのや、西湖畔の多くの茶館などは何んとも云へない氣持であつた。

支那人が西瓜の種を食べるのは一つは長い習慣である。西瓜の種といふ物は脂肪の毒を消すもので、支那人のやうに脂肪分の食物を多分に攝取する人間は生理的にも是非西瓜の種を食べる必要があるのだからである。宜なる哉實によく食べる。何處へ行つても茶を出す以上は是れは付き物だ。藝者屋でも鶏（賣娼婦）の家でも、客が行くと直ぐ様茶と西瓜の種とを出す。西瓜の種を皿に盛つて持つて來たやつから、手で一掴み宛掴んでテーブルの上へザラリとあけて呉れる。併し西瓜の種は慣れないとなか／＼碎き方が六ヶ敷い。西瓜の種を上手に噛み碎き得るやうになつたら先づ／＼支那も一人前と言ふ。

西瓜の種に比べると、南瓜の種は皮が薄く實も柔かで大變食べいゝ。味も西瓜以上にいゝやうに思はれる。私は最初それを知らなかつたが、西湖を舟で周遊した時、島の茶店で南瓜の種を初めて買つて、舟の中で茶受けにやつて見たところが大變いゝので味を覚え、上海へ歸ると早速同芳居へ行つて上等の品を買ひ込んで來て、それから暇な隙がな南瓜の種をパチリ／＼とやつてゐた。そして支那茶を飲んでゐると何んとなし支那氣分になつた。

支那料理は、複雑で進歩してゐるけれど、菓子は殆んどなつてない國である。果物の砂糖漬は上等だが、其のほかに饅頭やカステラを油で揚げたのとか、おこしのやうな物とか、そんな物ぐらゐで到底日本菓子や西洋菓子のやうな上質で美味の菓子は無い。

女權運動家鄧蕙芳女史

五月の初めだつた。南支那の廣東は、五月と云へば日本の眞夏に等しい氣候である。

或る日私は、Sといふ此の土地で知り合ひになつた友人に伴れられて、中國々民黨廣東部を訪問した。それは中國に於ける有名な女權運動家で、現在廣東國民黨の宣傳部主任となつてゐる鄧蕙芳女史に會ふ目的だつた。

黨部は廣い敷地に支那式の大きな建物が幾棟もあつて、芝生や大きな樹木が空地を占領してゐる。幾棟かの建物を貫いて廣い廊下が眞直ぐに通つてゐる。一番奥に二階建の長い洋館がある。前の建物と洋館とを聯絡する長い廊下がある。

「此の建物の中では、随分澤山の人間が殺されたことですよ、支那の政治は何時でも生命がけですからね」

民國元年に廣東へ来てからまる十八年、第一革命以後の廣東の政變といふ政變を一つ残らず目撃して來てゐるS氏は感慨深げにかう云つて一寸私の方を振り返つた。

「寥仲愷が殺された時でした。夫人の何香凝女史が此處へ乗り込んで來て、蔣介石に會はうとすると、蔣が面會を拒絶したものです。すると何香凝が怒つて、蔣が何んだ、あの生意氣な小僧を爰へ引つ張つて來いと云つて、此の廊下へ大の字に寢てしまつて暴れてゐるんです。誰も手が出せないんで弱つたさうです。しまひに譚延闓が出て來て漸うなだめて歸したと云ひますかね」

其の何香凝女史は、娘のゆめ子さんとフランスで暮してゐる。本郷の女子美術學校、目白の女子大學の出身で、女でこそあれ國民黨左派の領袖、婦人參政論者のリーダー、中央執行委員

の一人だ。

私が是れから會はうとする鄧蕙芳女史も、何香凝女史と似たやうな身の上である。孫中山門下の國民黨員に夏重民といふ人があつた。夏重民は日本へ留學して東京高等師範學校を卒業した。其の在學中彼は一人の中國の女學生と懇意になり、二人の間に戀愛が成立して東京で結婚した。夏重民夫人がすなはち鄧蕙芳女史である。其の時分彼女は神田の某音樂學校に在學してゐる。夫妻は手を携へて故國へ歸り、夏重民は孫文に隨つて革命運動に従事した。彼の妻が彼の仕事を助けたことは勿論であつた。然し其の妻は内助の功を立てるだけでは甘んじてゐられない女だつた。當時支那は革命を経たばかりで、革命思想に眼醒めた者は僅かに一部の男子に限り、女子の思想は極端に守舊的だつた。婦人は皆何百年も昔と殆ど變らない生活をして、甚だしい壓迫を男子から蒙つてそれで甘んじてゐなければならぬやうな状態であつた。一夫多妻主義が極端に行はれて、女子の權利は公私共にすべて蹂躪されてゐた。若い人妻であつた鄧蕙芳女史の運動は必然的に女權擴張運動に向つて突き進んだ。廣東は中國革命の根據地で、あらゆる新しい思想は此處から發生した後全支那に瀰漫するのが例である。鄧女史等の女權運動も孫文の宣言にある男女平等の原則に基いて、やがて廣東では政治上の一勢力とまでなつた。

民國九年、各省に省議會が設けられ、民選議員を出すことになつた。其の時、鄧蕙芳女史は廣東省の第一區、廣東市部から立候補して、美事に當選した。婦人議員は全國を通じて僅かに鄧女史一名で、中華民國に於ける最初の女代議士としての名譽を擔つたのだつた。

夫の夏重民氏は孫文の信任厚く、黨内に重きをなしてゐた。彼は廣東晨報の社長兼主筆で、同時に、廣東三水鐵道管理局長の職にあつた。民國十一年頃、孫文と陳炯明との間に隙が出来た。陳炯明は古い革命黨員だつたが、元來軍人で廣東に於ける軍隊の主腦者となり、其の實力に依つて當時廣東省長の地位にあつた。國民黨の總理たる孫文と、陳炯明との間にどうして間隙が生じたかといふと、それは孫文が飽く迄北伐を行ひ南北統一策を主張するのに對して、陳炯明は聯省自治を主張して反對したからだつた。民國十一年四月、孫文は突如陳炯明の省長を免職して、惠州へ退去させた。然るに同年六月、孫文の北伐軍が廣東を留守にして江西省へ出動した其の隙に乗じて、陳炯明は麾下の軍隊を動かして廣東を占領し、孫文を逐つた。孫は初め軍艦へ避難してゐたが、其の廣東の海軍もやがて陳派に買収されたので、孫は英國の軍艦に移つて上海へ走つた。

翌年の三月、孫文は雲南の軍隊を動かして廣東を攻略し、再び陳炯明を惠州へ逐ひ拂つた。

かういふ政變が數回繰返された。孫文と陳炯明とは仇敵もたゞならぬ間柄となつた。

夏重民は、廣東晨報を利用して絶えず陳炯明を攻撃したばかりでなく、有らゆる方面に於て總理孫文の政策を援けてゐた。それが爲に彼は陳炯明派から非常に睨まれてゐた。民國十二年六月のことである。夏重民は廣三鐵道局長の官舎に居る時、突然數名の刺客に襲はれ、ピストルの亂射の下に暗殺された。そして其の死骸は間近い珠江に流されたが、魚腹に葬られたか遂に其の儘不明になつてしまつた。

陳炯明派の魔手は、夏重民氏を斃したばかりで甘んぜず、其の妻鄧蕙芳の一身にまで及びさうになつた。鄧蕙芳は、危險の迫るを知つて、突然廣東から姿を隠してしまつた。

それから後の數年間の鄧蕙芳女史の消息や行動については、誰も公然と知つてゐる者はゐない。けれども、廣東の人々は、或る確信の下に、彼女の行動を傳へてゐるのである。其の一般に信じられてゐる巷説によると、彼女は郷里に隱遁してゐたといふのは嘘で、實際は數名の亡夫の部下を語らつて山寨に立て籠つて土匪の大將となつた。

一方廣東では、陳炯明の手先となつて夏重民暗殺の舉に直接或いは間接に關係したと信じられてゐる人々に對して、不思議な災害が頻々として降つて來た。或る者は暗殺され、或る者は

誘拐され、或る者は家族を人質に捕られるとか、財産を掠奪されるとか、災難の來かたは一様でないが、とにかく其の一味一類と見做されてゐる者は、何者かの復讐を受けてゐることを自覺しないわけにはいかなかつたし、又世間も其の事實を認めないではゐなかつた。復讐は容易に止まず、辛辣極まる方法で次ぎ／＼と徹底的に行はれた。それは確かに世間を騒がし、關係者を戦慄させるに十分であつた。

社會から韜晦してゐる鄧蕙芳は、無数の噂の持主となり、或る意味で稱讚と人氣の中心となつた。彼女は以前からスポーツなら何でも好きで、殊に乗馬は最も得意なものであつた。廣東で女で馬に乗り出したのは鄧蕙芳が一番早かつた。彼女は艶色滴る容姿の持主である。それが馬に乗つて、山寨に立て籠つて數百名の部下を指揮してゐるといふ話は、宛ら女僊外史の主人公を現代化したやうな興味を人々に與へたのであつた。

民國十四年の二月、流石の陳炯明も時代逆行の力が盡きて失脚し、香港へ亡命した。廣東は完全に國民黨の天下になつた。さうなると、鄧蕙芳女史も廣東へ姿を現した。けれども、人々の前に現れた彼女は憤ましい未亡人であつた。夫の忘れ形見である一人の愛兒の優しい母親である。人が彼女に復讐の話などしようものなら一言の下に否定した。

「まあ飛んでもない、わたしは田舎で此の子を育てゝゐたのですよ」

彼女は再び女權運動のリーダーとなつた。現在國民黨の要職に在るばかりでなく、女權運動大同盟總會の主宰者で『婦人月刊』『廣東婦女』『三八特刊』等の雜誌に毎號執筆してゐる。

其處らの壁や羽目板に『打倒××帝國主義』『要求二十一箇條撤廢』などといふポスターがポツリポツリ貼られてある。それではじめて氣が付くと、昨日は五月九日の所謂國恥記念日で、此の黨部で盛んな××に對する示威的の大會が行はれたのだつた。

右手の方に一棟かけ離れて、學校の校舍か何かのやうな長い二階建の建物があつた。其の建物の下まで行くと、二階の廊下から一人の事務員が、

「どうぞお上り下さい」と私達に向つて云つた。

其の建物は澤山の部屋に仕切られてゐて、どの部屋にも大勢の黨員が働いてゐる。此處が宣傳部である。二階の中頃の部屋へ通された。其處は應接間らしいけれども、まん中に衝立が置いてあつて、其の向うでは五六人の黨員が机を置いて事務を執つてゐる。次ぎの部屋の方から直ぐに鄧蕙芳女史が出て來た。

私の事はS氏から前以て手紙や電話で通じてあつたので別に改まつた挨拶もなく直ぐに打ち

解けた話をした。鄧女史の日本語は可成り上手だつた。が、平常使ひ慣れないので面倒なことになるとチヨイ／＼つかへた。すると女史は其處だけ筆で書いた。中國婦女運動の團體について細かい説明をして呉れた。

女史の年齢は私にも見當が付かなかつた。

「お齡はお幾つですか」と餘程聞いて見ようかと思つたが、初対面の婦人に向つて年齢といふものは聞きにくいものである。けれども、三十二三位か、或ひは五六位だらうと思つた。痩せ形の小造りな體で、髪は勿論斷髪だ。着物は水色の支那服の上に、黒の袖無し風の物を着てゐる。黒い縁の眼鏡を掛け、左手に翡翠の腕輪を篋めてゐるほかは別に身に附けた飾といつては無い。

何んといふ楚々たる風姿であらう。妖艶人を惱殺する底のものはなく、むしろ良妻賢母型の優しい婦人である。殊に女史は音聲が美しい。

此の高尙優美な婦人が、女權運動の急先鋒であることに何の不思議はないとしても、例の風説の土匪の大將となつて世間を戦慄せしめた女傑であらうとは、誰にだつて想像の出来ない事だ。たゞ一つ女史が普通の女でないと思ふ事は其の眼の光である。S氏が云つた。

「鄧さんはあんな蟲も殺さぬやうな顔をしてゐますが、あれで實に凄い女ですぜ。人を殺す位は朝飯前ですよ。さうして顔色一つ變へない女ですからね」

鄧女史について、もう一つ世間に知られてゐる素晴らしく奇抜な話がある。それは彼女が省議會の議員になつた時の話だ。その時女史は議會へ女子解放、男女共學に關する案を提出した。すると猛烈な反對が起つた。反對論の急先鋒は陸孟飛といふ人で、反對の理由は時期尙早といふ點にあつた。鄧女史は陸孟飛を向うへ廻して論戰大いに努めたけれ共到頭反對論者の爲に此案は一蹴されて終つた。

鄧女史は口惜しくて堪らなかつた。女子解放にしても、男女共學にしても、中華民國として當然實行しなければならぬ問題である。それを陸孟飛等が因習を楯に取つて依然として女子を壓迫しようといふのは、實に怪しからん態度であると柳眉を逆立て、憤慨した。

支那の一部に妙な言葉がある。それは女が男を侮辱する最大の手段で、其の男に向つて「お前のやうな男は、××××××首を縊るがいゝ」とかう罵ることである。男子としては是れ以上の恥辱はない。

女史は、其の言葉を其の儘實行した。彼女は陸孟飛へ宛て、手紙を書いた。其の中へ彼女自

身の××の毛を封じ込んでやつて、さうして其の通りの文句を手紙の中へも書いたのだつた。

流石の陸孟飛も是れには啞然として驚いた。此の事は忽ち廣東政界の大評判となつて、聞いた者は皆膽を潰し、それ以來陸孟飛は何處へ顔を出しても是れで彌次り倒されてしまふといふ始末、一方鄧蕙芳の方は、素晴らしい攻撃の武器を發明したことによつて有らゆる政界の人々から異様な恐怖を以て認められるやうになつた。

「男女共學に就いての御意見は？」

「前年は教育者の主張が男女分校といふことになつてゐましたが、近年は私共の主張が多少容れられて事實上或る程度まで男女共學が實行されて居ります。そして私共の主張は、教育程度は必ず男女一律でなければいけないのです」

「貴女は演劇などは好きですか」

「好きですけど、廣東には現在見るやうな演劇はありません」

「さうですね。私の友人ですが、歐陽予倩といふ人が現在廣東で戲劇研究所を創立してゐるんです」

「歐陽さんとお友達ですか、私も先達て研究所の『茶花女』（椿姫）の試演を見て参りました」

さういふ話が出た。

「女優も婦人の職業として結構ですわ。私共の見地から云ふと、女優でも、官吏でも、教師でも、女工でも、皆同じことです」

それから鄧女史は私に何時頃迄廣東に滞在するつもりか、滞在中は何事でも遠慮なく申し付けて欲しいといつた。最後に私は尋ねた。

「貴女のお子様は何と云ふ名前ですか」

「夏鋤強と申します、齡は十一です。私の家庭は私と其の子と二人きりですから私が毎日六時迄黨の仕事をして歸ると、小供が私を待つて居ります」

女史は母親の愛に満ちた面持をして云つた。

陳 塘

廣東に陳塘といふ花柳界がある。

其處には、五軒の酒家（料理店）と、約三百人の老舉（藝妓）があつた。酒家の號は、永樂、群樂、留觴、京華、燕春臺といふ。

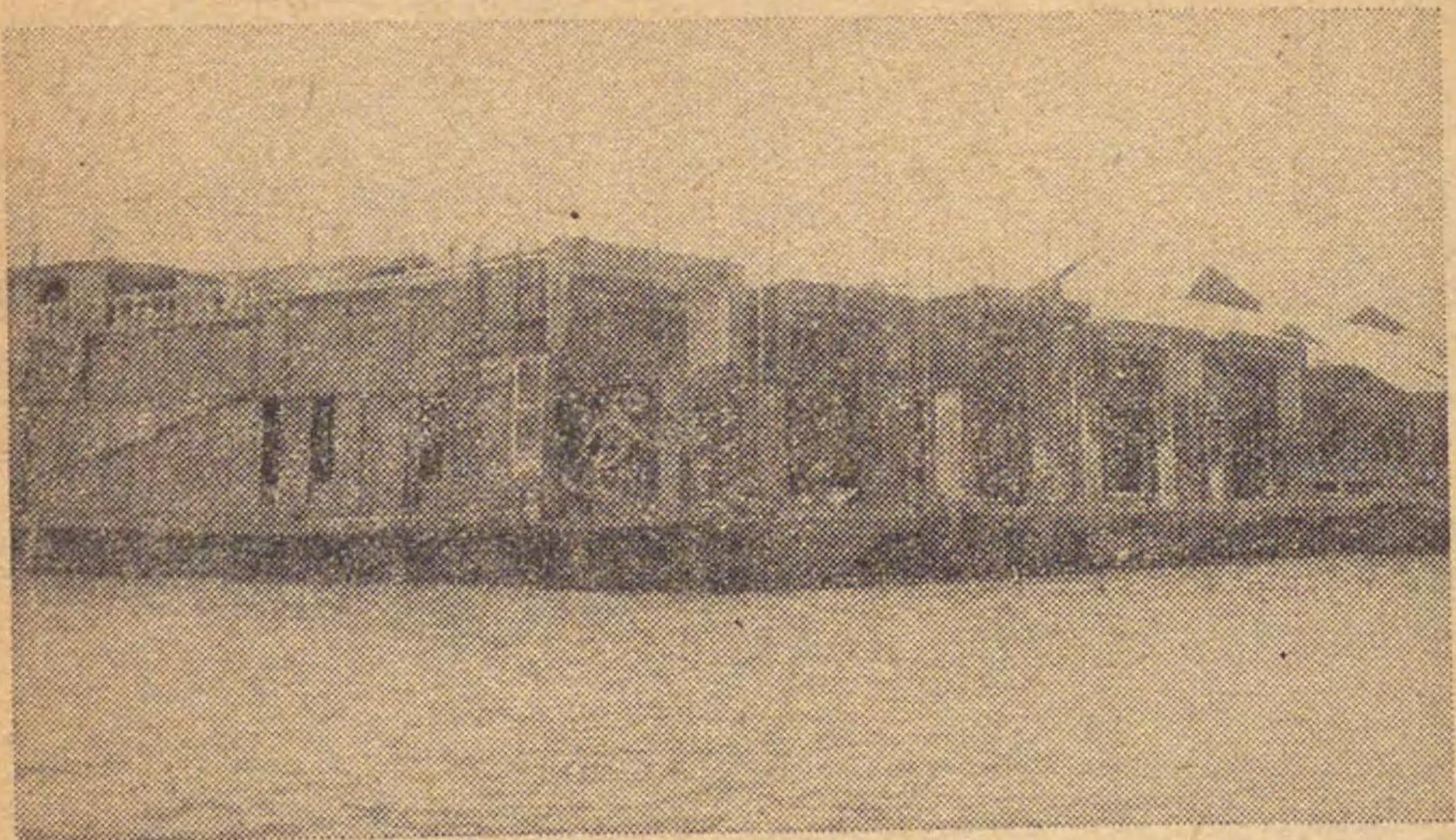
料理屋の規模の壮大なるには驚いた。建物は、間口十數間、若しくは數十間、五層乃至六層の、外觀は純洋風の素晴らしい巨きな建築だ。昔の吉原の角海老を五つ六つ固めた位の大きさはある。だから、陳塘の家數はたつた五軒だけれども、それだけで雄大な一廓を形作つてゐる。永樂といふ家は、中どころだつたが、聞くところによると、一日の料理の賣上げが三千元以下では維持が出来ぬといふ。最近、東京の支那料理山水樓の店員が廣東の料理を研究に行つて來ての話に、近來は本場の廣東料理も下落して、大概の店で日本の味の素を使用してゐる、味の素を使用しない家は實際は無い位だといつて憤慨してゐた。日本の國産がそれ丈支那へ輸出されるやうになつたことは賀すべきだが、本場の廣東までが味の素料理に墮落したことは、料理の立場から云へば確かに憤慨に値する。處で一體どれ位味の素を使用してゐるかといふと、大きな處では一ヶ月六百圓の味の素をスープの中へブチ込んでゐるといふのだから、話が太袈裟である。此の一事を以てしても、廣東の料理屋がいかに大掛りなものであるかといふことは充分想像されると思ふ。

藝妓屋は六七軒で、一軒の館に五六十人の老舉が抱へてある。此の館を老舉寨といふ。そこで此の五軒の料理店と三百人の藝妓とが聯絡を取つて商賣を營んでゐる。

廣東の遊びの様式は餘程他の土地とは異つてゐた。先づ其の大體の形式を説明して見やう。

普通宴會といふと、夕方から料理屋へ集るのだが、さて一同の顔が揃つても料理は出ない。客はめい／＼馴染の藝妓を名差して掛ける、妓は直ぐやつて來る。お客は麻雀を始めるのが定法だ。麻雀を好かぬ人達は何か他の賭事をやる。とにかく、顔が揃へば先づバクチに取り掛るのである。

腹が空けば、麵のやうな軽いものでも取つて一時押へをして繼いでゐる。上戸は各々好みの酒を取り寄せ、チビ／＼やる。然し、かういふ場合に餘り酒を飲む者はない。酩酊しては博奕に負ける恐れがあるからだ。藝妓達は出たり入つたりしてゐる。數席掛け持ちだからおち／＼落ち着いては居られないのだ。彼等は



（東廣） 艇洞業るべ浮に江珠

別に藝をするわけではなく、自分の馴染のお客の側へくっついて腰掛けて、煙草をつけて呉れたり、時には代つて麻雀をやつたりする。おなじ藝妓でも、娼脚といふ名稱の妓は、宴席へ來ると直ぐ藝をやる。打琴と云つて琴を打ち乍ら唱を歌ふ。其の琴は長さ二尺ばかり、數十本の金屬製の弦があつて、それを軽い竹のヘラで打ち鳴らすのだ。幽玄微妙な音色で、廣東獨特の樂器である。中には胡弓弾きを伴れて來て京曲を唱ふ妓もある。が、廣東では京曲は少ない。お客達はそんな物は見向きもしないで博奕に夢中である。煌々たる龍宮のやうに燈火の輝く大きな料理店の部屋といふ部屋から麻雀の牌の音が雨霰と降つてゐる。

夜食のことを廣東では燒夜と云ふ。燒夜の始まるのは早くて十二時か一時、どうかすると三時四時となつて、夜は白々と明けて來る。燒夜が済むと一同サツサと引き上げる。客は歸り際に自分の聘んだ妓に玉代を手渡しする。玉代は宵から三時半迄が三圓四十錢(すべて廣東銀)三時半を過ぎると其の倍になる。玉代だけは各々妓に手渡しする習慣になつてゐる。

日本でも遊興税が段々高くなるが、廣東は税金を使ひに行くやうなものだ。花柳界の税金は花捐公司といふ會社が政府からの請負事業で取り立てゝゐる。何處の色町にも花捐公司の出張所があつて、役人が詰めて居り、銃を持つた兵隊が固めてゐる。

宴會を開く時には、先づ買票をしなければならぬ。是れを筵捐といつて一圓八十錢拂ふ。筵捐は客一人でも十人でも同じだ。買票をしたからもう税金は拂はなくてもいゝかといふとなか／＼左うではない。あらゆる物に税金が掛る。麻雀税、ランプ税、電風扇税、教育費税、附加税、いろんな名目の税金が掛る。老擧の玉代三圓四十錢の内二圓は税金である。残りの一圓四十錢の内抱主が一圓取るから妓の手に入るものは四十錢しかないといふことになる。これでは幾ら稼いでも足らぬから其處は別途の収入で補つていく。

宴會の後で妓館へ遊びに行くことが出来る。尤も最初から料理屋拔きの妓館へ行つて遊ぶ形式もある。これは馴染客に限る。

老擧寨には、少きも二三十人、多きは六七十人の妓とそれに附屬した女達がある。妓はめい／＼自分の部屋を持つてゐて、其處には彼女達の生活を飾るいろんな調度が置いてある。大きな寢臺、箆筒、テーブル、幾つもの椅子、寫眞——。しかし建物も部屋も粗末である。

老擧は、只酒間の斡旋をするのみで、藝もなく、宴席へ來ても多くはツンと濟ましてゐる。だからまことにつまらないものゝやうに初めは思はれるが、少し馴染を重ねて來るとなか／＼さうでない。

いつたい中國人はサービスの天才である。上流社會の人々は従つて社交に長けてゐる。下層社會の者には、社交といふことはないが、金錢に對して非常によく勤勞奉仕する。だから、家庭、旅館、汽船などのボーイとしては理想的だと云はれてゐる。けれども段々よく調べて見ると、同じ中國人でも北方は鈍重だから正直ではあるがボーイには不向きで、それには南方でも殊に俊敏で軽快な廣東人に限ると云はれてゐる。海外などへ發展して盛んに稼いでゐるのは殆ど大多數が廣東人ださうだ。廣東のボーイのサービスに至つては確かに世界に冠たるものだ。老學が矢張りさうである。

老學の館へ遊びに行くと、先づおきまりで煙草や、果物や、茶を矢繼ぎ早にすゝめて、命ずれば酒でも料理でも持つて来る、阿片も吸はせる。さうして歡待措くところを知らぬ有様である。尤も、多少は爲になるお客だと思ふ場合のことであることは勿論である。彼等から精神的な何ものかを求めようとしてもそれは無理である。其の代り有らゆる手段を弄して、他人の面前であらうと何んであらうとお構ひなしに、自分獨りのお客を喜ばせるのである。心で想つてそれを外部に現はさぬやうにするといふ道徳は彼等の間には無い。心の愛情だの尊敬だのといふさういふ精神的な無形なものは彼等の間では通用しない。彼等商賣女だけが知つてゐる有ら

ゆるテクニツクを發揮して、露骨に、官能的に、相手を好遇することのみが、彼等の唯一の勤勞であり、お客もそれで満足してゐるやうな觀がある。戀愛の唯物史觀が充分に發揮せられてゐる。

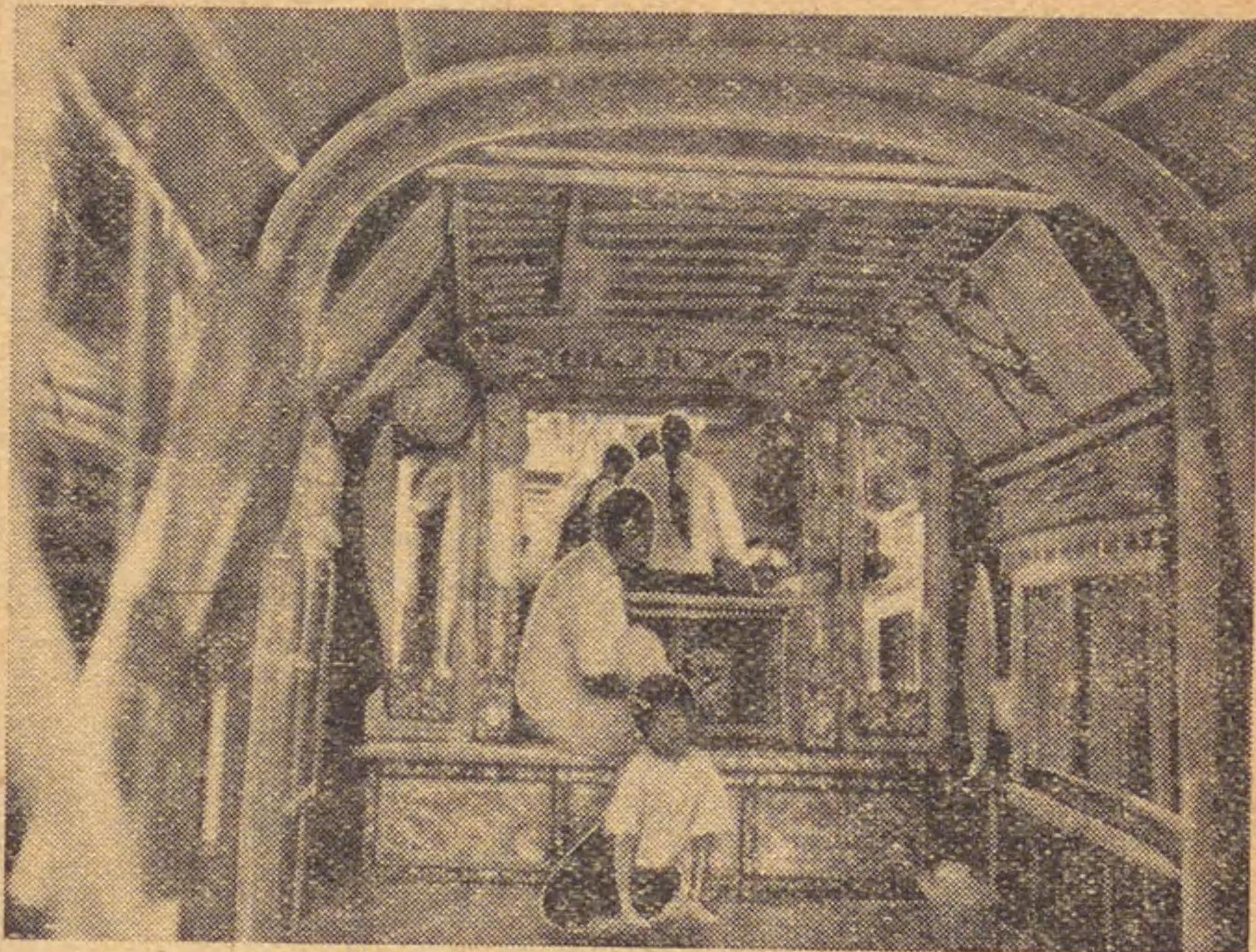
K君といふ若い會社員はなか／＼の花柳通であつた。花壁蓮といふ老學の彼は且那株である。花壁蓮は斷髪を捲き上げたモダン型の女で、色の赫黒い、眼の生き／＼した女であつた。K君は支那人の取引仲間と大賭博をやつて警察へ引つ張られたり、花壁蓮を伴れて自動車でドライブをして風紀問題で巡查に捕まつて女と一緒に警察の留置場へ抛り込まれて銀貳元の罰金を取られた話などを自慢して私に話した。彼は其の好個の記念物である公安局長歐陽駒の判を押した罰金の領收書を私に参考品として提供した程の、社會事情の熱心な研究家であつた。

或晩も陳塘で夜を明かした私とK君は、それから一旦花壁蓮の館へ寄つて、彼女と其の召使の婆さんとを伴れて、黎明の街を人力車をつらねて華林寺の泥坊市を見物に出掛けた。

華林寺は廣東で有名な巨刹だ。そこは達磨禪師が南天竺國から來つて初めて庵を建てた處で、初めは西來庵と云つた。後年漸次規模壯大に赴き、清の順治十二年宗符禪師が重建するに及んで華林寺と改めた。此處は五百羅漢像で有名だが、其の一體の本尊の左にあるのはマルコ

ポロの塑像だと傳へられてゐる。かういふ由緒ある寺院だが革命以後破壊されて現在は羅漢堂が残るのみ、一切の伽藍は取り拂はれて、其の跡は漠々たる空地になつてゐる。其の空地を利用して毎朝泥棒市が立つのである。

泥棒市といふのは支那の各地にあるが、つまり贓品を賣る市といふわけだが、實際はさうばかりでもない。無論贓品も混つてはゐる。要するにガラクタの古道具の露店だが、此處のは特別ヒドイ物が多かつた。有らゆる廢物を少しばかり席の上に並べて賣つてゐる。破れた帽子、靴の片つぽ、ブリキの切れ端などはまだしもとして、ガラスの破片、柱時計の字盛りをした面だけ、錆付いてしまつた時



(東廣) 部 内 の 艇 漢

計の器械、といつたやうなどうにも法の付かない代物でも平氣で並べて賣つてゐる。賣つてゐるところを見るとたまにはさういふ物でも賣れるものと見えるが、どうも不思議である。古錢だの骨董めいた物や稍實用品めいた物を賣つてゐる店もある。さういふ極端なガラクタの露店が數百並んでゐる空地へ、お祭のやうに澤山の人が出て素見して歩いてゐる。時々思はぬ掘出し物があるといふ。私達も思ひ／＼下らぬ物を買ひ込んだ。五百羅漢を見たいと思つたが朝が早いのでまだ開いてゐなかつた。私達は其處から程近い處の立派な茶館へ行つて飲茶ヤムチヤイをして歸つた。

いかもの料理

本式の廣東料理カントンの事は暫く措いて、廣東カントのいかもの料理を一寸紹介する。

先づ筆頭が蛇料理だ。専門の蛇料理屋が市中に何軒もある。蛇料理について注意しなければならぬことは、一體蛇といふものは毒虫だが、其の毒は皆齒にある。で、齒さへ綺麗に抜き取つてしまへばどんな蛇を食つても中毒はないさうだ。

然し、料理に用うる蛇は、大體、青大將、縞蛇、ハブの三種類位だ。蛇料理屋へ行くときさう

いふ蛇を澤山網の檻の中へ飼養してある。階段を上つて行くと二階の取つ掛りの處に其の蛇籠がある。お客は立ち乍ら其の蛇を見て「是れが旨さうだ」「彼奴が味が好いだらう」と指差してボーイに命じると、ボーイは檻の中へ手を突つ込んで譯もなく其の蛇の頭をギユツと擱んで引出して持つて行く、直ぐにそれが料理になつて皿に盛られて来る。まあ日本の鰻と思へば間違はない。

次が猫料理。

猫料理に關する注意。猫は若い程體に毒があり、老猫になると毒が脱ける。だから猫を食ふなら老猫を撰ばねばいけない。それから毛色は黒猫が一番美味い。

猫料理の效能。漢法によると、猫は陰性の獸類に屬するを以て人間の陰部に最も効果があるとされてゐる。殊に婦人病には妙だといふ。

猫を食ふ以上は當然鼠を食はんと不公平になるが、幸ひ廣東人は鼠は寧ろ猫以上に好物だ。

乾魚のやうに、皮と骨とを取り去つて、肉を薄くのしたのを板に張り付けて太陽で乾かす。程よく乾いたのを烙つて食つてもよし、汁のダシに使つたり飯の上に載せて温めて食つてもよし。

鼠には溝鼠と畑鼠とあるが、溝鼠は傳染病を媒介する危険はあるが、種々雑多な食物に有り付いてゐるから味は大變よい。田舎の方へ行くと百姓などは専ら畑鼠を取つて食ふが、味は溝鼠に比べると大層下るさうだ。

廣東省の東部に潮州といふ大都會がある。此處は韓退之が流されたので有名な處だ。此の潮州の人は、宴會といふと、鼠料理を第一の珍味とする。それは畑鼠だが、廣東邊と違ふことは鼠の生れて間のない水々したのばかりで、それを數日間糖蜜で飼つて置くと、肉も旨くなるが鼠の胃腸を洗滌し、骨が柔かくなる。食卓に出す時は其の子鼠を澤山一寸水で洗つたばかりで生きた儘皿へ上げて出す。決して煮たり焼いたりしない。するとお客達は待ち構へてゐて各々手の先で鼠の尻尾をつかんで取り上げ、醬油に浸してアングリ口の中へ入れ、チュウ〜と鳴き乍ら舌の上でもがくやつを奥齒でキユツと噛み殺し、まだ唇の外でビク〜動くやつを尻尾もろとも手で押し込んで舌鼓を鳴らしながら食べるのだ。

禾虫料理

これは特に婦人の好物とされてゐる。廣東の諺に、夫死還在夫、禾虫過期恨不返——といふ言葉がある。廣東の女は、夫が死んだ時先づ禾虫をタラフク食べた後で喪に服するといふ悪口だ。

處女の不婚同盟

廣東省の順德縣といふ處の處女達は昔から夫を持たず獨身で暮すといふ奇妙な風習がある。今では多少減じたといふが、それでも矢張り大部分の處女が一生亭主を持たず獨身で通すといふのだから驚き入る。

これらの獨身の女のことを『孤婆』といふ。そして孤婆になるには披露がある。一旦孤婆の披露をした以上は勿論途中で亭主を持つやうなことはない。獨身の娘達を親や兄弟の手を離れて『孤婆屋』といふのへ移つて生涯其處で暮すものが多い。此の地方(南部)は古來製糸の盛んな土地だから彼女達は多く製糸工場の女工となつたり、養蠶の手傳ひをしたりして賃銀を取つて生活する。都會へ奉公に出て働く者も澤山ある。彼女達は必ずそれ／＼同性愛の相手を持つてゐるのだ。同性愛のことを『契相知』と云つてゐる。

勿論父母や兄弟はそれを喜ばない。處が古來の風習は恐ろしいもので、順德縣の娘達は、たとひ孤婆の披露をしない者でも概して結婚を厭ふ風がある。兩親が秘密に結婚の約束をしてしまつて無理に結婚させようとすると、家出したり自殺をしたりする。

彼女達の間には『迷夫教』と稱する秘密結社がある。黨首には呪文や呪禁の上手な魔法使の女を推戴する。どういふことをするのかといふと、無理に結婚させられた女があると、其の魔法使が不思議な法を使つて女の亭主を殺して終ふか或はフラ／＼の病人にしてしまふ。實に險呑千萬だから現今も其の地方の當局者は厳しく此の迷夫教を取締つてゐるが效能はない。まさか女の獨身を禁じるといふ法律も出来ないから困るさうだ。

孫中山の故郷を訪ふ

朝七時半に私はホテルを出て、直ぐ近くの日本人齒科醫和田氏を訪問した。廣東の友人の紹介状を持つて。和田氏は澳門に於ける唯一人の日本人である。

早朝からの訪問に對して和田氏は快く迎へて呉れた。私は今日中山縣の孫文の故郷を訪ねて見るについて、和田氏から大體の説明を聞いて行き、それから道筋に慣れた信用の出来る自動車と同氏の手で傭つて貰はうと思つて來たのであつた。すると氏は今日は幸ひ午前中手隙だから私の爲に案内をして遣らうと云はれた。初對面の氏をそれまで煩はすのは恐縮だと思つたが、折角の好意であるからそれに従ふことにした。

私達は直ぐ近所の自動車屋から一臺の車を備つた。一たん海岸通りへ出てそれからガマ公園の脇を通つた。其の邊の景色は美しかつた。其處には香港邊りに見られない古い落着きがあつた。路傍の樹木、建物、石、すべてのものに歴史の匂ひが漂つてゐる。堂々とした古い建物は此の土地の過去の繁榮を物語つて、上品な頹廢色の中に寂しく沈黙してゐる。ガマ公園は手入れの行き届かぬ樹木が従横に繁茂して地面には雜草が蔓延してゐる。

「あれが有名なヴァスコ・ダ・ガマの銅像です」

和田さんは車上から指差して云つた。それは高い臺に載せられた胸像だつた。ヴァスコ・ダ・ガマは一四九八年アフリカの南端を通過して印度へ來て歐亞交通の端緒を開いた葡萄牙の有名な航海者だ。此の銅像の臺下にある大理石の彫刻は葡國の詩人カイモンスのガマの事蹟を謳つた詩ださうだ。

それから少し行くと關門があつた。此處は中國と葡領との國境になつてゐる。アフリカ人の兵隊が銃を持つて門を守つてゐる。が、別に通行人を調べるやうなことはない。關門から一町程行くと道の側らに中國の軍人が立つてゐて自動車にストップを命じた。此處には中國の關稅吏の出張所がある。役人が側へ來て自動車の扉を開けて一寸覗いて見て「宜しい」と云ふ。實

を云ふと私は寫眞機を持つてゐた。そんな携帯品でも此處で見付かると輸入税を掛けられるさうだが、いいあんばいに私のは見遁して呉れたので税金を取られないで済んだ。

此の邊から先の道路は昨年出來上つたばかりだが、廣くて平らで、低い山が果しもなく起伏する間を坦々と走つてゐる。美事な道路だ。自動車は快速力で走る。山は赤土で松が多い。太陽は赫々と輝いてゐる。明るい晴れくした景色である。時々村落を通る。が、何處も豊かさうな村だ。

關門から此方は廣東省中山縣だ。昔は香山縣と云つたが、近年、孫中山の故郷といふわけで中山縣と改稱された。

私は、數日前廣東から日歸りで行つた花縣官祿布といふ洪秀全の故郷の有様を思ひ出して、あれとこれとを對照して考へさせられた。同じ廣東省でも、北部の花縣地方と南端の中山縣とは全く別々の天地のやうな感がする。北部は淋しく、暗く、そして貧乏である。中山縣は何處へ行つても暢氣に明るくそして村は皆富んでゐる。風物、人情、風俗、すべて甚だしい徑庭がある。太平天國十年の榮華の夢が破れ悲劇的末路を了へ賊と呼ばれた洪秀全と、民國革命の父として神に祀られ死後の榮光に輝いてゐる孫文と、各々が生れた故郷の環境や、時代、境遇

の相違はそれ程著しくあるにしても、此の兩者を繋いでゐる一すぢの太い綱のあることは見のがせない。私は廣東で孫文に關するいろんな逸話を聞いた。其の中の一つ二つを此處で話して見度い。

孫文の革命思想は、年代と共に進歩して最後に三民主義迄到達したが、最初は倒滿興漢が目標だつた。彼がまだ澳門で醫者の看板に隠れて革命に志し始めた頃、澳門に李某といふ富豪があつた。李は深く孫に共鳴して終始革命を助けたが、それについて面白い話がある。

李に一人の男の子があつた。孫は或時其の子供を見ると驚いて云つた。

「此の兒は末に帝王の位に登る相を具へてゐる」

李が喜んだことは勿論だ。孫文は、自分の革命が成功した曉には此の兒を必ず皇帝の位に即かしめることを李と約束した。

それ以來李が孫に力を入れ出したことは勿論だ。そして、李の家では、其の子に龍の刺繍をした袍を着せて奥の間に住まはせ兩親でも其の前へ出ては三拜九拜した。つまりもう皇帝になつたつもりである。

李は徹頭徹尾孫を援助したため頭さしもの大財産も蕩盡してしまつた。李家は貧乏になつ

たけれども革命は成功した。未來の皇帝は、其の輝かしかつた希望だけで消えてしまつた。

けれども孫は流石に恩人の子を見捨てはしなかつた。未來の皇帝は名を李其堂と云つた。孫逸仙は李を民産保證局長にしたり、海南島航路局長に任命したりした。しかし李其堂氏は、帝王の相はあつたかも知れぬが、俗吏になる器ではなかつた。競争の激しい政治舞臺で働くべく餘りにお坊ちやんだつた。

孫文が生きてゐる間はともかく、孫の死後は誰あつて彼を引き立て、呉れる人はない。

いまでは彼人も止めてしまつて、廣東で不遇な生活を送つてゐる。これは廣東では誰でも知つてゐる程度に有名な話だ。革命の裏面にはかうした悲喜劇もある。私は某氏の紹介で廣東滯在中に李其堂氏に面會する筈だつたが、つい機會がなくて過ぎてしまつた。

民國十二年、孫文が楊希閔の雲南軍と、沈鴻英、劉震寰の廣西軍とを利用して、陳炯明を逐つて廣東を攻略した時だつた。孫を效けた雲南及び廣西軍、中でも楊希閔の軍隊が一番有力であつたので、彼等は其の功に誇つて屢々眼に餘る行動を取るやうになつた。孫文何者ぞ。國民黨何者ぞ。彼等は言論の徒だ。彼等には實力が無い。國民黨が廣東を取つたのでなく、我が雲南軍が廣東を取つたのだ——かういつた言葉が彼等の口から忌憚なく吐き散らされた。自己の

功勞と力量とを過信せる雲南軍はやがて孫大總統を引き下して、廣東の政權を自己の手に握らうとしてゐる、さういふ風説が盛んに傳へられた。それは單なる風説でなく雲南軍の中にさうした陰謀が頭を擡げつゝあつたことは事實だつた。孫の左右の者は頻りに此の事を告げて速かに楊希閔一派に對する方策を樹てるやうにと警告した。すると孫はいつも笑つて「お前達は雲南の兵士位を何で恐れるか」と云つてゐたが、或日突然楊希閔に命令を下して。今日大總統が軍隊へ臨行するから士官以上の者を全部集合して置くやうにと云つた。楊希閔は何事か分らなかつたけれどもとにかく全部の將校を集めて待つてゐると孫文は僅かの隨員と共に極く手輕に乗り込んで来て、二百名ばかりの雲南將校の前で演説を始めた。

「私が始めて革命を志してから三十年になる、其の永い間、又現在も、私は人から様々の悪口を云はれた。やれ空論家だ、馬鹿だ、氣違だ。しかし私は一向氣に掛けぬ、それは私のやうな立場の者には止むを得ぬことだからである。何と罵られても腹も立たず、悲しくも思はない。けれども、たつた一つ私の肺腑をえぐる悪口がある、それは『孫の猿め』と云はれることだ。諸君、私の顔は猿に似てゐるさうだ、諸君が見てもさうだらう、自分で鏡を見ても、成る程私は猿だと思ふ」

雲南軍の將校達は驚いてしまった。突然大總統が臨場して演説するのだからどんな大問題を論するのであらうかと片唾を吞んで聞いてゐると自分の御面相の棚卸しが始まつた。然し全く孫文の顔はさう云つて見れば猿に似てゐる、どうもうまい事を云つたものだ、と感心したが、それにしても今日大總統が何んの爲めにこんな話を始めたのだから譯が分らない。孫文は演説を進めた。

「諸君の故郷雲南は好い國である。しかるに、雲南の第一の名物は何であるか知つてゐるか？それは猿曳きである。猿曳きは古來雲南人獨特の技術とされてゐるのである。諸君、諸君は猿曳きと猿との關係を何う考へるか？猿の藝は、猿曳きの絲が無くては踊れないのである。が、猿曳きは猿が無かつたら生活は出来ないものである。諸君は猿曳きである、此の孫文は猿である。どうだ解つたか」

滿場啞然たる間に孫は悠々と壇を降りて總統府へ歸つた。鬱勃としてゐた雲南軍の叛意は此の一場の演説の爲めに跡方なく雲散霧消したのであつた。

私達の自動車はほぼ三十哩の速力で二時間走つた。するとめざして來た翠生村へ到着した。自動車道路から一丁ばかり北寄りに五六十戸の豊かな美しい村があつた。道路から村迄はやゝ

狭い道が真直ぐについてゐた。村の前には公園のやうな林があつた。私達は其の村の方へ行つた。一番取つ付きの處に、煉瓦造の立派な二階建の家があつて、同じ煉瓦の門と塀が繞らされてゐる。それが孫逸仙の生れた場所で、現在其の遺族が住つてゐる家であつた。家の前には廣場があつて公園風の榕樹の林が續いてゐる。

和田さんは度々日本人を案内して來るので家族とも懇意であつた。人々は愛想よく歓迎して呉れた。私達は階下の廣い部屋で茶をよべたりした。其處には纏足の老婦人と、中年の婦人と小兒がゐた。

「此の方が孫逸仙の實の姉さんです、名前は孫西といふ人です」

和田さんはさう云つて私を老婦人に紹介してくれた。老婦人は黒い服を服けてゐる。大分の齡らしいが、腰も屈らず、丈は高く、見るから矍鑠としてゐる。

「お齡はお幾つですか？」

「八十四歳です」

と孫夫人は云つた。容貌は正面に掛けてある孫總理の顔とよく似てゐる。其處には大きな青天白日旗と、萬國旗が裝飾してある。

此の家は極く最近に政府が出金して建てたもので、勿論昔の面影は留めてゐないのである。孫文の家は可成り貧しい家だつたといふ。彼の生れた其の儘の家は實に見窶らしいものであつたさうだ。政府が總理の徳を稱へて子孫の爲めに立派な家を建て、やることは結構だが、其の昔の儘の家を取り毀して貴重な史蹟を消滅させてしまつたことは惜しいものであると見物に來る日本人などはよく云ふさうだが、それは日本流の考へ方であると私は思ふ。

階下にはまだ立派な客間があつた。其處には、孫文を始め、孫の父、兄、姉、ハワイ在住の兄孫の第一夫人、等の寫眞の肖像が掛けてある。ハワイに居る孫の兄は今も健在だといふ。それから第一夫人(孫科氏の母)は現在澳門マカオに住んでゐる。それに對して政府は年金を贈つてゐるさうだ。

私達は間もなく其の家を辭した。元來た道を引返したが丁度半途頃から道を左に取つて唐家灣の方へ進んだ。海は直ぐ近くにあつた。唐家灣は風景が佳いので此の地方で有名であるが、國民政府では此處に築港をして一大自由港を開設し、香港ホンコン、澳門マカオの繁榮を奪取しようといふ計畫である。すでに其の設計も具體化され建設委員の顔觸まで新聞に發表されてゐた。

左に海を眺めながら進むとやがて一つの村へ入つた。村では恰も市が開かれてゐて、其處の

廣場には近郷近在から集つて來た農夫や其の女房達が、蔬菜類、鶏、卵、雛鳥、家鴨、豚、兎、果物等を地上に押し並べて店を開いてゐる。其の間をお祭のやうに人が出てゐる。

「此の唐家灣の女は特別の容貌を具へてゐて美人が多いといふ定評があるのです」

と和田さんは云つた。さう云はれて氣を付けて見ると、道で出遇つた農家の娘達などが、鼻が高く、眼が大きくて、どれも不思議に顔立が整つてゐる。

私達は共樂園といふ灣に臨んだ山の上の園へ登つた。其處には政府で建てた建築物などがあつて園内もよく手入れが届いてゐた。

十一時半澳門^{マカオ}へ着いた。そして私は午後二時香港^{ホンコン}行の汽船に乗つた。

洪秀全の故郷を訪ふ

五月十一日であつた。私は、午前七時に沙面^{シャオミン}の澁谷氏の家へ行くと、奥さんは私の爲めに折詰の辨當を拵へ、水筒に蒸溜水を詰めて、ちやんと仕度して呉れてあつた。私はそれを受取ると直ぐ今朝の集合地である英國橋へ駆け付けた。集合時間の七時半を十分位過ぎてゐた。暫時其の石橋の上に佇立してゐて見たが、其の邊には誰も知つてゐる日本人の顔は見えなかつた。私は置いてけぼりを食つたのかと思ひ乍ら、それでも其處に立つてゐると、矢張り遅刻組の人が二人ばかり向うからやつて來た。汽車は八時發車でもう十五分しかない。

「みんなもうステーションへ行つてゐるのですよ、まだタクシーで行けば大丈夫間に合います」
K君といふ人がさう云ふ。

直ぐ側のタクシーを傭つて私達は粵漢鐵路車站へと急いだ。驛の入口の處に寫眞機を肩に掛けたずんぐりと圓い森清太郎氏が立つてゐた。森さんは一行の團長で同時に唯一の案内者だ。

「サア、急いだ〜」

火車はプラットホームにゐて、どの車室も満員すし詰めだつた。一行は全部乗り込んでゐた。

今日の同勢二十人だといふ。それは三等だつたけれども、百姓や田舎の婆さん達のやうなお客様が一杯で腰掛は一つもない。其のお客達が、ガヤ／＼とゑらい騒ぎ。其の中を果物や駄菓子ダ菓子の賣子が大きな聲で呼んで歩いてゐる。定刻に發車した。

粵漢鐵路は、廣東から眞北をさして上つてゐる。現在は廣東省の紹州邊までしか開通してゐないが、將來はそれから更に眞直に北上して湖南を貫通し長沙を経て武昌、漢口に通じる豫定線だ。

汽車は荔枝灣ライチ湾の附近を通り、右に觀音山を見て走つた。田園水村の情趣なか／＼捨て難いものがある。幾つもの小驛を通過した。村や町には質屋の四角な倉庫が高く聳えてゐる。其の倉庫には長方形の小さな穴のやうな窓が幾つも明けてある。それが小さな城寨のやうに見える。江村站、新街站などといふ驛があつた。新街站の手前には可成り大きな河が流れてゐて、其の河水が氾濫して民家の壁の際まで浸してゐる。新街站は背後に山を負ひ、前に江を控えて、風景が勝れてゐた。

九時半樂同といふ驛へ着いて私達は下車した。此處は廣東を去ること五十支里の地であるといふ。片田舎の小驛であつた。驛の壁に例の北伐宣傳のビラが貼り付けてある。

『閩錫山是殺同志的錫子手』

『打倒摧殘教育愚惑民衆的閩錫山』

一行は私達二十名の外に、森さんが交渉して連れて來た廣東の巡警が三人ゐた。巡警は土匪除けのお呪禁である。一行は森さんを先登にして、驛を離れると田圃の中の狭い道を進んだ。森清太郎氏は、廣東の藥劑商で、日本人の民會長だが、廣東に住むこと三十餘年、篤學の歴史家で、且つ寫眞術に長じてゐる。其の多大の苦心になる『嶺南記勝』の著述は全廣東省に亘る最も精密な歴史書として日本人だけでなく中國學者の間にも尊重されてゐる。

雨が降り出しさうな空になつた。川が流れてゐた。長さ二十間ばかりの一枚づゝの板を繼いだ橋を渡ると、其の川に沿つて上流の方へと進んだ。川の水はきれいに澄んで、水のないうところには白い砂地があつた。周圍は水田で稻が伸びてゐた。驛から十五六町も來たと思ふところに村があつた。其の村は、今日私達が目的地として來たところの、太平天國の巨魁洪秀全を生み出した花縣の官祿布クワンロツブといふ村であつた。

村は、其の側面は樹木と泥壁で圍はれてゐた。そして土で造つた門があつた。門を入つた處に廣場がある。其處には石と土で造つた長屋造りの農家が幾棟もある。廣場は全體コンクリー

トで固めてある。南は遠くひらけた水田である。廣場の端に大きな井戸があつて、井戸を被ふやうに面白い枝振りの木が立つてゐる。百姓のかみさんや、婆さんや、子供達が門口へ出て私達を見る。豚、鶏、家鴨、犬、猫——彼等も人と同じ様に其の邊を歩いてゐる。其の長屋の一つに『福音堂』といふ額が掛つてゐた。それが何やら洪秀全の匂ひがした。

其の廣場を通り過ぎると、南に面して、煉瓦造の立派な廟門があつた。それには『洪氏宗祠』と書いた額が上つてゐた。それは洪秀全の一族の廟であるといふ。けれども其の建物は極く新しいものだつた。

門を入ると石を敷いた庭があつて、正面に牌堂がある。周囲の壁は全部黒ずんだ瓦であつた。中央の大きな壇に澤山の位牌が祀つてある。牌壇には彫刻が施してあり、上方に金色の二頭の龍を現し、中央に太陽を現はしてある。牌壇の高さは一丈五尺位あつた。位牌は十二世以後十七世以後迄の多い。十二世が洪秀全の父母である。

雨が降り出した。而も段々強降りになつて來た。建物の片側をアンペラの様な物で仕切つてあつて、中には机が十二三脚置いてある。此處で村塾を開いてゐるのだが、先生は見えず其の邊の村童達だけが物珍らしさうに一行の側へ集つて來てゐる。

其處へ、坊主頭の、粗服をつけた五十恰好の大男が入つて來た。其の人は森さんと親しげに挨拶を交した。森さんから此の人が洪氏の一族の洪勝元といふ人であると説明された。

其の人は、いろいろ私達に古い事を説明して呉れた。此の廟も以前は他の場所にあつたのを、宣統三年に此處へ移してこんな立派な建物を造つたのだといふ。宣統三年頃は既に清朝の勢力は全く衰微してゐた。清朝の威勢が残つてゐた時分には、洪秀全一族の廟祠などは建てられなかつた。現在、洪秀全の血縁を一番近く引いてゐるのは、秀全の兄で太平天國の時安王に封ぜられた洪仁發の子の嫁である張氏といふ八十八歳になる老婆で、まだ達者であるといふ。其のお婆さんを此處へ連れて來て會はせて呉れるといふ話である。洪勝元さんは、一行に茶を出し、村の駄菓子や山のやうに捧げてもてなした。

洪秀全は一八三一年二月二十日、一見何の奇も無い此の一寒村で生れた。彼の家と云つては元來他郷からの移住民で、客家は此の地方の習俗上一種の賤民階級に屬してゐた。彼は年少志を立て屢々第試に應じたけれども毎も落第した。それは家柄の無いことも原因してゐた。彼は遂に失望し世を恨むことを覺えた。一八三七年頃、彼は廣東へ出てゐたが、或時『救世良言』といふ耶蘇教の書物を人から貰つた。それは梁某といふ中國人が書いたもので、梁はロバート・

モリソン博士の檢閲を受けて廣東で印刷したのであつて、全九章から成る聖書の解説であつた。秀全は著者の梁から直接其の本を貰つたのだつた。けれども其の當座はろくに讀まずに抛つてあつたが其の後又もや第試に落第したので失望の極病氣になり、四十日餘も引籠つてゐる間に、一種の幻覺に捉はれて何となし大望を抱くやうになつた時、偶々其の書物を取り出して讀んで見ると説く所が悉く彼の幻覺と合致するやうに覺えたので、彼は感激の餘り家に祀つてある孔子の靈位を投げ棄て、從弟の李某と一緒に自分から洗禮を行つた。其の後二年を過ぎて竹馬の友の馮雲山、洪仁發の二名が加はつたので、始めて上帝會を設け、秀全と雲山は相携へて廣西省へ行つて苗族の間に布教を試みた。

馮雲山の生れた村は官祿布から少し離れた所だが、現今では其の地名だけ残つてゐる村は亡びてしまつたといふ。

廣西で二ヶ年傳道してゐるうち、廣東へ米國の宣教師ロバーツが來た。秀全は廣東へ來て其の教へを受けた。斯くしてゐる間に廣西に於ける信徒の數は日々増加して忽ち一大勢力となつた。洪秀全が彼自らの力を試むべき時が來た。それは廣西の地方人と客家との間に鬭争が起つたので、客家の一人である秀全は同族の危急を救ふ爲に不平の徒を糾合して起つたのであつた。

古來支那では不平の徒が團結すれば直ちに軍隊となるのであつて、彼等は附近の秘密結社と氣脈を通じ、軍隊の威力を以て地方官を追放した。宗教上の團體は一變して政治結社となつて、遂に倒滿興漢を叫ぶことになつた。

太平天國の亂は斯くして起きたのだつた。一八五〇年六月兵を擧げて廣西を征服し、進んで雲南に入り、榮安城を占領した時、洪秀全は始めて太平天王と自稱し、部下の將帥に王公の爵位を授けた。一八五三年一月には武昌を占領し、水軍を以て長江を下り、九江安、慶撫、湖太平等を陥れ、三月十九日には早くも南京城を攻略し、之を首府と定めた。

太平天國軍を目して清朝政府は卑しんで長髮賊と罵つたけれども、それは賊と云ふ可く餘りに立派な組織と指導精神とがあつた。近世中國の革命精神は全く此の時に興起したのだつた。當時歐米各國は此の動亂に對して非常なる興味と注意とを集中した。清朝を助ける者と、太平軍に好意を寄せる一派とあつた。けれども、結局列國の援助が時の朝廷や政府に傾いた爲めに太平天國は十年にして一時に土崩瓦解の運命に達してしまつたが、此の事が後年まで中國人の革命精神を刺戟したことは非常なるものである。殊に洪秀全を出した廣東省地方に於ける彼の人氣は寧ろ崇拜的なものだつたと思はれる。孫逸仙が幼年の頃村童と遊戯する時は必ず自分が

洪秀全になつて戦争ごつこをやつたといふことは有名な話だ。

一五四

漸く雨も止んだ。

廟の前には広い空地がある。其の南の水田には蓮が作つてある。それから更に南の方は一面の稲田で遠望殆ど眼を遮る物もない。蓮池には満々と水を湛へてゐる。村は西から北へかけて土で造つた家が五六十戸ばかり固まり合つてゐる。北の方に遠く連山が横はつて見える。村の中程には雑木林がある。泥土の壁と壁との間を小徑が右に折れ左に曲つて付いてゐる。豚の臭氣がはじめと鼻をうつ。まだ十分に雨を含んでゐる空は村の上に低く垂れてゐる。

曠世の英雄洪秀全が生れた村にふさはしいやうな雄大さ、淋しさがあつた。彼が生れた家のあつた場所だといふ所は、今では祠廟の横手の道路になつてゐる。

私達は前の廣ツばで石に腰を掛けたりして時間を過した。歸りの汽車は午後三時にならなければ來ないのだから、それ迄時間があり過ぎるのだ。一行に従いて來た廣東カントの巡警達は退屈しカントのぎに腰を付けてゐる十二連發の短銃を蓮池の方へ向けてパン／＼發射したりした。

洪勝元氏がやうやくのことで洪秀全の兄の子の嫁といふ八十八歳になるお婆さんを連れて來

た。お婆さんは廟の門の壁際にある石の腰掛に腰を掛けてニコ／＼笑つてゐる。何を聞いても

「耳が遠くて駄目だ」と答へるだけだ、全く素晴らしい婆さんだ。

私達はそろ／＼歸途につかうとして、以前の門のある廣場の方へ行つた。其處の井戸は大きくて水も綺麗だつた。見てゐると村の女達が水桶を擔いで汲みに來る。其の女達の髪は歌麿の繪よりもつと鬢や髻をつき出した素晴らしい古風の髪形である。それへ長い簪を挿してゐる。水を汲んで行く姿が一幅の風俗畫になつてゐる。

私達は村を出て堤防の上の道を歩いて戻つた。途中で砂原のきれいな場所を見付けたので其處でみんな辨當を開いた。辨當をつかつた後で砂の上に仰向きに寝轉んだりした。

驛へ戻つた時はまだ一時頃で大分時間があつた。一行は附近の村に開かれてゐた市を見物したりして時間を消して午後三時の汽車で廣東カントへ歸つた。

一五五

ない雄大な建築美術の極致を發揮した無數の堂塔伽藍が現れ、さらに城壁に囲まれた三百年前の支那の皇帝の壯麗限りない宮殿が出現したなら、私は恐らく感極まつて腰を抜かしたに違ひない。

けれども私はヘドこそ嘔いたが今いつたやうに飛行機で飛んで来て、ポツンと承德へ抛り出されたのだ。それは六月廿四日の午前十一時だつた。私は飛行機の中から、重たい鞆を提げて降りた。そこは砂ツ原で、火のやうな風が吹いて来た。私は意氣地なくフラ〜となつたが、こゝで眼を廻してしまつては仕方がないから一生懸命我慢してゐると、一人の將校が私の側へ来て

「あなたMさんですか」といふ。

「左様で御座います」

「今朝關東軍司令部から電報が来てゐました、多分これで來られるだらうと思つてをりました。あの自動車へお乗り下さる」

といふ。見ると立派な自動車が來てゐる。それへ乗つて、少し落ち附いて邊りを見ると、その近くを河が流れてゐて、飛行場は河原に續いた砂ツ原だつた。市街も近くに見える。市街に

續いた山際に楊柳の茂つた村が見える。

「あゝいゝ村がある、こゝにゐる間にあの村へ行つて見よう」

そんなことを考へてゐると、今私を乗せて來た飛行機は、今度は錦州行きの客を乗せて譚なく飛び去つた。

「お待ち遠さまでした、さあ行きませう」

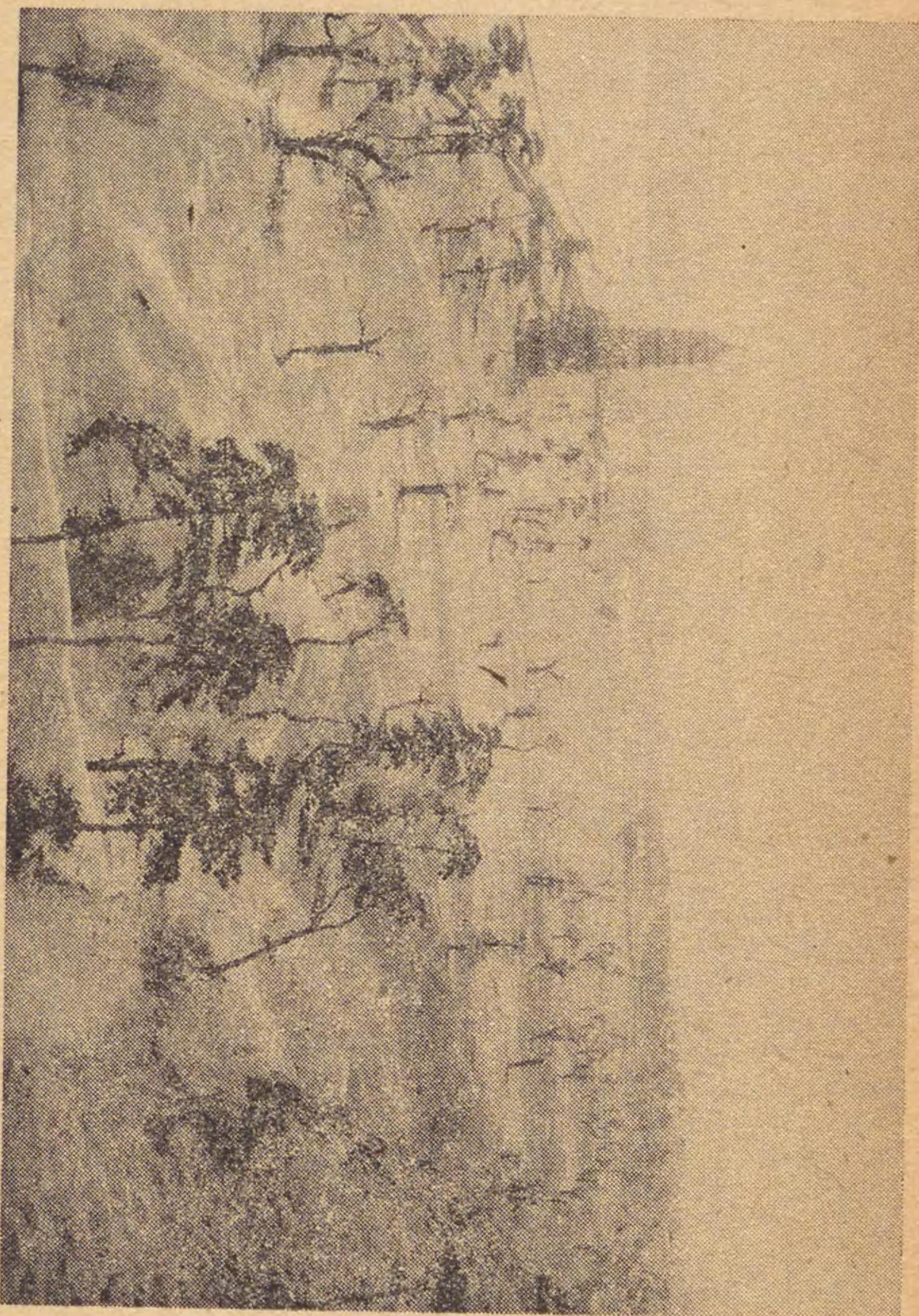
とさつきの將校が車の中へ入つて來ていつた。自動車は市街の方へ走り出した。その時分から私は再び苦しくなつて來た。よほど悪酔ひをしたらしい。

「大分酔はれましたかな」

「どうも苦しくて」

「飛行士も氣流が悪かつた、歸途はもう少し高く飛んで見るといつてました」

廣い道路へ出た。そこには軍馬が澤山ゐた。その道路の正面に城壁があつて、そこに大きな樓門が立つてゐる。門の柱に「第〇〇團司令部」と書いた板がかゝつてゐる、そこで自動車を降りて、私は自分の鞆を提げながら將校の後へ附いて行くと、次から次と宮殿らしい古色蒼然たる建物の中を通り抜けて、奥へ奥へと進んで行く。すると奥の方から別の將校が一人出て來



(河熱) 景全 桂山 景 遊

て、

「やあMさんですか、お待ちしてました」

と、今度はその將校が、前の將校から私を受け取って、さらに宮殿の奥深く私を伴れて行かうとしたが、その時はもう私は昏倒しさうになつてゐた。

(二) 湯砂輔の風呂

「どうかしましたか」將校は驚いていった。

「飛行機で酔ひまして、氣分が悪くて」

「成るほど、さういへば顔の色が悪い。それぢや少しも早く横になつて休むほうがいいです。取り敢へずこの部屋でお休みなさい」

將校はさういつて私を直ぐ横の一室へ伴れて行つて寢かして懇に介抱して呉れる。後でその人は師團の高級副官淺間義雄〇〇であることを知つた。あまり大きくないガランドウの部屋だ。私は將校のいふ通り、上衣やワイシャツも脱いで、肌シャツ一枚になつて、アンペラを敷いた坎の上に寢てゐた。すると軍醫が来て脈を見て何か薬を飲ませて呉れた。間もなく私は睡

つてしまった。

一度眼が醒めると、先刻まであんなに好い天気だったのに、豪雨が襲来してゐた。すさまじい雷鳴が宮殿の建物を振動させた。雷鳴と雨の音をきながら、再びウツラ／＼睡つて、今度眼を醒ました時は雷も雨も止んでゐた。時計を見ると三時半だった。

私は坎に腰を掛けてボンヤリしてゐた。そこへ一名の上等兵が銃を擔いで入つて来て

「眼が醒められたら、高級副官殿がお目に掛かるというてをられます」

上等兵の後へ附いて行くと、ダダツ広いランドウとした宮殿の建物の中を通つたり、石を敷いた庭を通つたり。廻廊を通つたりして奥へ奥へと進んで行つたが、やがて土塀に附いた小門を外へ出ると、直ぐ池のふちへ出た。池は何處まで續いてゐるか分らぬくらゐ複雑に入りくんだ形をしてゐて、一面に眞菰が生えてゐた。池を横断してゐる塘を歩いて行くと長い石橋があつて、其處には三つの樓閣風の建物があつた。雨のために池の水が増して動揺してゐた。地面にも大きな水溜りがあつた。

二、三町先の、可成り離れた場所に、一廓を成した住宅風の建物があつた。こゝも雨で庭一面水浸しになつてゐた。西本部隊長とその副官達がこゝに住んでゐるのだつた。

私は浅間〇〇の居室へ通された。浅間氏はシャツ一枚で寛ろいでゐたが、私にも直ぐに上衣を脱ぐことをすすめ

「こゝは暑いから外にしませう」

といつてテーブルと椅子をタ、キの廊下へ出させて話をした。

「もう気分は好いですか」

「もう大丈夫です、先刻はえらいお世話になりました」話しながら私はハツカ入りの砂糖菓子が無闇に食べて熱い茶を飲んだ。

土塀で圍はれてゐる狭い庭に黄色い雨水が一杯溜つてゐる。まだ蒸し暑くて雨が來さうだ。

「本部隊長は生憎新京へ行かれてお留守でしてね、それでなければ御紹介するのですが、然し本部隊長の住まつてをられる部屋も後で御案内するから御覽なさい。元來これも宮殿の一部なんです、近年は湯玉麟の息子の湯砂輔といふ男が住んでゐた家ださうです。その湯砂輔が造つた風呂場があつて、われ／＼は大層重寶してゐます。今に風呂が沸きますから、一風呂入つて御緩りなさい、宿屋も御案内しますから」

浅間〇〇は米澤の人だといつた。本間久雄氏と中學時代同級だつたさうだ。

本部隊長の居室を一寸覗かせて貰った。それはもう一つ奥の建物で、壁ばかりの、何の裝飾もない質素な部屋だった。

湯砂輔が拵へた風呂といふのへ案内されて浅間氏と一緒に入浴した。白タイルで張つた廣々とした立派な風呂だった。私はその後も時々この風呂へ入れて貰ひに来たが、熱河で見た唯一の現代的な風呂だった。私達が入つてゐるところへ、○團副官吉村大尉もはだかが入つて來た。吉村氏は若くて見事な體格の持主だった。

日暮ごろ、浅間、吉村兩氏と一緒に離宮の門前から自動車に乗つて、凸凹の道を走つて市街の方へ出て、「熱河ホテル」といふ日本人經營の旅館へ行つた。

(三) 美人の多い承德

私は六月二十四日から七月三日まで足掛け十日承德に滞在した。

市街は四面山で圍まれてゐるあまり廣くない平地の一部にあつて、街の一部分は低い山の上にかかつて家屋が散在してゐる。山はみな圓味があつて、しかも峻險だ。山は何れも奇岩に富み、樹木は一本もなく、緑の草が生えてゐる。水は綺麗である。殊に離宮の池から流れ出る河

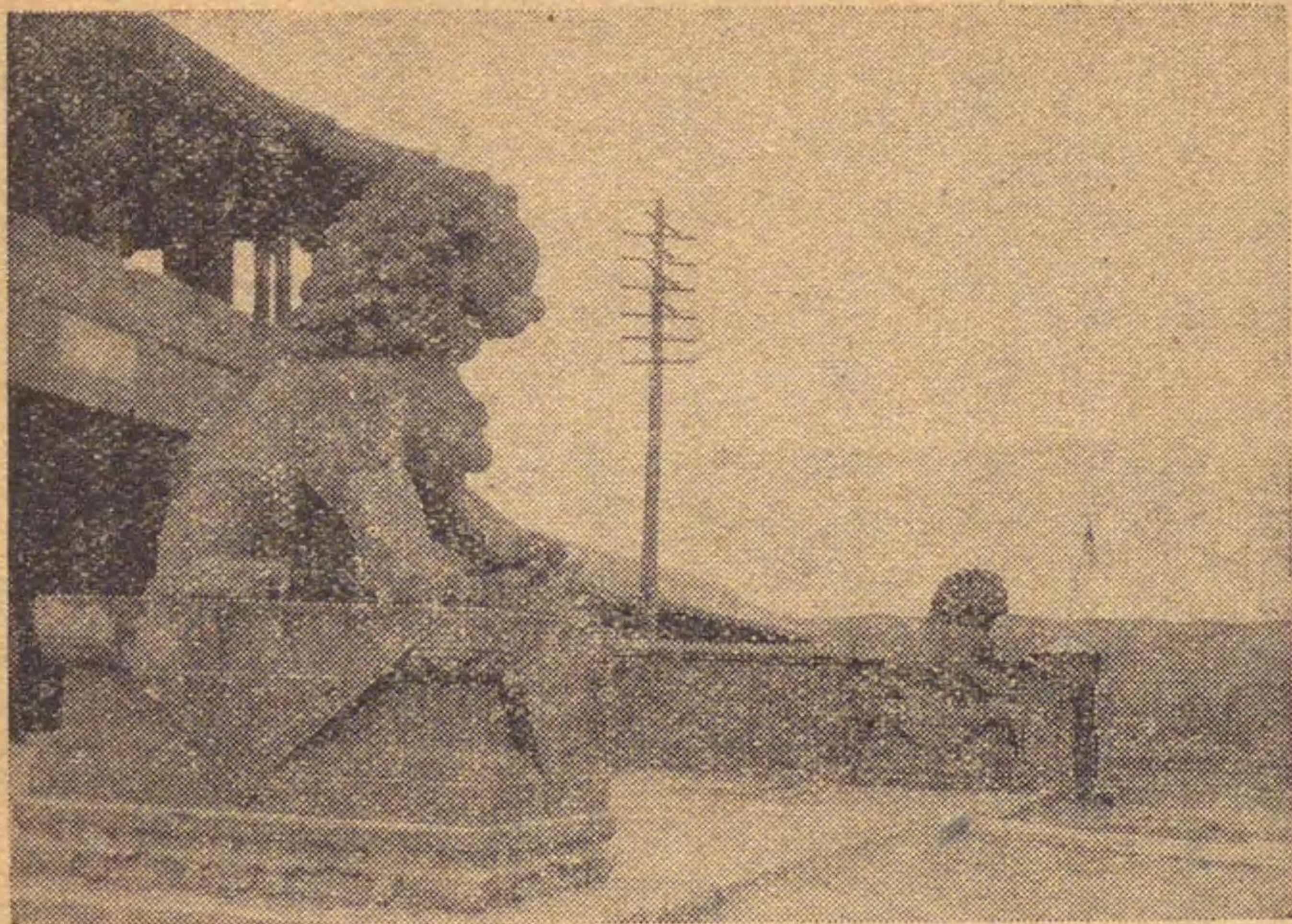
の水は清冽だった。

私が行つたところは、土着の住民は皆平常通り商賣を營んでゐた。表通りでも横町でも、商店で店を開いてゐない家はなかつた。土着民の商業が、どの程度に發展してゐるかは知らないが、日本人が澤山入込んでゐるために、却つて景氣がいいのではないかと想像された。洋車(人力車)などは適例で、日本人が乗り廻すため、車の數が不足なくらゐで、滿洲一帯や北支に比べると余ほど車賃は高い。町に骨董屋が四軒ある。これなども日本人の佛像漁りで繁昌してゐる。それだけに法外な値段を吹つ掛ける。支那料理店と名附けるような家は一軒しかない。それも極くお粗末なものだ。支那の旅館がありさうなものだが、町中歩いて、飯店とか旅館とかいふ看板を出してゐる家を發見しなかつた。日本の旅館も「熱河ホテル」一軒である。戦争前には、支那の藝娼妓といふ者も多少ゐたさうだが、現在は何處へ行つてしまつたのか姿を見せない。逃げてしまつたのだといふ人もあれば、否匿れてゐるのだといふ人もあるが、どつちにしても、容易に發見出來ない。雜貨商とか、呉服商とか、洋品店等に比較的大きな店舗があるが、どのみち田舎だから大したことはない。

土着民の日本人に對する態度は至極穩やかだ。これは自惚れでなく、好感を持つてゐるよう

に思はれる。大體この土地は今度の戦争でも、鐵砲一つうたぬうちに支那軍が退却してしまつたから、戦禍といふことは少しも知らなかつたばかりでなく、暴戾な湯玉麟を追つ拂つた後へ規律嚴肅な日本軍が入り、治安は完全に維持され、その上、省政府でもいろ／＼と住民のために計つてゐるから、一般商民としては從來と比べたら寧ろ結構過ぎるくらゐだ。が、何分まだ日が浅いから、その邊がよく徹底しない憾みがある。土着民としては、新來の日本人に對してはまだに多少の恐怖心を失ひ切らない觀があるのは止むを得ないことかも知れない。

然し、それも一日一日と薄らいでゆきつゝあることは確かだ。學校などは全部前通り開校してゐる。快活な女學生が三々伍々町を歩いてゐる。女學生ばかりでなく、一般の女（中流以上の）もちよ／＼町で見掛ける。一體支那の女性はあまり出歩かない習慣でもあるが、戦争中は全く姿を匿してしまつてゐたさうだ。それが近來ぼつ／＼顔を見せ初めたのだといふ。承德は非常に美人が多い處だといふ。誰でもさういふ。元來この地方は滿洲旗人を多く住まはせた土地だから、その子孫が現に澤山残つてゐるが、彼ら貴族の血統が一般に混じて、容貌端麗な女が多いのだといふ。これは熱河に久しく在勤する中根副領事が私にさういつて話したことだ。その時、奉天から視察に來てゐた蜂谷總領事も、承德へ來て二日ばかりしかならぬが美人



マコ狗のあゝる風景

を見るので驚いたといつてゐた。

事實、山の手の町などを歩いてゐると、奥深さうな屋敷の門のところに上品な細君や、若い娘などが出てゐるのを、往々見掛けることがある。けれども、私が承德で見て一番美人だと思つたのは、或日、省政府へ勤めてゐる黄さんといふ土地の人の案内で、町端れの山の中段にある石刷りを賣る家へ行つた時だつた。それは極端に貧しくもないらしかつたが、決して豊でない家で、黄さんが門扉に附いてゐる鐵の鑲をカチ／＼と鳴らすと「何方」と門の内側から答へて、黄さんが何かそれに對して答へると、門を外して半分扉を開けたので、私ものぞいて見ると、粗末な縞のボタン付きの下着に褲子クハズをはい

たばかりの、十八くらゐの色の白い、大きな黒眼の、鼻や口元の締つた。愛嬌のある娘が立つてゐたので私は吃驚した。

黄さんが「石刷りを買ひに来た」といふと「今日は父親が石刷りを取りに山へ行つて留守だから明日来て下さい」といふ。石刷りなんか、どうでもいい、ような氣持になつたが、その日は素直に歸つて翌日早く、黄さんを促し立て、その家へ行くと、今日は五十餘りの鬚のある親父がゐて、乾隆帝の御筆などを何枚も出して見せたが、昨日の娘は影も見せない。石刷りはどうでもいいから娘を見せろともいはれず、ふしようぶしよう、石刷りを三枚ばかり買つて、それとなく尋ねると、この親子も矢張り旗人の裔だといふことだつた。

(四) 日本氣分漲る

熱河(承德)には、軍隊以外の日本人が三百名以上ゐた。尤も、日増しに殖えつゝある状態だから、現在はそれよりも増したことだらう。領事館警察で聞いた統計によると、その内百二十人くらゐは、藝妓、女給、娼妓といふ種類の女で、その商賣に關係する男が、二、三十人、即ち全日本人の約半數は水商賣關係の者だといふ。

いはゆる娘子軍なるものが眞つ先に乗り込んで行く。これは大抵の場合さうださうだ。第一回到述べたように、この連中は皆錦州邊からトラックに乗つて遙々と遠征して來るのだ。新たに承德へ到着するトラックの、米だの味噌だの積んだ上に、浴衣や簡易洋服を着て、洋傘をさし、ハンドバックを持つたそれらの女性が、三人四人と乗つて來るのを度び／＼見掛けた。土匪の巢窟といふやうな所も通つて來るのだが、實に勇敢なものである。それは上品でない金儲けを目的にして來る女性群ではあるが、一概に輕蔑することは出來ない。なぜかといへば彼女達は單なる金儲け慾ばかりでなく、一種の征服慾といつたやうな冒險心をも皆多少づゝもつてゐるのだ。なか／＼内地でグウタラしてゐる婦人達が想像するやうなものではない。

今度私は滿洲と北支那方面を旅行して特に感じたことは、各地の植民地における日本の新女性群の進出だつた。従來支那や滿洲へ出稼ぎ女といへば一口に天草生れと決つたもので、朝鮮へは島根縣といつたやうな具合で、知識の程度の極めて低い階級であつたのが、最近では東京や神戸邊から、ダンサーとか女給とかいふ名目で、知識の標準の高い、潑刺たる近代的女性が、ドシ／＼と洪水の如く押し出して行くので、昔ながらの山陰道や九州の片田舎育ちは隅つこへ壓倒されてしまひ、極く低い階級を相手とするに過ぎなくなつてゐる。内地における生活難も

あるが、それよりも解放された女性が、束縛の多い内地の生活を厭ひ、奔放自由な植民地の天地に新らしい運命を求め、少くもさうした空想に驅られて飛び出して行くといふ傾向が著しい。かういふ氣持を尊敬したり奨励したりして、いゝか悪いかは別として、少くも内地でポヤ／＼くすぼつてゐる女達よりも遙かに痛快である。

熱河に入り込む女性群にも、相當優秀な者も混つてゐる。低い階級を相手にする者には朝鮮婦人が多い。軒別で何軒あるか調べなかつたが、少くも二十軒以上の、料理店、カフェ、銘酒屋といふ商賣が出来てゐる。カフェ・クロネコ、カフェ・スマラン、カフェ・アケボノ。いはく何、いはく何。藝者のゐる日本式料理店では、山海といふ家と、祇園といふ家があつた。朝鮮式の銘酒屋に至つては最も數が多い。

クロネコ、スマラン、アケボノ等は大通りにあつて、最も繁昌してゐる。支那家屋そのまゝの煉瓦や石を敷いた土間へお粗末な木製のテーブルと、木製の腰掛をならべ、そこでは絶えず「酒は涙か溜息か」だの「丘を越えて行くよう」といふレコードを掛けて日本氣分をたゞよはせてゐる。ビールは一本一圓五十錢だつたのを値下げして、二本二圓五十錢程度で賣つてゐる。それでもビールはいつでも品不足だ。

私が出掛けた六月ごろの日本の新聞には、熱河は食糧不足で日本人は辛うじて一日一回の米食にありつくと載つてゐたが、現在はそんなことはなく、米、味噌、醤油等に不自由はない。たゞ日本人は支那の材料を使ふことに不慣れで、一から十まで日本の物を使はうとするために副食物を作る場合に不自由をするのだが、副食物は熱河土産の物だけでも事は足りるのだ。また飯にしても、粗悪な米の飯を食ふよりは支那の饅頭のはうがどれだけ美味だか知れない。饅頭にもいろいろ種類があるが、上等のになると、食パンなどより遙かに美味である。

山海だの祇園からは夜になると三味や唄の聲が聞える。酒幕式スベチヒの朝鮮女の店では、門口へ女が出張つて盛んに客を呼び込んでゐる。

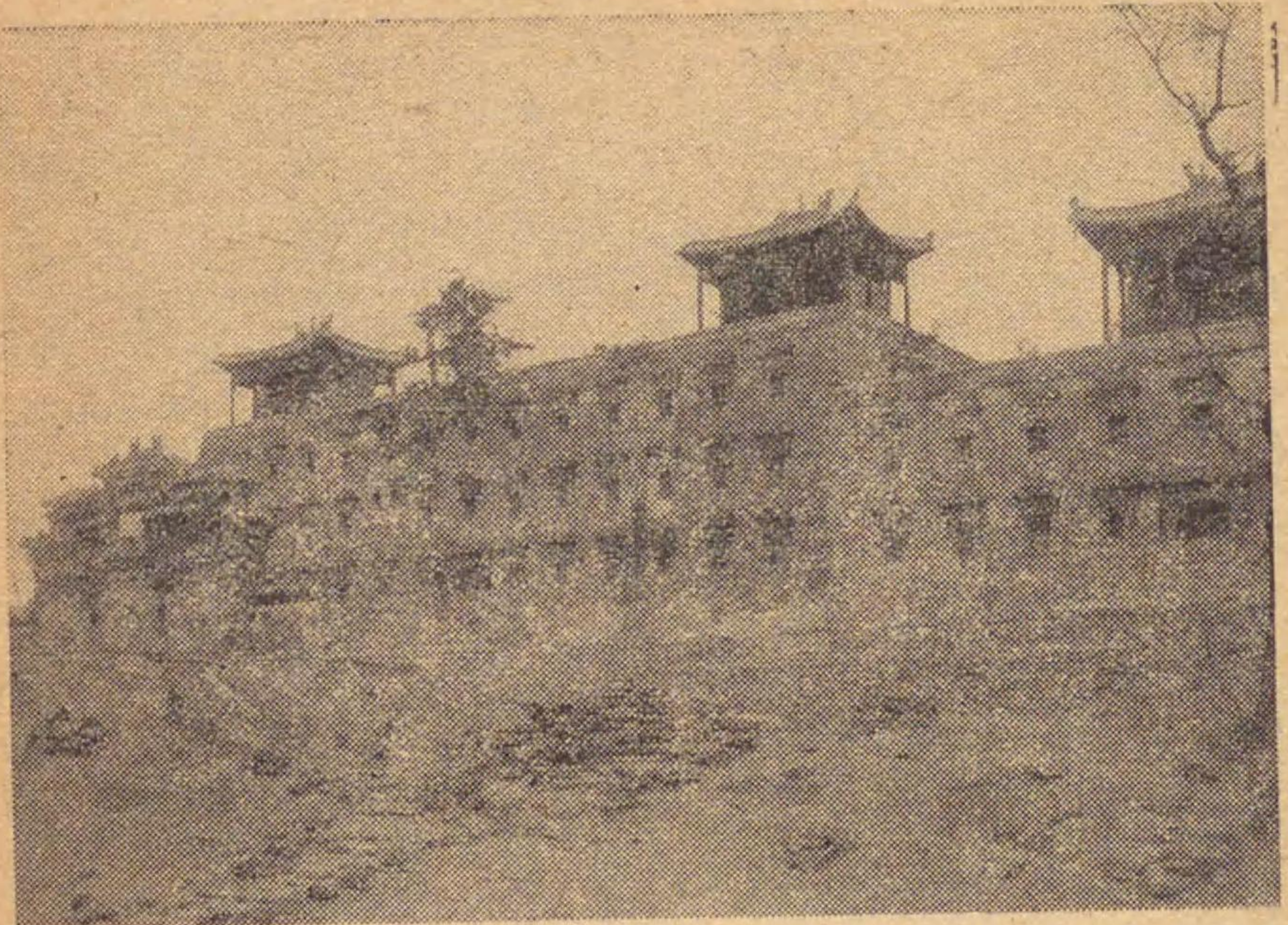
夜更けてから、夜半の一時二時といふころ、街路へ出張つて来た女が甲走つた聲を擧げて酔つぱらひの男とフザケ散らす。男どもが蠻聲を張りあげて詩吟をやる、都々逸を流す、「島の娘」を歌ふ、笑ふ、喚く、喧嘩が初まる。大亂痴氣だ。それが毎晩路上深夜の出来事だ。熱河の土着市民は日が暮れると大戸を閉めてしまつて殆ど外出もしない。××××××××××××××××。大體支那ではどんな田舎へ行つたつて往來で高聲放歌するなどといふベラボーはない。況んや深夜においてをやだ。これだけは承德の支那人が呆れ返つてゐるだらうと思ふ。

(五) 阿片烟と月と

私が熱河へ行つたころは、てうどアヘンの花が咲いてゐた。花盛りは過ぎてゐたが、まだ六七分通りは花があつた。花が咲き切つてしまふと、そのあとへ眞つ青な球が出来る。球の大きさは大が鴨の卵くらゐある。よく出来た畑だともつと大きい球もある。その球へ、小さいナイフのような物で浅く傷を付けてゐる。さうするとそこからヤニのような液が流れ出る。それがアヘンだ。

花をつけてゐるのもあれば、すでに球になつてゐるのもあつた。そして、一本の莖に一つしか花を咲かせないのだ。純白の花もあれば、淡紅色のものもあり、薄紫のもあつたが、普通の罌粟のように深紅のものはあまり見掛けなかつた。何故かといふと、アヘンは白い花の罌粟から採るのが最も上質だからだ。私は罌粟の花といへば赤いものゝように思つてゐたが、白もあれば薄紫もある。そして白でも薄紫でも矢張り美しいのである。あの薄紙よりも薄い、羽毛のような軽い花が畑一めん咲き揃つてゐる光景は全く譬へようもなく美しい。

花の繊弱な感じからも來るのだらうが、その花を見てゐると、後宮の妃嬪の、香り高い輕羅



承徳マラ廟

の裳裾を聯想する。心に毒を持つた女性の、飽くまでも繊弱な蟲惑である。

熱河省内で、アヘンの産額年六、七百萬圓に達するといふ。アヘン栽培は、現在のところ、熱河省唯一の産業であり、財源であるといつていい。前省長湯玉麟は、自分の息子をアヘン專賣局長に据えて、思ふ存分私服を肥やしたのだ。その後をうけて今度滿洲國政府が、アヘン政策をどうするかといふことは興味ある問題だが、それは一朝一夕に解決出来る事柄ではないだらう。この種の政治問題を、ある主義や理想のみで急に解決しようとすることも無理である。

そんなことは考へないで、少し涼しくなつた夕暮れなど、美しいアヘン畑を眺めてゐると、

知らず、何かの空想世界へ引つ張り込まれるような氣持になる。

一家打ち揃つてアヘン畑へ出てゐる。娘も母親も出てゐる。劉海を房々と下げた娘が、腰から上だけ花の中から現してゐる。そんな光景は、花の美しさを數倍強めずにはゐない。

承德の町の中でも、一畝か二畝の畑があると、そこへ野菜を作らずにアヘンを栽培してゐる。その家の家族がアヘンを採取してゐる。てうどその花のような淡紅色の服を着た娘が、小さい妹か弟を抱いてあやしてゐる。太陽が山に沈んで、夕暮がたちこめてゐる。

そんな光景は、アヘンの花が人生を美しくするための存在のようである。

私が行つたころは月がなかつたが、歸るところには六日か七日の月が空にかゝつてゐた。月のない晩は星が降るようだ。雨あがりの澄み切つた空に現れる星は、まったく手が届くように近く見えて、そして、どんな小さな星でも、空にあるだけの星が見えるような氣がする。

月よりも星の方が、かへつて自分に親しみ深いような氣持がした。夜更けて旅館の露臺へ出ると、體を星に包まれたように思つた。

けれども、月が出てみると月もよかつた。

或晩、可成り更けてからE君の家へ遊びに行くと、暑いので庭へテーブルを出して、E君や

O君やS嬢達が涼んでゐた。それは立派な支那家屋の住宅で、平らな石を敷き詰めた広い庭だつた。月が出てゐたけれども、テーブルの上には石油ランプがおいてある。熱河には電燈はない。

私達は、ビールやウイスキーを飲んで興に乗じた。私は燈下で白扇に松の繪をかいたりした。S嬢は黒いイヴニングドレスを着てゐた。彼女は二十二歳のタイプストだ。大連で生れて、大連の女學校を卒業した、頗る近代的な才媛だ。

「一つ踊りませう」

テーブルの上へ蓄音器を持ち出してダンスレコードを掛けた。私はSさんとワルツを踊つた。石を敷いた庭のところどころに草花が植えてあつた。冴えてゐるけれどあまり明るくない月が庭や屋根を一めにギラ／＼光らせてゐる。月はあまり明るくないはふがいとと思つた。

庭に出てゐるつをどれば夜ぞふくる熱河の月のよろしきところ

(六) 西、川原兩將軍 (上)

〇〇には、西本部隊長と、川原〇隊長と、二方をられる。私は川原〇隊長には行つて間もな

くお目に掛つたが、○部隊長は新京へ行かれて不在であつたためお目に掛る機會はあるまいと思つてゐたところが、幸運にも私が○○を去る前日、本部隊長は飛行機で歸營された。早速私は○○○○○○高級副官○○○○の紹介で○部隊長にお目に掛ることが出来た。

例の湯砂輔が住んだ宿舎で、夕景くつろいでをられるところへ突然訪問したのだつたが、○部隊長はキチンと軍服を着てゐた。思ひのほか若く見える丈の高い方だつた。

私は前からこの○部隊長に關する逸話めいた話をたび／＼聞いてゐた。その幕僚達が○部隊長のことを話す時には、心から讚嘆して——といふよりもむしろ、どういつて自分達の○部隊長を自慢しようかとしてゐるかのように見えるほど一致して心服してゐる風が見えた。それによつて私はこの○部隊長は並々ならぬ人であることだけはほど想像してゐた。軍人の典型にも種々あるが、いはゆる武人肌の豪快な人と、それと反對の沈靜で思慮綿密、數理的頭腦において傑出してゐる人と、そのいづれともいへないが徳望を以て多くの部下の信頼を得る人とがあるようだ。西本部隊長はこの中の最後の例にあてはまる人のように思はれた。

一言にしていふと、この人は人格者である。今上陛下の侍從武官を多年奉仕されたといふことも、この性格の一面を語るものだらう。といつて決して道學者的の堅苦しい人ではなく、恐ろしく物のわかつた苦勞人で、時々○○連があつといはせられることがあるさうだ。酒間興至ればステ、コを踊るさうだが、それが驚くべき本格的の藝で、へたな藝人は足下へも寄り附けぬといふことだ。

私がお目に掛つた印象も、謹直ではあるが、まことに氣のおけない親しみやすい人だつた。

「部下が皆よく働いてくれました。わたくしなどは自分でどうといふことはない。部下の將校や兵が勇敢によく戦つてくれたのでどうやらお役目を果すことが出来たのであります。戦線へ出てゐて負傷しても容易に後方へ去らうとしない。大概の傷は軍醫に頼み込んで隠して治療してしまふ。知れると後方へ下げられるからです。だから今度の戦争で實際の負傷者の數は發表されてゐる數より遙かに多いのです。よく／＼重傷の者は仕方がないから後方へ下るが、それを見舞ひに行くと、最初にいふ言葉が、相濟みません、といふ。負傷して間を缺いて濟まぬといふのですが、濟まぬのはこつちのいひ度い言葉です。全くあべこべです。このごろも野戦病院を見舞ひに行くと、或る兵は重體で助からぬといふのです、わたくしがその兵を勵まして其處を去らうといたしますと、突然その兵がわたくしを呼ぶのです、その時わたくしは直覺的に、何かわたくしに遺言するのだらうと感じました、それでどのやうな遺言でもわたくしは聞いて

つた。

川原隊長は、赤ら顔の童顔に、短かい顎髯を貯へ、朗々たる音聲の持主で、一見豪快味に富んでゐる。有名な挺進隊長として、いかにもその人らしい武人である。と同時に、右の話でもわかるやうに用意周到、水も漏らさぬ細心なところもある。油断大敵を戒めたまふ 明治大帝の御製をその玄關に見て私は「なるほど」と思ひ中つたのである。

「日露戦争の時、私は少尉で従軍しました。私の従卒に豊留熊吉といふものがあつてそれが戦死いたしました。戦争が終つて國へ歸つてから或時私は豊留の家を訪問しました。すると七十餘の豊留の父と母とがをりましたが、父の方は、俵が戦死したといふ報せが來た時、氣がどうかなつてしまつて、それ以來、何もわからないのださうでした。慰めてやりたくても、相手がさういふ風でいたし方がない。まことに、悲惨の思ひを致しました。」

「また、かういふこともありました、私の小隊の分隊長であつた軍曹で、茶屋といふ姓の者がこれも戦死しましたので、その遺族を訪ねて行きますと、夕方のごとで、ランプをつけてありました。私が行くと、茶屋の女房がをりましたが、三つばかりの子が寝かしてあり、自分は生れたばかりの子を抱いて出て應對しました。まことに氣の毒でいふべき言葉もありませんでし

た。茶屋は私の直ぐ側で一發の下に戦死したのでした」

「われ／＼はえ、ことをしとるのだ。陛下のため、國のために戦つてをるのだ。武人が戦場で死ぬることは本望である。事實、皆喜んで死んでをる。が、然し、遺族は氣の毒でござす。だから、戦争は勝たねばならぬ、が、成るべく犠牲者を少くしたい、私は常々さう思ふのでござす。軍人とすれば、戦さに出て死ぬのは何處で死んでも同じやうなものだが、その中でも、萬里の長城で倒れたといへば、これ以上の本懐はあるまいと、私は部下にも申したことです。いはゆる死所を得た人で軍人道徳から申せば理想郷に達したものと申すべきである。しかし、死なうと思つて死ぬるものではない。だから西郷南洲も申したやうに死を恐れず、死を求めず――これが武人の眞の心持であらうと思はれます。おかげで今度の戦さは、死傷者も出しましたが、結果から申せば豫想外に犠牲者が少かつた、これだけは誠に有難いことでござりました」

「トラックに乗つて雪の中を進軍して參ると、道路に敵の屍體が累々と横たはつてゐる。敗けて逃げる敵であるから死骸の始末も出來ぬ。その儘捨てゝある、それを見ると敵味方の恨みも憎しみも起りませぬ。これにも親があらう妻子があらうと思はれて來る。せめてその亡骸だけでも始末をしてやりたいと思つて、古北口の敵の屍體を集めて埋葬した場所へ、支那軍勇士之

墓と書いて墓標を立てました。まあ、戦の中でも、さういふ氣持は起きるものです」

××××××××××喧傳されてゐる川原隊長の談話は、惻々として人の心に迫る人情の温かさばかりだつた。意外とするのは本文の記者ばかりではあるまいと思ふ。

挺進隊が熱河を進軍する時、百臺のトラックを連ねて晝夜兼行で進んだ。本來戰術上からいへば、夜間の行軍には、敵に所在を知らぬやうに消燈して進むべきものだが、あの時はあべこべに百臺のトラックが全部煌々たるヘッドライトを點じて進んだのだつた。それは熱河のやうな未開の土地では數臺の自動車が揃つて走るのでさへ未だ嘗て見ざる光景である。それを百臺のトラックが兵士を満載して威風堂々と山野を行進し、殊に夜間ヘッドライトを點じて延々長蛇の陣を作つて進むことは、百臺は二百臺にも三百臺にも見えて、敵を威壓する効果があると信じたからであつた。果せるかな敵は夥しい日本軍が攻めて來たと信じて、殆ど戦はずして承徳を放棄して退却してしまつたのだつた。かういふところに川原隊長の他人の追従を許さざる所がある。

北清事變の直後、當時少尉に任官したばかりの川原隊長は北京の駐屯軍勤務を命ぜられて赴任した。その間に上官の命で、北京から古北口まで旅行して、あの邊の地形を踏査して歸つた

のだつた。××××××××××××××××、古北口を攻撃した時、測らずも卅年昔の自身の測量が非常な役に立つたのだつた。

(八) 張海鵬軍將

張海鵬將軍は幸運な人だ。將軍に向つて

「あなたから人物評を伺つて見たい。たとへば張作霖とか馬占山とかいふ人の」

と私が質問した時、將軍は坎に腰を掛けて揉み手をしながら

「私は他人を評するほどの資格はないが、たゞ、嘘を吐かずに世の中を通つて來た。張作霖は年齢もほど同じくらゐで大體同じようなことをして來た人間だが、あの男はよく嘘を吐き、そして權勢のある人に近附いて御機嫌を取ることが上手だつた。それがために出世が早く、一時はあんなに榮華を極めたが、私よりも早くあんな死に方をしてしまつた。私は何の手柄も立てず平凡な生涯ではあるが、今日この齡になつても誠に安心した生活をしてをります」

と答へて、馬占山のことは一言もいはなかつた。

將軍が私に呉れた名刺を見ると、その肩書だけでも、執政府侍從武官長、熱河省警備司令官

兼管省長職務、參議府參議とこれだけあるから大變だ。齡はたしか七十とか聞いた。けれども頗る矍鑠たるもので、六尺肥大の巨軀は脊も腰も曲らない。銅色の肉附豊かな緒ら顔つるく、禿げた頭、平たい鼻。愛嬌があつて聲は音吐朗々たるものがある。淺葱色の質素な支那服を着たその恰好は一見好々爺で、誰が見ても幸運な人らしく見える。

將軍は、承德の町端れにある警備司令部の、一番奥の建物に住んでゐた。極く簡素な部屋で、坎には萬年床が取つてあつた、壁に一對の聯が掛つてゐるほかは別に裝飾もない。同じ棟の向うの部屋では幕僚連が會議をしてゐるが、將軍は別に用もないと見え、至極呑氣に、機嫌よく私に向つて喋つてゐる。それを、外交處長李香洲といふ日本語を上手に話す人が通譯して呉れる。

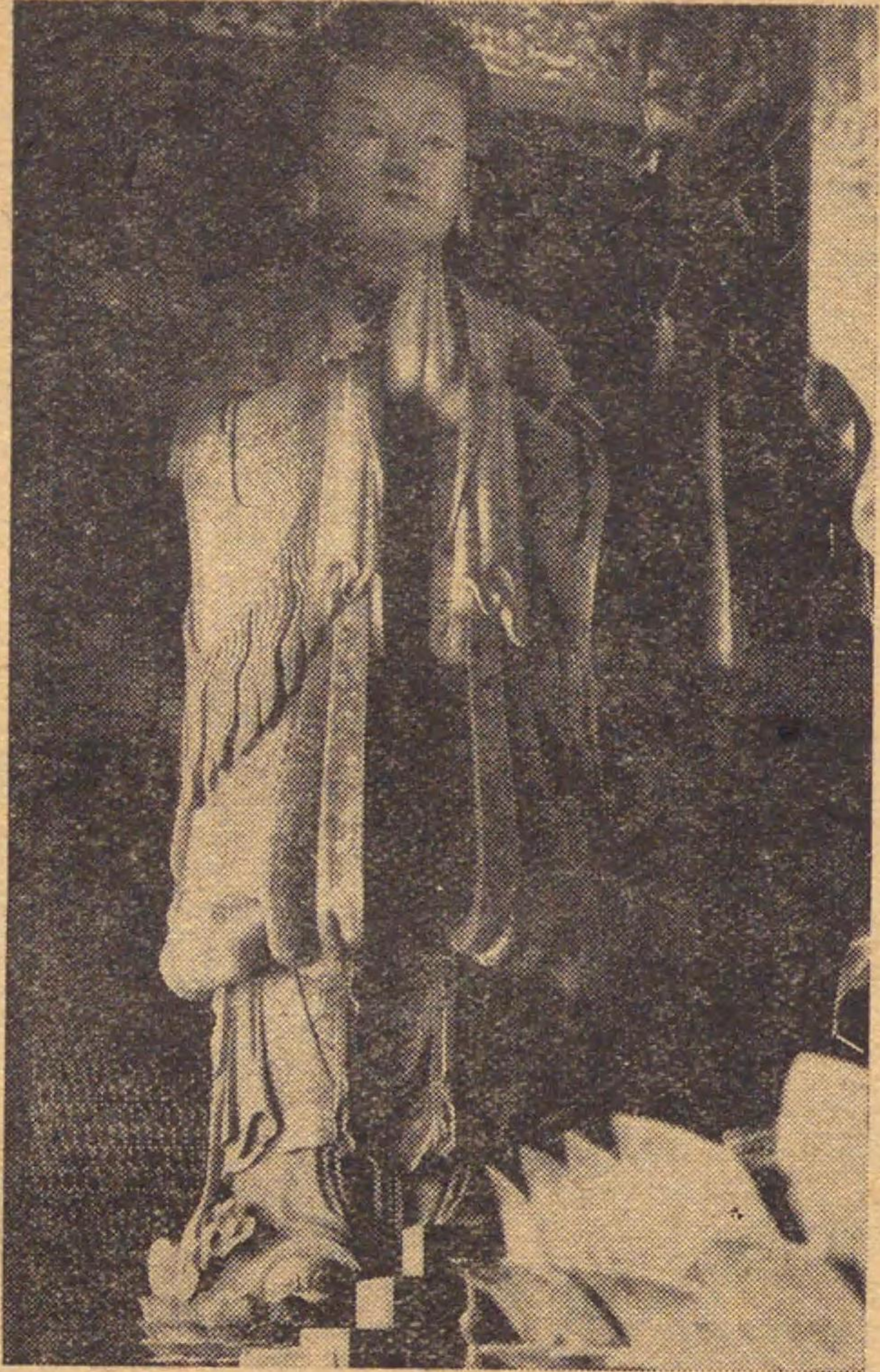
「將軍は大層宗教を信仰なさるさうですが、今度は一つ信仰のお話を伺ひたい」

と私がいふと、張海鵬將軍は我意を得たりとばかり、滔々と政治と宗教との關係を論じ出した。將軍は紅卍教の大の信者だ。そこで私はさらに將軍が信仰してゐるといふ出口王仁三郎氏のことを話題にした。すると將軍は昨年陸軍大演習陪觀に日本へ行つた時丹波龜山の大本教本部を訪問した話をした。

張將軍の政治論といつたところで、忠孝を基とする王道政治、日滿共存共榮を、しかも極めて通俗に主張するに過ぎない、がそれで澤山だ。この老人から誰が新しい指導精神を期待しよう。けれども宗教を談

じる時だけは、なかなか強い熱を感じる。信仰上のことは、個人の體驗や信念を語るのだから、談話が語彩を放つて來るのは當然だ。

將軍は、談論が熱して來ると、腹から押し出すような太い聲で、



(尺十五身長身造木) 像女の殿佛大徳承

一語々々力強く語り、そのために滿面紅を潮する。可成り雄辯である。

私は將軍と一問ばかり離れて壁際の支那椅子に腰掛けてゐる。部屋の外に立つてゐるボーイ